

高井田横穴群 I

——河川改修工事・市道建設工事に伴う——

1986年3月

柏原市教育委員会

はしがき

高井田横穴群は、国の史跡にも指定されている重要な遺跡です。この高井田横穴群を含む、広い範囲で区画整理事業が進められており、これに関連する公共事業として、河川改修工事、市道建設工事が実施されています。

調査地周辺には、古墳を始め、鳥坂寺跡や古代から中世にかけての集落跡が存在し、市内でも、歴史上とりわけ重要な地域を形成しています。できることならば、これらの貴重な遺跡を、豊かな自然と共に後世の人々に伝え、市民の歴史教育、あるいは憩いの場として有効に活用できるようにしたいところですが、昨今の開発を求める声の前に、私達の力は及びませんでした。

また、調査に先立って、事前着工があったことは、周知の事実であると思います。私達に弁解の余地はなく、今後、関係各位にも働きかけ、このような事態が二度と生じないよう、努力していく所存であります。

せめてもの教いとして、横穴群の大部分や古墳の一部は保存されることになっており、これらを如何に活用していくかが、私達の今後の課題となりました。区画整理事業の是非については、後世の人の判断に委ねたいと思います。

昭和61年3月31日

柏原市教育委員会

例　　言

1. 本書は、柏原市教育委員会が、昭和59、60年度に実施した柏原市高井田所在の高井田横穴群内における谷川河川改修工事、および市道白坂神社・高井田線建設工事の両公共事業に伴う緊急発掘調査の報告書である。
2. 調査は、柏原市建設部都市計画課（課長・山野勝彦）の依頼に基づくものである。
3. 調査は、柏原市教育委員会社会教育課 安村俊史が全て担当した。
4. 本書の編集・執筆・製図・写真は安村が担当し、仲井光代が一部を分担した。
5. 本書で使用した方位は、全て磁北であり、標高は全てT. P. である。なお、真北は磁北より約6°東に偏している。
6. 調査中に、奈良大学教授水野正好氏を始め、多くの方々の助言を得た。記して感謝の意を表したい。
7. 地元の方々には、調査中、砂埃や騒音によって多大な御迷惑をおかけした。無事に調査を終えることができ、御協力に感謝している。
8. 調査、整理の参加者は下記の通りである。

石田 博	竹下 賢	北野 重	桑野一幸	田中久雄	谷口京子
秋田大介	伊藤芳匡	稲岡利彦	今中太郎	清瀧健二	西村 威
松下 修	森田好則	江波佐知子	中田ゆかり	藤本直美	松村富子
麻 栄三郎	朝田行雄	井上岩次郎	奥野 清	川端長三郎	谷口鉄治
西岡武重	分才春信	道籠甚蔵	森口喜信	山田貞一	山本芳一
乃一敏恵	松成早苗	横関勢津子	吉居聰子		

そのほかに、柏原市高井田土地区画整理組合、村本建設株式会社の協力を得た。

目 次

第1章 高井田横穴群をめぐって

1. 調査の経緯と保存問題	1
---------------	---

2. 高井田横穴群とは	2
-------------	---

第2章 河川改修工事に伴う調査

1. 調査の概要	4
----------	---

2. 第1区	6
--------	---

3. 第2区	10
--------	----

4. 第3区	11
--------	----

第3章 市道建設工事に伴う調査

1. 調査の概要	13
----------	----

2. 調査成果	15
---------	----

72号墳	16
------	----

73号墳	18
------	----

74号墳	21
------	----

A号墳	23
-----	----

B号墳	29
-----	----

99号墳	30
------	----

80号墳	32
------	----

101号墳	37
-------	----

102号墳	37
-------	----

123号墳	40
-------	----

D号墳	40
-----	----

103号墳	41
-------	----

81号墳	43
------	----

82号墳	48
------	----

C号墳	53
-----	----

溝	61
---	----

包含層出土遺物	62
---------	----

3.まとめ	63
-------	----

図 表 目 次

図-1 高井田横穴群全体図	3
図-2 調査対象地位置図	5
図-3 第1区地形図	6
図-4 第1区造構平面図・土層図	7
図-5 第1区出土遺物	8
図-6 第2区地形図	10
図-7 第2区東壁・南壁土層図	10
図-8 第3区第1トレンチ南壁土層図	11
図-9 第3区第3トレンチ南壁土層図	11
図-10 第3区地形図	12
図-11 第3区第2トレンチ造構平面図・土層図	12
図-12 調査対象地位置図	13
図-13 調査地区全体図	15
図-14 地形図①	16
図-15 72号墳実測図	17
図-16 73号墳実測図	18
図-17 74号墳実測図	22
図-18 地形図②	23
図-19 A号墳実測図	24
図-20 A号墳遺物出土状況	25
図-21 A号墳出土土器	26
図-22 A号墳出土鉄製品	28
図-23 B号墳実測図	30
図-24 B号墳出土土器	30
図-25 B号墳出土鉄製品	30
図-26 地形図③	31
図-27 99号墳実測図	32
図-28 80号墳実測図	34
図-29 80号墳遺物出土状況	35
図-30 80号墳出土土器	36

図-31	80号墳出土銀環・秦玉	37
図-32	80号墳出土鉄製品	37
図-33	101・102・123号墳実測図	39
図-34	102号墳出土土器	40
図-35	102号墳出土鉄製品	40
図-36	D号墳墓道実測図	41
図-37	D号墳出土土器	42
図-38	103号墳実測図	42
図-39	103号墳出土土器	43
図-40	103号墳出土紡錘車	43
図-41	81号墳実測図	45
図-42	81号墳遺物出土状況	46
図-43	81号墳出土土器	47
図-44	81号墳出土鉄製品	47
図-45	81号墳出土金環	48
図-46	82号墳実測図	50
図-47	82号墳遺物出土状況	51
図-48	82号墳出土土器	52
図-49	82号墳出土鉄製品	53
図-50	C号墳実測図	55
図-51	C号墳遺物出土状況	56
図-52	C号墳出土土器	57
図-53	C号墳出土金環・管玉	58
図-54	C号墳出土玉類	59
図-55	C号墳出土鉄製品	60
図-56	溝出土土器	62
図-57	包含層出土遺物	63
	横穴計測値一覧表	64
	玄室規模比較グラフ	65

图 版 目 次

- | | |
|----------------|-----------------------|
| 图版 1 第 1 区溝 | 图版25 102号墳 |
| 图版 2 第 1 区壠形埴輪 | 图版26 102号墳 |
| 图版 3 第 1 区出土遺物 | 图版27 102号墳 |
| 图版 4 第 2 · 3 区 | 图版28 123号墳 |
| 图版 5 第 3 区 | 图版29 102号墳 · D 号墳出土遺物 |
| 图版 6 72号墳 | 图版30 103号墳 |
| 图版 7 72号墳 | 图版31 103号墳 |
| 图版 8 73号墳 | 图版32 103号墳出土遺物 |
| 图版 9 73号墳 | 图版33 81号墳 |
| 图版10 73号墳 | 图版34 81号墳 |
| 图版11 74号墳 | 图版35 81号墳出土遺物 |
| 图版12 74号墳 | 图版36 81号墳出土遺物 |
| 图版13 A 号墳 | 图版37 82号墳 |
| 图版14 A 号墳 | 图版38 82号墳 |
| 图版15 A 号墳 | 图版39 82号墳 |
| 图版16 A 号墳出土遺物 | 图版40 82号墳出土遺物 |
| 图版17 A 号墳出土遺物 | 图版41 C 号墳 |
| 图版18 B 号墳 | 图版42 C 号墳 |
| 图版19 99号墳 | 图版43 C 号墳 |
| 图版20 80号墳 | 图版44 C 号墳 |
| 图版21 80号墳 | 图版45 C 号墳出土遺物 |
| 图版22 80号墳 | 图版46 C 号墳出土遺物 |
| 图版23 80号墳出土遺物 | 图版47 溝 |
| 图版24 80号墳出土遺物 | 图版48 新堀見横穴 |

第1章 高井田横穴群をめぐって

1. 調査の経緯と保存問題

柏原市高井田地区での開発は、早く昭和40年代からその計画があった。そのため、昭和48年に、村本建設株式会社の依頼によって、大阪文化財センターが分布調査を実施し、翌49年に、⁽¹⁾ 試掘調査を実施している。その結果、新たに横穴が多数発見されるなどの成果があった。

当時、保存運動も起り、大きな問題となつた。大阪府教育委員会と村本建設は、文化財センターの調査成果を基に、保存区域、開発区域等の明示作業を進め、開発の基本構想ができるようである。その後、この開発計画は柏原市高井田上地区画整理事業として検討が進められ、主体者も柏原市高井田土地区画整理組合（理事長・谷口俊春）となった。

開発計画では、大阪文化財センターの試掘および分布調査で確認された横穴、および古墳はほぼ全部を保存することになっており、それらを史跡公園、公園、緑地とする計画である。その一方、未調査地域を含めて、遺跡の確認されていない地区的開発は認める。特に、市道白坂神社・高井田線の建設に際しては、若干の横穴が破壊されることもやむを得ないというものであったようである。当時、柏原市教育委員会には文化財専門の職員がおらず、現在でもその経過が十分に把握できない。しかも、十年余り以前のことであり、文化財に対する理解、关心も今日と比べると低かったことは否めないと思う。

土地区画整理組合、都市計画課は、この計画に基づいて区画整理を進めようとしており、当時の協議では、開発区域に対する調査方法については、十分な検討が行なわれていなかったようである。そのため、今回の調査に際しても、開発計画の検討を求める教育委員会と、当事者の間で、大きく対立する結果となった。その後、事前着工等の失敗を重ねながらも、何とか現段階までこぎつけることができた。

横穴群の保存を訴え、柏原市の文化財行政に対して強い批判が出されている。⁽²⁾ 横穴群の保存を求める声は素直に喜びたいし、我々が反省すべき点も多い。しかし、文化財行政の実態を知ろうともせず、全てを行政の責任と決めつける点には、いささか不満も感じる。横穴群の重要性については、他人に指摘されるまでもなく、十分に熟知しているつもりである。また、我々の保存を願う気持ちが、誰にも増して強いことは、発掘経験者ならば理解して頂けるであろう。自らが発掘した遺跡が無残に破壊されて、誰が平然としておられようか。

註

(1) 大阪文化財センター『大阪府柏原市高井田所在遺跡試掘調査報告書』1974

(2) 吉岡 哲「高井田横穴群周辺の現状」『考古学研究』第32巻第2号 1985

吉岡 哲「埋蔵文化財の調査と保存」『古代学研究』第109号 1985 ほか

2. 高井田横穴群とは

大和川が、まさに大阪平野に出ようとする北岸に、高井田横穴群は位置し、対岸には古墳時代前期の松岳山古墳群が位置する。南西の玉手山丘陵にも、安福寺横穴群、玉手山東横穴群がみられるが、横穴という特異な墓制は、大阪府下では柏原市内にのみ存在するものである。高井田横穴群は、人物、舟、花、鳥、文字等の線刻があることで著名であり、1923年に13基が国の史跡に指定されている。現在までに確認されている横穴は、今回の調査で発見した4基と、家屋解体時に発見した1基を加え、総数152基にのぼる。

横穴は、高井田の南斜面に堆積した二上山系の玉手山凝灰岩層に掘削して營まれている。この凝灰岩層は、史跡指定地付近では比較的堅固であるが、周辺部ではもろくなる。横穴群の北を西流する谷川の更に北側にも、一部に凝灰岩層が拡がっている。

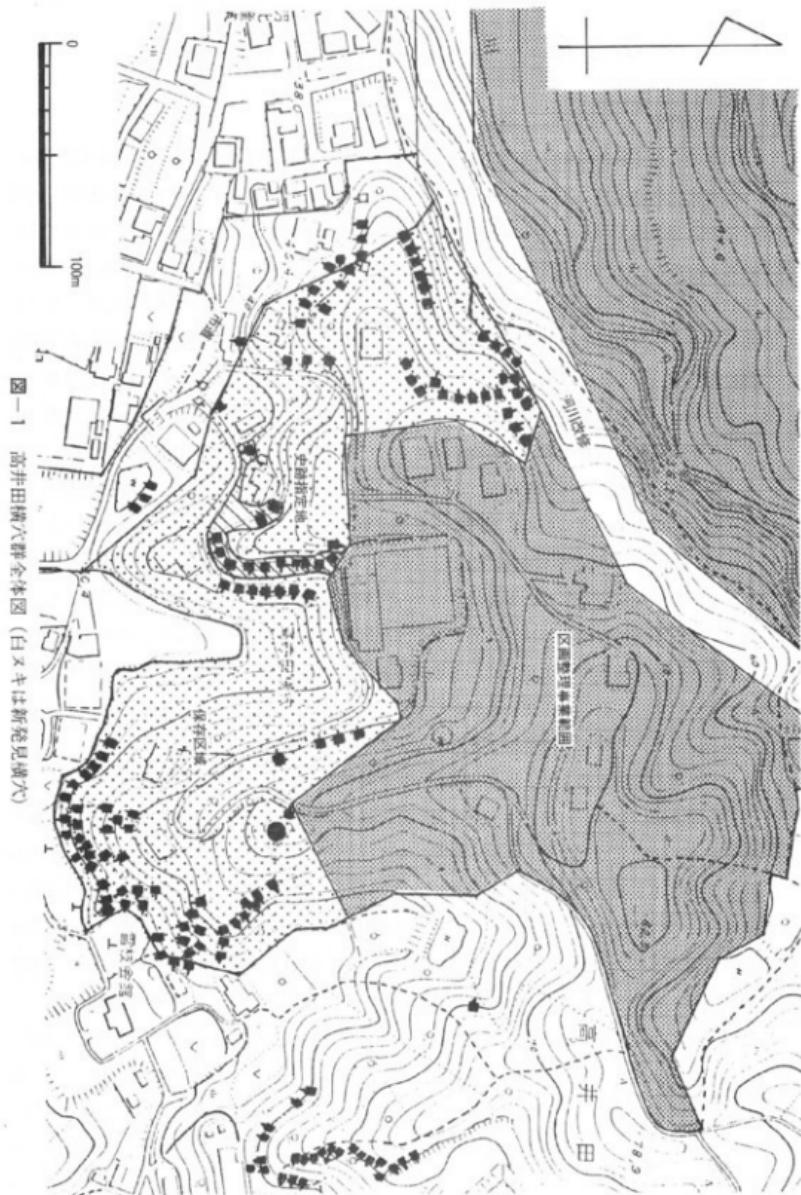
高井田横穴群が発見されたのは、明治時代末頃であり、大正時代には度々、踏査が行なわれたようである。喜田貞吉氏は、横穴内に造り付け石棺を有する例が多いことに注目し、梅原末治氏は、横穴の構造を細部に至るまで観察、報告し、特に数基の横穴が連続するものがあることに注目、その前後関係まで考察している。⁽¹⁾

高橋健自氏は、藤田家墓地建設に伴う道路工事中に発見された横穴について、詳細に報告している。特に、壁画について詳細に検討を加えているが、注目すべきは唐草の窟（52号墳、3-2号墳）から出土している遺物であろう。須恵器、土師器、刀、刀子、鉄鏃、馬具、釘、鏡等が発見されており、須恵器の器台、小持器台は、写真で見る限り、ほぼ完形品のようであり、⁽²⁾その時期は6世紀中葉頃と考えられるものである。更に、横穴発見時には、土師器ミニチュアの釜・甕のセットが出土していたようである。⁽³⁾今回の調査でも、釜と甕のセットが出土することを期待していたが、その出土はみなかった。

その後も、横穴群は何度か踏査されており、特に線刻画の集成と検討を加えた和光大学の調査は貴重なものである。⁽⁴⁾近年では、大阪文化財センターの分布・試掘調査と、大阪府教育委員会の平尾山古墳群分布調査の一環としての分布調査があげられる。⁽⁵⁾

註

- (1) 喜田貞吉「古墳墓雜記三則」『歴史地理』第19巻4号 1912
- (2) 梅原末治「河内高井田に於ける横穴群について」『人類學雑誌』第31巻12号 1917
- (3) 高橋健自「河内高井田なる藤田家墓地構内の横穴」『考古学雑誌』第9巻9号 1920
- (4) 島田貞彦「本邦古墳発見の瓈形土器」『歴史と地理』第22巻5号 1928
- (5) 和光大学古墳壁画研究会「高井田横穴群線刻画」 1978
- (6) 大阪文化財センター「大阪府柏原市高井田所在遺跡試掘調査報告書」1974
- (7) 大阪府教育委員会「平尾山古墳群分布調査概要」1975



第2章 河川改修工事に伴う調査

1. 調査の概要

昭和59年4月4日付で柏原市建設部都市計画課より、同市高井田所在の谷川河川改修工事に伴う埋蔵文化財包蔵地の発掘通知書が提出された。この計画によると、高井田横穴群内を改修河川、および改修工事に伴う工事用進入路が通過することになり、横穴群の保存に影響を及ぼすと考えられた。高井田横穴群は、その一部が国史跡に指定されている重要な遺跡であり、柏原市教育委員会社会教育課は、都市計画課に対して河川改修工事の設計変更を求めた。しかし、都市計画課から設計変更是技術的に困難なこと、河川予定地は高井田区画整理事業計画で開発が認められていることを理由に、設計を認めるように主張された。このため、社会教育課では削土予定地は全面発掘調査を実施し、盛土部分は試掘あるいは立会調査を行なうこと、更に保存すべき遺構が発見された場合は別途協議することを条件に、河川改修工事を認めた。

その後、再三にわたって調査期間、調査費用について調整を行なったが、都市計画課は河川改修工事が補助事業であるため工事期間・費用が限られていること、過去の分布調査によって遺跡が確認されている地区は保存区域として残すことになっており、それ以外の地区は調査を実施する必要がないのではないか等の理由から、発掘調査は合意に至らないままであった。

ところが、昭和59年12月22日に、高井田で大規模な工事を行なっているが、調査は終了しているのかという連絡を市民から受け、至急に現地視察を行なったところ、河川改修工事は八割程度終了しており、高さ10m近い岩盤がむきだしになっていた。そのため、社会教育課では、工事を中止させ、残存部分の発掘調査を実施すると都市計画課に指示した。

既に削土されていた部分は、過去に調査が行なわれておらず、横穴等の遺構が存在したか否かは不明である。しかし、削土による崖面には、遺構の可能性が考えられる部分が断面で数ヶ所確認され、なんらかの遺構・遺物が存在したことは、おそらく間違いないであろう。都市計画課が未調査のまま工事に着手したことは信じ難い事実である。だが、これは互いに意思の疎通を欠いていたことにも原因があり、我々の自己反省も求められるものである。この事件は新聞でも報道され、世論の批判を浴びた。新聞報道に一部事実誤認があるとはいえ、この事件は厳然とした事実であり、我々は冷静にこの批判を受け止めなければならないと考えている。

その後、協議を進め、都市計画課の立ち会いのもとに昭和60年1月21日に未着工部分に対して試掘調査を実施し、その一部約50m²について1月23日から31日まで発掘調査を行なった。調査の結果、溝2条とピットが検出され、土師器・須恵器はもちろんのこと、弥生土器や壺形埴輪など、従来の調査では注目されていなかった遺物も出土し、重層的に遺構が存在することが確認された。



図-2 調査対象位置図

社会教育課では、調査結果を報告すると共に、引き続き予定されていた昭和60年度の河川改修工事に際しては十分な調査を実施できるように申し入れ、都市計画課も理解を示してくれた。

後日、都市計画課より、昭和60年度の河川改修工事の発掘通知と共に、昭和59年度の工事範囲を南東へやや拡張したい旨の通知があった。拡張部分は、事前着工によって崖面を呈しており、その断面観察によって包含層が存在すると考えられた地点約40m²を発掘調査し、他の部分は立会調査を行なうこととした。調査は第2区として3月20日から着手し、3月23日をもって終了した。調査の結果、包含層と考えられた土層は、斜面上部からの2次堆積であることが判明し、遺構も認められなかったため、工事の着手を認めた。

昭和60年度の工事区間は昭和59年度工事区間の西側にあたり、大部分に盛土を施した後に河川改修工事に着手することになっていた。そのため、トレンチ調査を実施し、必要に応じて調査範囲を拡張するという方法をとることにした。

以上の協議結果のもとに、トレンチを3ヶ所に設定し、3月28日より3月30日まで発掘調査を実施した。その結果、近世、もしくは近代の耕作に伴う遺構以外に遺構は検出されず、遺物もほとんど出土しなかったため、河川改修工事に際しての立会調査を条件に、工事の着手を認めた。その後の立会調査でも、やはり遺物・遺構は認められなかった。

最後に、下田池築堤工事の立会調査をもって、河川改修工事に伴う調査は終了した。

2. 第1区

試掘調査の結果、河川改修工事予定地の南側法面のみを調査することにし、北東から南西方向へ長い調査区を設定した。第1～7層は、後世の盛土、あるいは自然堆積土であり、遺物はみられない。第8層赤褐色砂質土以下の層は溝-1・2の埋土であり、遺物を含んでいる。

遺構

調査区東半で溝を2本検出し、調査区西半ではピットを検出した。

溝-1は幅約320cm、深さ約90cmでU字状断面を呈する。南東から北西方向へと傾斜し、人工的に掘削されたものである。上層から中層にかけて、6～7世紀の遺物が出土する。遺物の数量は少ないが、遺存状態の良好なものが多い。下層からは有黒斑の埴輪が出土する。壺形埴輪は第14層淡灰色粘土から出土した。しかし、他の埴輪は小片で磨滅したものが多い。また、最下層から弥生時代後期の甕破片が1点出土している。

溝-2は、やや弯曲しながら溝-1にとりつく東西方向の溝である。幅60cm、深さ30～50cmで、壁面は垂直に近い。遺物は少量の土師器が出土したのみである。

ピットは直径70cm、深さ約20cmの円形。埋土は暗灰色砂質土を呈し、焼土・炭等を含む。6世紀後葉の杯身(4)、壺口縁部(5)が出土している。性格は不明。

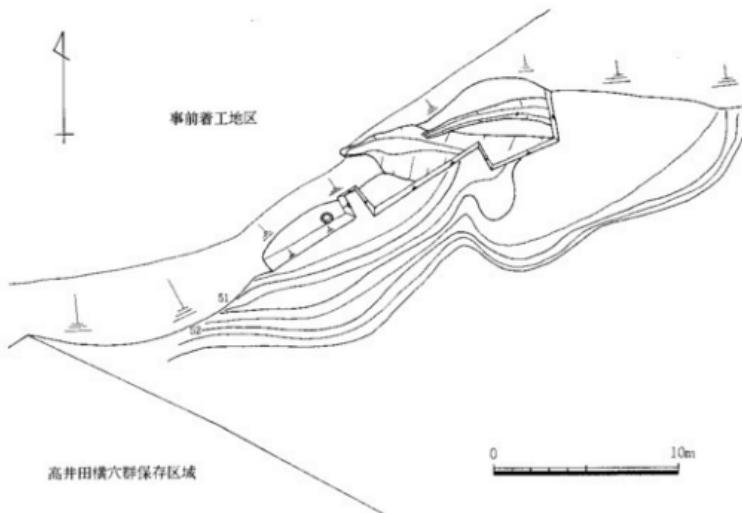


図-3 第1区地形図

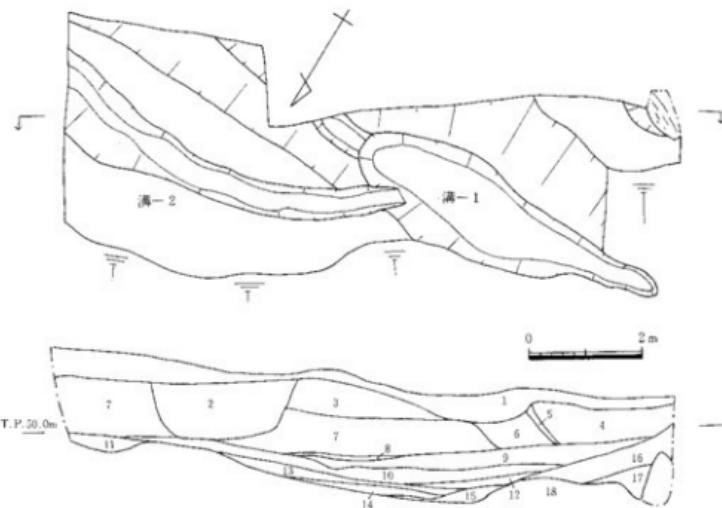


図-4 第1区遺構平面図・土層図

遺物

1~4は須恵器杯身。1は立ち上がりが垂直に近く、受部は水平方向にのび、断面三角形状を呈する。体部外面は受部近くまで回転ヘラケズリ調整。2は立ち上がりが厚く、受部も短く厚い。3も2と同様の形態である。1~3は溝-1の上層から中層で出土している。4は立ち上がりが短く内傾し、受部は薄くやや上方へのびる。残存部全面回転ナデ調整。ピット内から出土している。

5・6は須恵器壺。5は外反する頸部から口縁部に至り、口縁端部は断面正方形状を呈する。頸部外面回転カキ目調整。内面回転ナデ調整。口径13.0cm、灰白色を呈する。ピット内出土。6は壺体部。球形を呈し、底部は丸底である。器壁は1cm前後と厚い。外面上半回転ヘラケズリ、下半ナデ調整。底部は平行の叩き目が残る。内面はナデを施すが、調整は粗雑で幅2cm前後の粘土帶の繼ぎ目が残り、凹凸が激しい。外面および内底面に融着物が多く認められる。第12層灰色粘質土から出土。

7・8は土師器の高杯。7はやや浅い杯部を有し、脚部は大きく開く。内外面とも表面剥離が著しく調整不明。淡橙色を呈する。第15層黄褐色砂質土から出土。8は手づくねの小形高杯。

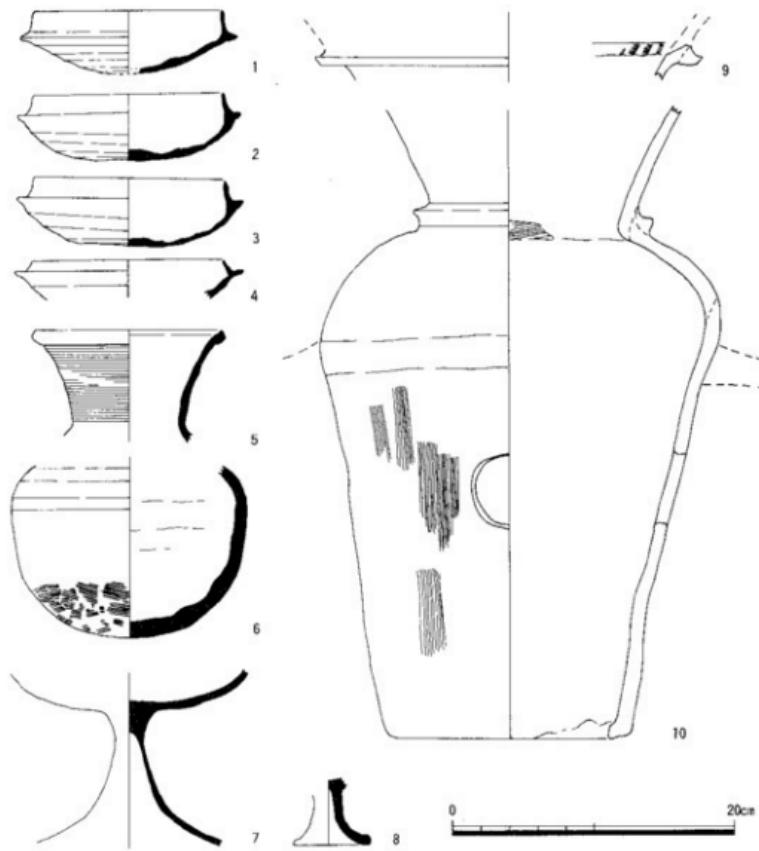


図-5 第1区出土遺物

裾広がりの脚部は端部で厚く肥厚する。指頭押圧と指ナデによって調整。第7層暗黄褐色砂質土から出土。同様の小形高杯は、小片ばかり約10点出土している。

9・10は壺形埴輪。9は壺形埴輪の頭部中段部分と考えられる。凸帯は、やや上方へ反り上がる断面を呈する。頸部は凸帯貼り付け部分で、乾燥のために一時的な積み上げ休止が行なわれており、その部分で剝離している。剥離面は断続的なヨコハケ調整によって平滑に仕上げられている。これは、粘土帯の貼り付けを強化するためであろう。凸帯はヨコナデ調整を施し、内面はナデ調整である。凸帯部分での直径27.5cm。色調は灰白色。胎土はやや粗、石英・長石等の砂粒を含む。10の体部は完形であるが、頸部上半を欠失する。おそらく、9のように凸帯

が一本めぐり、直線的に聞く口縁部を伴うものと思える。また、肩部直下に横方向に帯状にめぐる黒色の部分があり、これは鉛が剥落したものと考えられる。大阪市一賀塚古墳⁽¹⁾、藤井寺市野中宮山古墳出土の壺形埴輪と同形態であるが、体部の長さ、肩部の張り等に壺としての特色を多く残しており、二例に先行するタイプのものと思える。鉛を伴うことから、円筒埴輪の上に載せられ、朝顔形埴輪状の外観を呈するものであろう。体部はやや張り出した肩部から徐々に直線状にすぼまり、底部に至る。基底部は粘土が内側へ肥厚する。製作途中に、数回の乾燥を行なっているようであるが、やはり上部の重量に底部が耐えられなかったようである。肥厚した粘土に対する調整はみられない。基底面はやや内傾する平坦面をなし、板状工具で押正されたものと思える。透孔は直径 5 cm 前後の円形で、対向方向に 2 個みられる。体部と肩部の境、肩部と頸部の境には、9 と同様の明瞭な乾燥体止面がみられ、粘土の剥離している部分では、やはり粘土帶貼り付け前に、ヨコハケを施している。外面、肩部から頸部にかけては表面剥離のために調整不明。体部はタテハケ、底部はナデ調整。内面はナデによって平滑に仕上げられている。内面下半は縦方向の指ナデの後、ナデを施す。粘土帶は幅 2 cm 前後。胎土は 9 と同一である。9・10は共に断面黒色を呈し、10の外面には黒斑がみられ、野焼きである。10は第14層淡灰色粘質土から横位で出土。出土状況からは、南側斜面上方から転落したものと考えられる。

他の出土遺物として、溝一 1 最下層から出土した平行の叩き目をもつ弥生時代後期の壺形埴輪片があげられる。また、溝一 1 上層から安山岩の板状石が數点出土している。自然石ではあるが、調査地周辺では安山岩がみられないことから、前期古墳の竪穴式石室材としての可能性が考えられる。

小結

溝一 1 出土の遺物は、いずれも南東の落ち際で出土したものであり、調査区の南東斜面に、横穴、もしくはそれに関連する遺構が存在するものと思える。ピットの性格は不明であるが、焼土を含むことから祭祀関係の遺構とも考えられる。

壺形埴輪は古墳時代前期末から中期初頭頃のものと考えられ、從来知られていない古墳が、高井田横穴群内に存在することを裏付ける結果になった。おそらく、調査区南側の斜面上方の平坦地に古墳が存在するのである。松岳山古墳群、玉手山古墳群と比較検討すると、古墳時代前期から中期にかけての柏原市域での複雑な政治構造が考えられる貴重な資料となった。

また、1 片ではあるが弥生土器の出土は、高地性集落の存在を予想させるものである。

註

(1) 第17回埋蔵文化財研究会『形象埴輪の出土状況〈資料〉』1985

(2) 藤井寺市教育委員会『野中宮山古墳現地説明会資料』1984

3. 第2区

事前着工によって削平された崖上に、 $8\text{ m} \times 4\text{ m}$ の調査区を設定し、調査を実施した。標高は58~61m。

表土から掘り下げていくと、50~150cmで明黄褐色砂質土の地山に至る。その間の土層は、図7のような状況であるが、いずれも自然堆積土であり、土師器・須恵器片を少量含む。土師器は小形手づくねの高杯破片が大部分を占めるが、残存状態はいずれも良好ではない。

地山は南東から北西へと傾斜し、多少の凹凸が認められる。これらは自然地形と考えられ、遺構は認められなかった。

地山の形状、土の堆積状況、遺物の出土状況から、手づくねの高杯等の出土遺物は、上方からの転落による2次堆積と考えられる。調査地上方に、奈良時代の祭祀遺構が存在するものと推定される。

以上のような状況から、調査範囲は拡張せず、他の土取り対象地は立会調査に留めた。立会調査の結果、遺物・遺構は認められなかった。

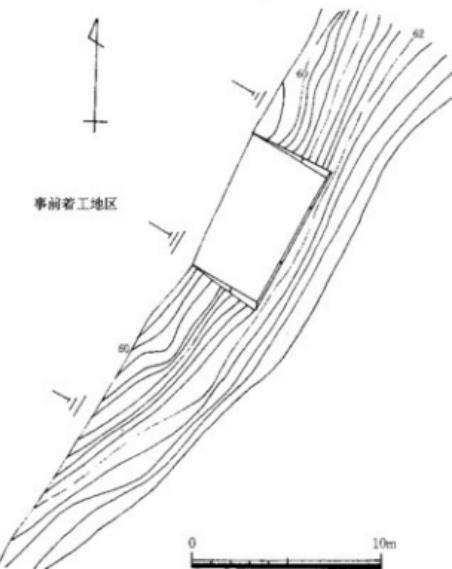


図-6 第2区地形図

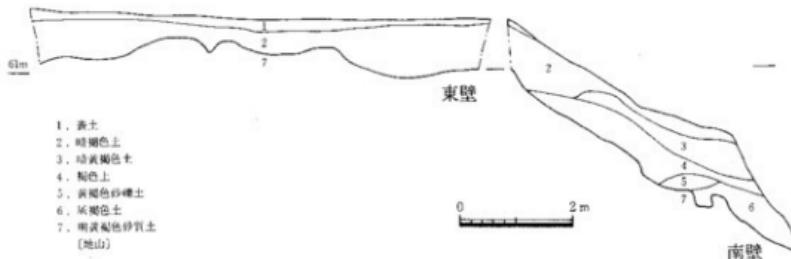


図-7 第2区東壁・南壁土層図

4. 第3区

昭和60年度の河川改修工事予定地に、等高線とほぼ平行するトレントを3ヶ所に設定し、調査を実施した。

第1トレントは1.5m×15m。遺物包含層は認められず、暗黄褐色砂質土の地山は、トレント西端で深く落ち込む。

第2トレントは1.5m×15m。やはり遺物包含層は認められないが、トレント中央で島状の高まりと、それを取りまく細い溝を検出した。島状の高まりは、ほぼ平坦な地山上に、粘質土と砂質土を積み上げることによって築かれている。溝は幅約30cm、深さ約20cm、弧状にめぐる。トレントの東端と西端は50~80cmの深さに掘り下げられている。これらの遺構の性格は不明であるが、近世末期、もしくは近代と思える陶磁器片等が出土しており、調査地における開墾とそれに伴う耕作に関連するものと思える。

第3トレントは1m×7m。やはり遺物包含層は認められず、地山に多少の凹凸は認められるものの、遺構は存在しない。第3トレント上方は、保存区域に設定されており、一部、河川改修工事に伴う盛土が行なわれるために、第3トレントを設定したが、第1・2トレントと同じ様に、凝灰岩層はみられず、横穴の分布範囲外であることを確認した。

各トレントからは、土師器の細片が出土したのみであり、第2トレントで近世もしくは近代の耕作に関係すると思われる遺構を検出した以外には遺構は認められなかった。そのため、調査範囲は拡張せず、工事の際に立ち会ったが、他の部分でも遺物・遺構は認められなかった。調査、および立会調査の結果、河川改修工事影響範囲内では凝灰岩層は認められず、横穴は、この地点まで分布していないものと判断できる。

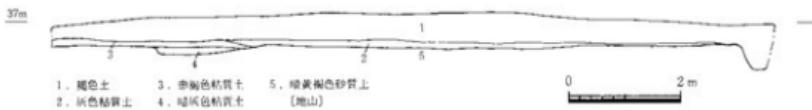


図-8 第3区第1トレント南壁土層図



図-9 第3区第3トレント南壁土層図

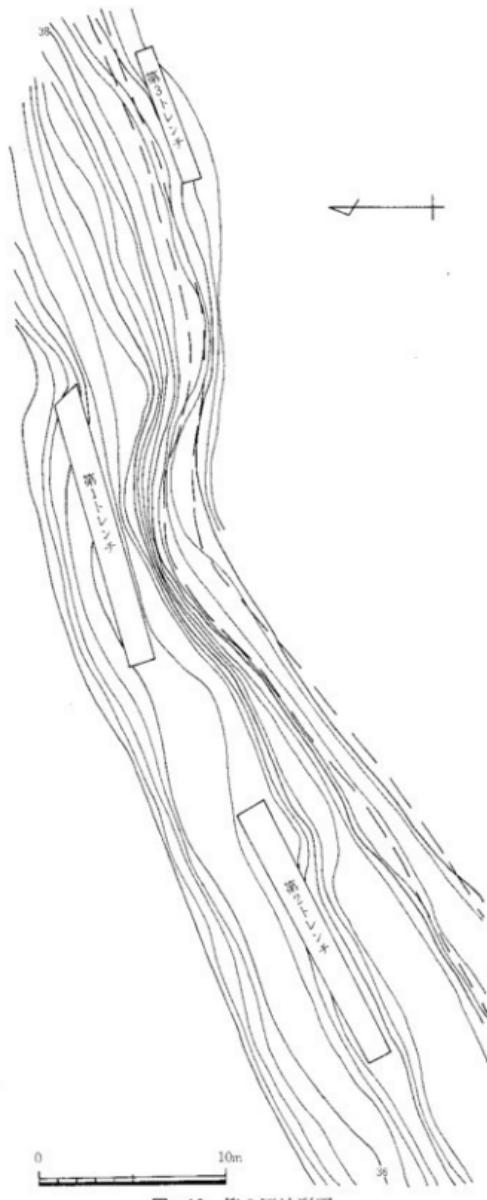


図-10 第3区地形図

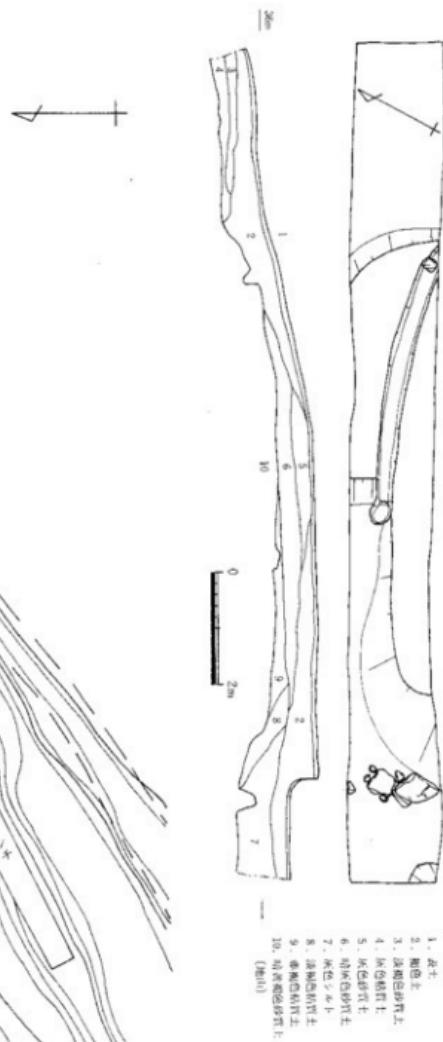


図-11 第3区第2トレンチ
断面図・土層図

第3章 市道建設工事に伴う調査

1. 調査の概要

柏原市建設部都市計画課によって、昭和60年8月開業の国鉄関西本線高井田駅前から、北西方向へのびる「市道白坂神社高井田線」建設工事に伴う発掘通知書が、昭和60年6月3日付で提出された。この計画は、高井田区画整理事業に関連するもので、新設の高井田駅から安堂方面への道路を確保する目的で計画された。この計画に対し、柏原市教育委員会社会教育課では市道のルート変更が可能か否か、都市計画課に再検討を求めたが、区画整理事業計画の際に、横穴群のほぼ全域を保存区域として保存することになっており、横穴群の西方には高井田集落があるため、その中間地点である計画地以外に考えられないこと、そのため計画段階で市道建設が認められているとして、計画変更は不可能との返答があった。

市道予定地には試掘調査で確認されている横穴3基が含まれており、それら以外にも横穴が存在する可能性が強かった。そのため、市道予定地全域を発掘調査し、その結果を基に、改めて協議を行なうことにして、6月12日より発掘調査に着手した。



図-12 調査対象位置図

調査は、隣接斜面下に民家が存在するため困難を極めたが、調査開始当日、未知の横穴（A号墳）を発見、翌日にはB号墳を発見する等の新たな成果があった。しかし、A号墳は既設の道路によって上部を削平されており、玄室天井部が落盤してしまった。B号墳は上部が完全に削平され、床面をわずかに残すだけであり、しかも、現在も農道として利用されている道路の確保のために掘り返しによって発掘しなければならず、十分な調査が行なえなかった。続いて99号墳、80号墳を確認した。その後、盛土の予定地となっている、ため池内の72～74号墳を調査、引き続き81・82号墳の調査を実施し、C号墳を発見するに至った。各横穴は追葬時、あるいは後世にかなり荒らされているものの、良好な遺物を残しているもの多かった。また、82号墳では造り付け石棺、C号墳でも造り付け石棺4基が確認され、貴重な発見となった。

以上のような成果があったため、社会教育課では8月11日に現地説明会を開いた。当日の参加者は約200名を数え、保存を求める声も強く、市民の关心の高さを痛感した。

調査終了後、遺構の保存について都市計画課と協議を重ね、市道を更に西側へ移動させるか、市道計画地盤高を高くし、横穴を保存するように求めた。しかし、西側には民家があるため計画以上に民家に近づけることは不可能であること、民家や改修河川の高さとの関係から、C号墳付近は大幅に削平しなければならないことを理由に計画変更は拒否された。更に、精密な測量の結果、当初は保存される予定であった80・81・99号墳も保存不可能との報告が出された。社会教育課では、計画と違うとして強く反発し、逆T字擁壁、もたれ擁壁等の採用、道路法面を垂直にする等の工法変更を求め、計画を再検討するように指示した。しかし、擁壁工法の変更による影響範囲にほとんど差は認められないとする設計図、報告が提出され、また法面も安全性を考えた場合、計画以上に勾配を強くすることはできないとの報告が出された。この間、再三協議を重ねたが、保存策を講じることはできず、9月4日、大阪府教育委員会文化財保護課記念物係鶴江門也係長にも出席していただき、改めて協議を行なった。その結果、道路建設は認め、横穴7基の破壊はやむを得ない。但し、東側の影響範囲は調査区を拡張し、新たに調査を行なう。また、その調査によって横穴が発見された場合には、改めて保存策について協議を行なう。更に、計画段階より多くの横穴が破壊されるのであるから、盛土予定地内の残存状態の良い72～74号墳を公開できるように検討するということになった。

その後の調査によって、102・103・123号墳、および101号墳の墓道を確認、墓道と考えられる遺構（D号墳）を検出した。幸運なことに、これらの横穴はいずれも道路法面内に保存可能であるため、調査後に埋め戻し、道路建設工事の際に影響が無いように立ち会うこととした。また、これらの横穴を保存するために法面の崩壊が生じないような、しかも自然景観を損なわないような法面工事を行なうことを条件に、市道建設工事に伴う調査は終了した。今後、保存された横穴が2次的な破壊を受けることのないような保存策、および利用法について、更に検討を重ねていく予定である。

2. 調査成果

調査は6月12日～8月13日、9月3日～9月13日の2次にわたって実施し、調査面積は約2,000m²である。

調査の結果、過去の試掘調査、分布調査によって確認されていた横穴11基（墓道のみも含む）と新発見の横穴4基が確認された。既発見の横穴は72・73・74・80・81・82・99・101・102・103・123号横穴に概当し、新発見の横穴は、発見順にA～D号墳とした。その他の遺構として、72号墳の前面で検出された溝状遺構があり、遺物は80号墳南側で埴輪が出土している。

また、調査期間中に老朽家屋の撤去が行なわれ、これに立ち会った結果、史跡指定の71号墳（第3支群21号墳）の北側で、東に開口する横穴を発見した。この横穴は、調査対象地外であり、保存区域に含まれているため、未調査であるが、内部は廃材等でかなり荒れている。

調査成果については、ほぼ東から順に、各横穴ごとに記述していく。

註

- (1) 各横穴のナンバーは、大阪文化財センターの試掘調査に基づくナンバーと、大阪府教育委員会の平尾山古墳群分布調査によって4支群に分け、各支群毎にナンバーをつける二例が報告されている。後者の支群設定には若干の疑問もあり、記述においても繊細になるため、ここでは前者のナンバーを採用し、今後の成果を得て、改めて支群設定について考えたいと思う。ナンバーの対照は以下の通りである。

72(3-22)、73(3-23)、74(3-24)、80(4-33)、81(4-28)、82(4-27)、99(4-41)、101(4-32)、102(4-31)、103(4-29)、123(4-30)号墳

大阪文化財センター『大阪府柏原市高井田所在遺跡試掘調査報告書』

大阪府教育委員会『大阪府平尾山古墳群分布調査概要』

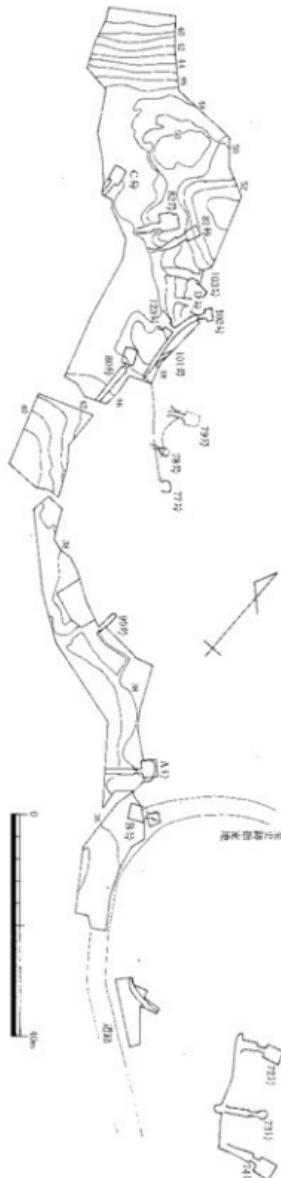


図-13 調査地区全体図

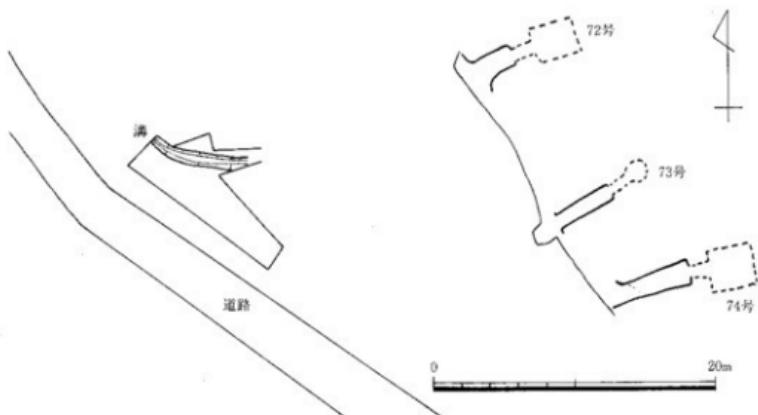


図-14 地形図①

72号墳

72~74号墳は、以前から池の水面付近に観察されていた。しかし、池が存在していたために、内部については未調査であった。今回の市道建設に伴い、池を埋め立て、盛土を施す予定であったため、72~74号墳についても調査を実施することにした。

まず、池の水を抜き、薬品処理を行なった後に調査を行なったが、水や泥土は完全に除去できず、横穴内のみ、かろうじて調査を行なえた。72~74号墳の位置する凝灰岩層は非常に堅固であり、横穴の残存状態は良好であった。

72号墳内は泥土が堆積しており、副葬品は認められなかった。

玄室床面は長方形を呈し、羨道はほぼ中央に取り付く。天井部はドーム状をなし、側壁と天井部の境界は明瞭である。

玄室長313cm、玄室幅272cm、玄室高160cm、奥壁高107cm、羨道長150cm、羨道幅90cm、羨道高104cm、墓道幅152cm。（数値はいずれも概数。計測箇所によって数値はかなり異なるが、ほぼ中央での数値である。以下同じ。）

平面プランは、ほぼ左右対称をなし、S-71°-Wに開口する。かなり規模の大きいものである。床面は奥壁から墓道にかけて緩やかな傾斜をなす。玄室床面での比高差は約20cmである。玄室と羨道の床面境界には約5cmの弱い段がみられる。

副葬品は認められなかったが、横穴の形態・規模・立地等から、横穴群内でかなり古い時期のものと推定される。

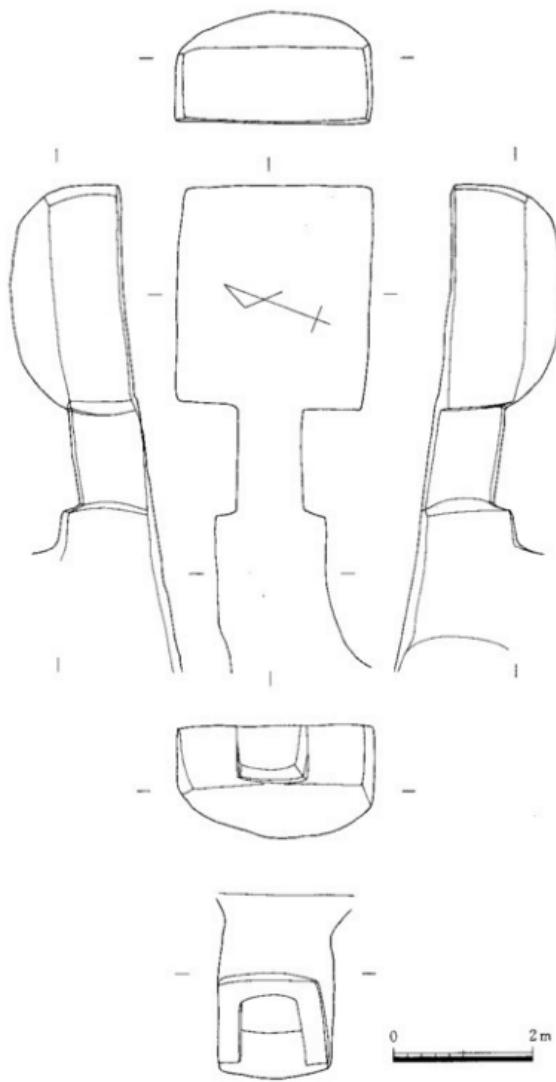


図-15 72号墳実測図 (レベル高32.0m)

73号墳

73号墳は、掘削途中で未完成のまま放棄されている。羨門部はほぼ完成しているが、玄室は前後136cm、左右150cmの不整円形平面を呈し、最奥部での高さ100cm、玄門での高さ108cmを測る。羨道長180cm、羨道幅82cm、羨門部での羨道高142cm。床面は非常に強い傾斜を示し、約17°の勾配、最奥部と羨門の比高差約100cmである。

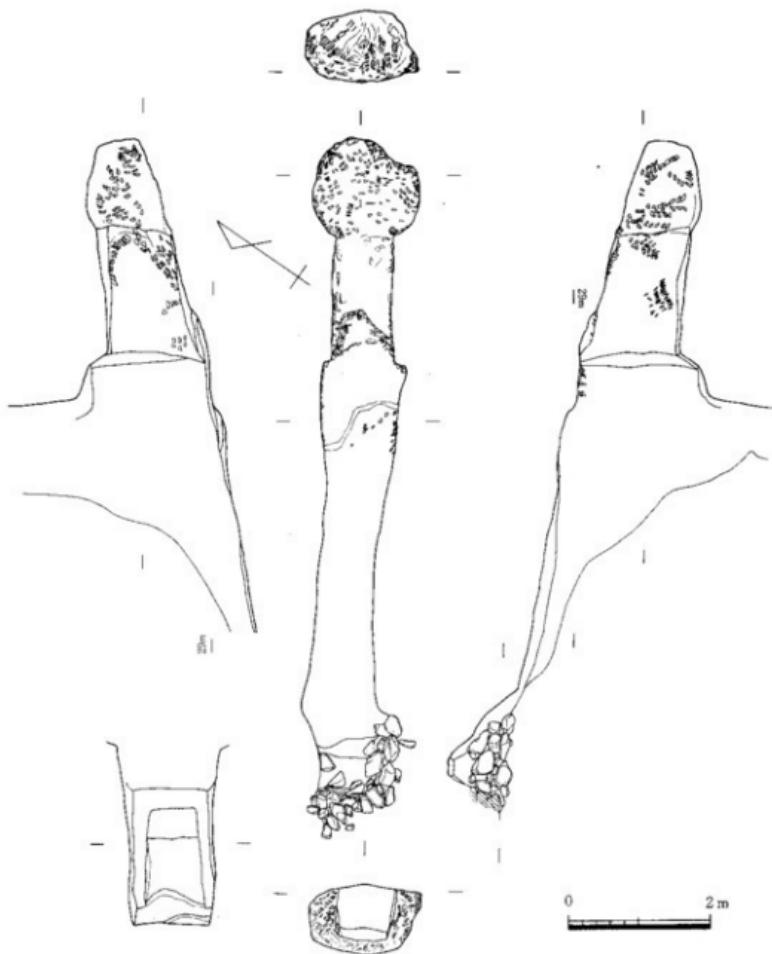


図-16 73号墳実測図（レベル高30.0m）

開口方向は S-56°-W。墓道幅は80~110cmを測り、羨道中軸より徐々に西へ角度を振っている。

73号墳は、横穴掘削時の工程、技法等を知るうえで、非常に貴重な資料となった。横穴掘削時は、まず墓道を掘開する。墓道掘開時には既に墓道幅が決められており、壁面のかなり細部にわたる調整も同時に行なわれている。但し、床面は完全に仕上げられていない。

次に羨門の位置を決め、羨道部の掘削に入る。73号墳では、玄室の掘削はほとんど行なわれていないが、既に羨門はほぼ完成している。墓道と同様、床面が未完成のため、羨門下部は未完成であるが、上部は細部にわたる調整が施されており、墓道と羨門の境界は直線状に区別されている。羨道天井部も完成に近いと考えられる。

前述のように、玄室掘削開始後、間もなく73号墳は放棄されたと考えられるが、玄室・羨道には多数の工具痕を残している。工具痕を明瞭に残しているのは、途中放棄だけでなく、凝灰岩層が堅固であることも大きな要因と考えられる。

工具痕は、やや不規則であるが、基本的には奥から羨道方向へ、上から下へと掘り込まれた痕跡と考えられる。その方向から考えると、工具はノミではなく、手斧であろう。また工具幅には5cm前後のものと、10cm前後のものがみられる。前者の方が深く掘り込まれており、掘削用と調整用に使い分けられていたのではないだろうか。

玄室の掘削が、中央から三方にほぼ均等に掘り始められていることや、羨道の幅を考えると、掘削者はおそらく一人であろう。玄室の掘削の際には、中央に坐り、三方へ掘り進めていったものと思える。

墓道壁面や羨門の完成度に比して床面が未完成である原因は2点が考えられる。1点は、羨門や天井を完成させる際に、深く掘り下げていると作業が困難なことが考えられる。細部の調整を行なうためには、直立姿勢での目の高さ前後が限界であろう。第2点として、掘削土の排除を効率的にする目的が考えられる。床面が単に掘り残されているだけでなく、玄室から墓道にかけて一定の傾斜がみられる。この傾斜は、掘削土を排除する際に、作業を軽度にする目的で、意図的になされたものと考えられる。

墓道と羨道には2ヶ所に段が認められ、墓道の下段が、本来の床面になる予定ではなかったかと考えられる。これらの段も、意識的に掘り残されたものであろう。

73号墳の掘削工程は以上のように推定される。ここで今一度まとめておくと、全体を掘削した後に細部調整を行なうのではなく、墓道の側から、そして高い部分から、掘削と同時に調整も行なっていく。床面は一度に掘り下げずに、作業効率を考え、傾斜をもたせて掘り進んでいく。工具は2種類以上の手斧を使用し、一人で掘り進めていくと考えられる。

但し、横穴が一人によって掘削されたとは限らない。玄室が広くなってくると、複数によって掘削されるであろう。また、73号墳のような堅固な凝灰岩層の掘削に際しては、工具痕を消

すために砥石が使用されていると考えられ、掘削と同時に狭門の調整が行なわれていることから、掘削者と調整者が存在した可能性が十分に考えられる。おそらく、横穴の掘削にかかわった人は3～4人ではないだろうか。

それでは、なぜ73号墳は掘削途中で放棄されたのであろうか。これには社会的原因と自然的原因が考えられる。社会的原因とは、被葬予定者、もしくは掘削者が何らかの事情で横穴を必要としなくなったことが考えられる。しかし、これについては憶測の域を出ず、考古学的に実証できるものではない。むしろ、73号墳の観察結果から考えると、原因は後者の自然的原因にあるのではないだろうか。自然の原因と言っても、前述のように地盤は堅固であり、落盤の可能性は考えられない。その原因は、湧水ではないだろうか。

現在でも、73号墳の玄室や狭門付近にはかなりの湧水が見られる。調査中は夏期であり、しかも雨量が比較的少なかったにもかかわらず、常に湧水が途絶えることはなかった。調査前に築かれていたため池も、地形的なものだけでなく、この湧水を貯えることが可能であったためにこの場所に築かれたと考えられる。

ここで問題となるのは、現在見られる湧水が横穴掘削時まで遡るか否かであろう。この点に関して、墓道前面の石組み遺構が重要な資料となる。石組み周辺は泥土の堆積が厚く、簡易矢板を打って調査を行なったが、十分なものではない。おそらく、北西側にも石組みは続いているであろう。しかし、墓道に接する部分には石組みは認められない。

石組みは、こぶし大から人頭大の自然石を乱雑に積み上げたもので、1辺100cm弱の方形形状を呈する。泥土と湧水のため、底を確認するには至っていないが、底にも石が存在するようであり、深さは100cm強であろう。石組み内、および周辺からは瓦器の破片が出土しており、その年代は13世紀頃と推定される。

この石組みの性格を考えると、底からの湧水は見られず、井戸とは考えられない。ところが、73号墳からの湧水が絶え間なく流れ込んでおり、その水を溜めるための施設だったと考えられるのである。その根拠として、墓道の幅と石組みの幅が、おそらく一致すること、墓道に接する面にのみ石組みが認められないことがあげられる。

石組み遺構の時期、つまり13世紀頃まで、73号墳の湧水は遡ることができ、おそらく、横穴掘削時にも湧水があったのではないだろうか。そして、この湧水のために、玄室を掘り始めるまでに進んでいた横穴の掘削を放棄せざるを得ないような状態になったのではないだろうかと考える。

放棄の原因にかかわらず、掘削途中で放棄されている73号墳は横穴の掘削工程等を知る上で、大変貴重な資料となった。今後の高井田横穴群の研究に一石を投じることになるであろう。

74号墳

74号墳も、72・73号墳と同じ斜面に営まれており、堅固な凝灰岩層に掘削されている。玄室平面は長方形、玄室のほぼ中央に羨道が取り付き、ほぼ左右対称形をなす。開口方向はS-80°-W、墓道は前面でやや南へと寄曲する。

玄室長333cm、玄室幅298cm、玄室高162cm、奥壁高110cm。天井は弯曲の弱いドーム状をなす。奥壁・側壁と天井との境界には幅10~15cmのテラス状の施設がみられる。テラス面はやや内傾するが、明瞭な段をなす。

玄室床面四周と中軸線上には排水溝が認められる。この排水溝は合流し、羨道中軸線上の排水溝に至る。排水溝末端は、羨門で墓道床面と同一レベルになり、消滅する。玄室周囲の排水溝は幅10~15cm、深さ2~5cm、中軸線上の排水溝は幅15~20cm、深さ5~8cmを測る。奥壁・玄門に沿った排水溝は、両端で高く、中央で低い。比高差は奥壁で10cm、玄門で21cm。側壁に沿った排水溝は、奥壁側から玄門側へと低くなる。比高差は約20cm。中軸線上の排水溝は、やはり奥壁で最も高く、墓道との比高差は44cm。玄室の水は、これらの排水溝によって、ほぼ完全に排水される。

排水溝を伴う横穴は、他に確認されておらず、後世のものかとも考えたが、排水溝内の工具痕が壁面の工具痕と一致することから、その可能性は無いであろう。

羨道長127cm、羨道幅103cm、羨道高122cm。玄門から羨門へ、次第に幅が狭くなっている。

羨道と墓道の境界には7cm前後の段がみられる。羨門部分での墓道幅208cm。墓道は南へと弯曲し、幅も150cm前後まで狭くなる。

玄室壁面、および玄室・羨道・墓道の床面には、多数の工具痕が残る。幅15cm前後の幅広の工具痕が多く、やはり手斧を使用しているようである。工具痕の位置には一定の規則性のようなものが看取される。

横穴内には泥土が厚く堆積しており、副葬品はみられなかったが、規模、細部の細工等を見る限り、横穴群内では初期の頃の横穴であろう。

72~74号墳は、同一斜面に穿たれており、何らかの関係を有するものと思える。墓道端部の標高は、それぞれ30m、28.2m、29.1mであり、未完成の73号墳の高さが最も低い。72号墳と74号墳を比較すると、壁面と天井の境界の段や排水溝を有し、規模もやや大きい74号墳の方が古い可能性が強いのではないだろうか。標高と築造順序に有機的な関連が見出せるならば、73号、74号、72号の順が考えられるが、検討課題である。

74号墳の東側は、低い尾根が南へ張り出すため、横穴は存在しないと考えられるが、72号墳の西側には、更に横穴が続いている可能性も考えられる。今回の調査範囲外になるため、調査は実施していないが、注目しておく必要がある。

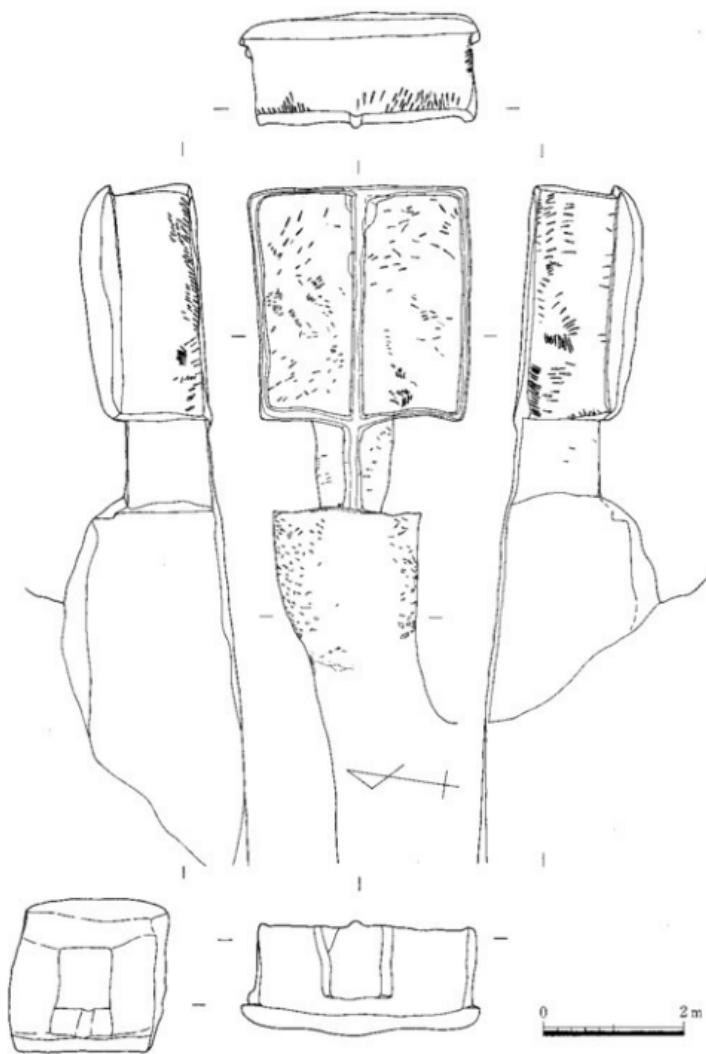


図-17 74号墳実測図（レベル高30.0m）

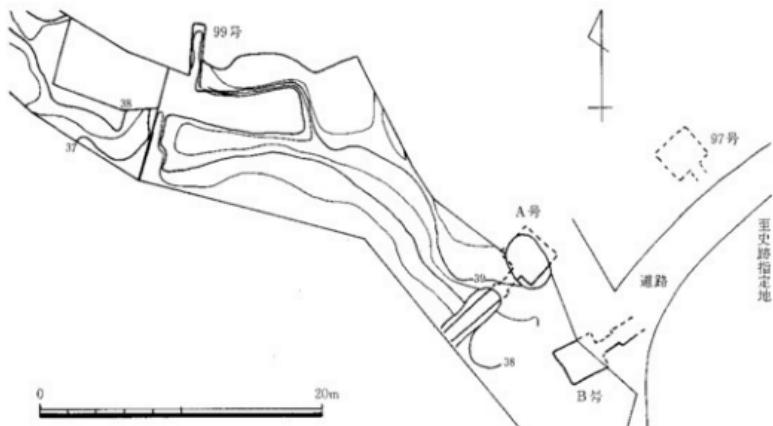


図-18 地形図②

A号墳

A号墳は、発掘開始当日に墓道の発見によって確認された新発見の横穴である。発掘は墓道から始め、羨道、玄室と掘り進めたが、数回の落盤をみた。その後、玄室天井部が既設の水道管、排水溝等で一部削平されていることが確認されたため、安全面を重視し、天井中央を崩し、調査を継続することにした。

玄室平面は不整方形を呈し、四隅はいずれも直角をなさない。各辺も、やや外開きで丸味をもつ。羨道は玄室のほぼ中央にとりつくが、玄門、羨門も、いずれも直角をなさず、鈍角となる。開口方向は S-40°-W である。

玄室長326cm、奥壁での玄室幅292cm、玄門での玄室幅330cm、推定玄室高190cm。天井はドーム状をなす。羨道長144cm、玄門での羨道幅138cm、羨門での羨道幅80cm、羨道高134cm。

墓道は羨道から直にのび、長さは480cmまで確認している。羨門での墓道幅118cm。墓道幅は次第に減じ、最狭部では58cmである。

玄室床面は奥壁から羨道にかけて、約20cmの比高差がみられる。玄室と羨道の境界付近では約5cmの不明瞭な段をなす。

玄室床面には、玄門と奥壁部分に20~30cm大の自然石がみられる。おそらく、棺台として利用された石が、後世に動かされているのであろう。その周囲には5cm前後の小礫が多数敷かれている。おそらく、排水機能を兼ねた一次埋葬時の床面であろう。しかし、玄室中央付近は、石、礫が全く残っておらず、後世に擾乱されていることをうかがわせる。

かなり軟弱な凝灰岩層に掘削されており、壁面、天井の剥落が著しい。

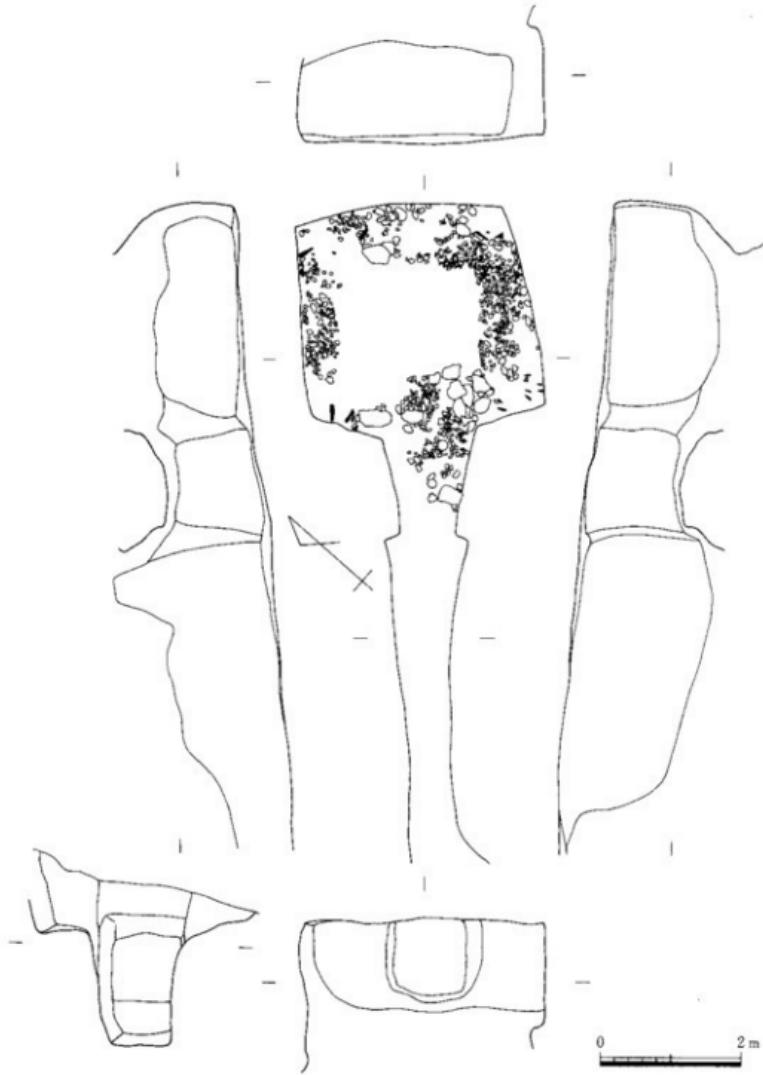


図-19 A 号墳実測図 (レベル高37.0m)

副葬品は、玄室および羨道床面から須恵器・土師器・鉄製品が出土、羨道上層から須恵器・土師器・瓦器が出土しており、玄室奥壁と羨道に集中していた。

土器

須恵器杯身1～4は、いずれも羨道から出土している。1は約3/10を残し、2・3は完形品である。いずれも内傾するやや低い立ち上がりを有する。2は底部外面に2本線のヘラ記号がみられる。3は外面全体を白色の自然釉で覆われ、灰色ないし黒灰色の着色物が多くみられる。4は高台を有する杯身であり、羨道東壁際の破片と玄門中央の破片が接合でき、ほぼ完形となる。高台はやや低く、口縁部は外反気味に丸くおさめる。

5は短頸壺。羨道中央と玄門西寄りで出土した多数の破片が接合でき、体部・口縁部の一部を欠くが、完形に近い。口縁部はやや長く、口縁部上半のヨコナデによって、内湾するような印象を与える。端部は丸くおさめる。体部最大径は、体部の1/3にみられ、肩はかなり張っている。底部は丸底となり、底部外面回転ヘラケズリ調整である。

6は有蓋短頸壺。奥壁際、中央で4点となり出土、体部から底部にかけて、約30%を欠く。口縁は短く直立し、体部最大径の位置はかなり高い。肩部は強い張りがみられ、肩部外面カキ目調整。底部外面は回転ヘラケズリ調整を施す。外面には白色の自然釉がみられ、蓋をかぶせて焼成したことが明瞭であるが、蓋は出土していない。

7は小形の壺である。6の有蓋短頸壺に接して出土し、口縁の一部を欠くが、ほぼ完形である。口縁部は外反し、端部は面をなす。体部はいびつな球形を呈し、頸部から底部にかけて、鈍い形態をなす。体部下半は回転ヘラケズリ、体部上半は回転ナデ調整。いずれも、非常に強く、かなり雑な調整である。



図-20 A号墳遺物出土状況

8は小形の横瓶。羨道部南寄りから出土した。釣手と口縁端部を欠損するが、他は完存する。口縁は外反するが、端部の形状が不明。釣手は口縁部を挟んで、2ヶ所にみられるが、一部を残すのみである。剥離痕から、2ヶ所共に環状の釣手が存在したものと考えられる。体部は卵形をなし、口縁部はその底端より取り付く。広端側の体部側面には、文様がみられる。回転カキ目調整の後、2本の凹線を二重に巡らせ、その内側に斜方向の浅い刺突文を巡らせていている。釣手の接合は施文後である。体部外面に白色の自然釉をかぶる。

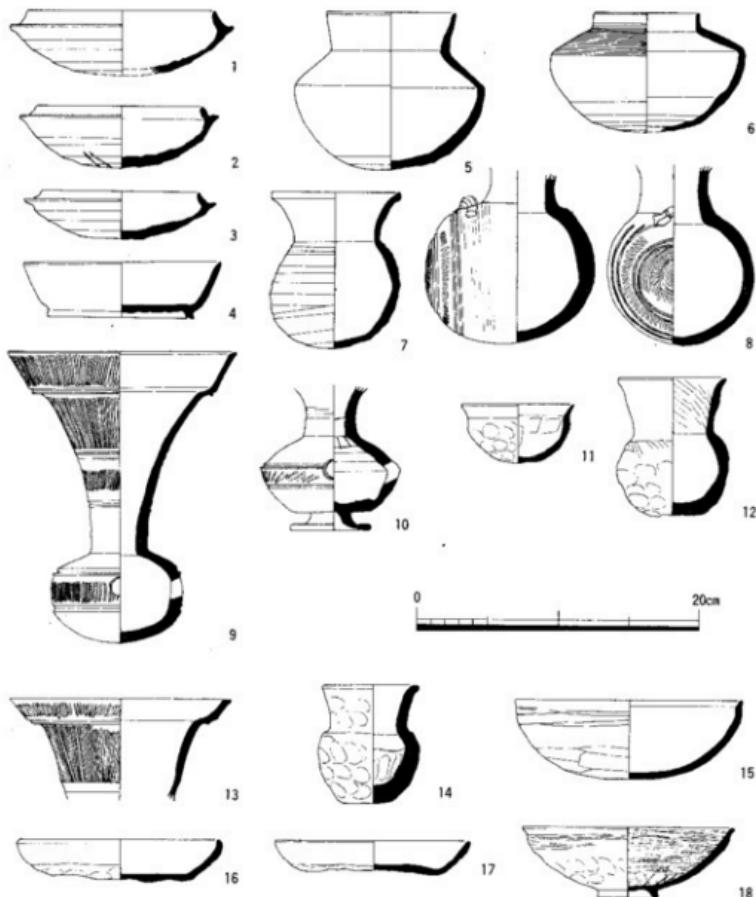


図-21 A号墳出土土器

9は甌。玄門東寄りから出土。口縁の一部を欠くが、ほぼ完形。器高20.6cm、口縁径16.2cm、頸部最小径3.9cm、体部最大径8.2cm。口縁径は体部最大径のほぼ2倍であり、頸部が非常に長く、不安定な形態である。体部は扁平な球形を呈し、穿孔はやや上位に位置する。頸部は大きく外反し、明瞭な段とシャープな凸線によって口縁部と区別される。口縁部は斜外方へ直にのび、端部上面は面をなす。体部外面には2本の凹線があぐり、その間に、やや左下がりの櫛齒状工具による刺突文が施される。頸部は中央よりやや上方に2本の凹線、下方に1本の凹線が巡り、その間に体部と同様の刺突文、2本の凹線より上には縦方向の櫛描文が施される。口縁部にも同様の櫛描文が施される。櫛描文は上から下へ施文されており、凹線に先行する。また、穿孔は、施文の後である。

10は小形の台付甌。台部、体部の半分、口縁部上半を欠損する。体部は肩が強く張り、細く外反する口縁部がつく。台部は低く、外方へのび、端部は肥厚気味に丸くおきめる。頸部外面に弱い凹線がみられるが文様を意識したものかどうか不明である。体部は2本の凹線が巡り、その間に粗い櫛齒状工具による左下がりの刺突文を施す。穿孔は肩部に凹線を切って穿たれている。外面全体に自然釉を厚くかぶる。

11・12は小形の土師器である。11は小形の甌。玄室北東隅から出土。浅い体部を有し、外方へのびる口縁部は、尖り気味の端部をなす。体部外面は指頭押圧、内面は板状工具によるナデ、口縁部はヨコナデを施す。

12は小形の壺。玄室中央奥壁近くで出土。口縁の一部を欠くが、ほぼ完形。体部外面は指頭による調整のため凹凸が激しい。底部は平底状になる。口縁部は外へ開き、端部は外反する。体部上半の一部と口縁部内面は、ハケ調整の後、ヨコナデ。体部の器壁は非常に厚く、体部外面の一部に打ち欠いた痕跡があるが、意識的なものかどうかは不明である。外面全体と口縁部内面に赤色顔料が塗布されている。

13～18は、いずれも羨道の上層から出土した遺物である。

13は須恵器甌の口縁部片である。9の甌とよく似た形態、文様であるが、9に比して、口縁部が短く、頸部の外反は弱い。凸線もやや鈍い。

14は土師器の小形壺。12と似ているが、体部最大径の位置がやや高く、口縁部は外反し、丸くおきめる。底部は狭い平底状をなす。器壁は非常に厚く、調整もかなり難である。やはり、体部外面と口縁部内面に赤色顔料が塗布されている。

15は土師器杯。比較的深く、口縁部はやや外反する。外面下半はヘラケズリ、上半はヨコナデ後にヨコ方向のヘラミガキを施す。内面は、磨滅のため暗文を確認できない。全体にかなり磨滅している。

16・17は土師器の皿。16の口縁は、やや内弯し、17は外方へのびる。いずれも底部外面指頭調整、内面一方向のナデ、口縁部ヨコナデ調整。雲母を多く含む。

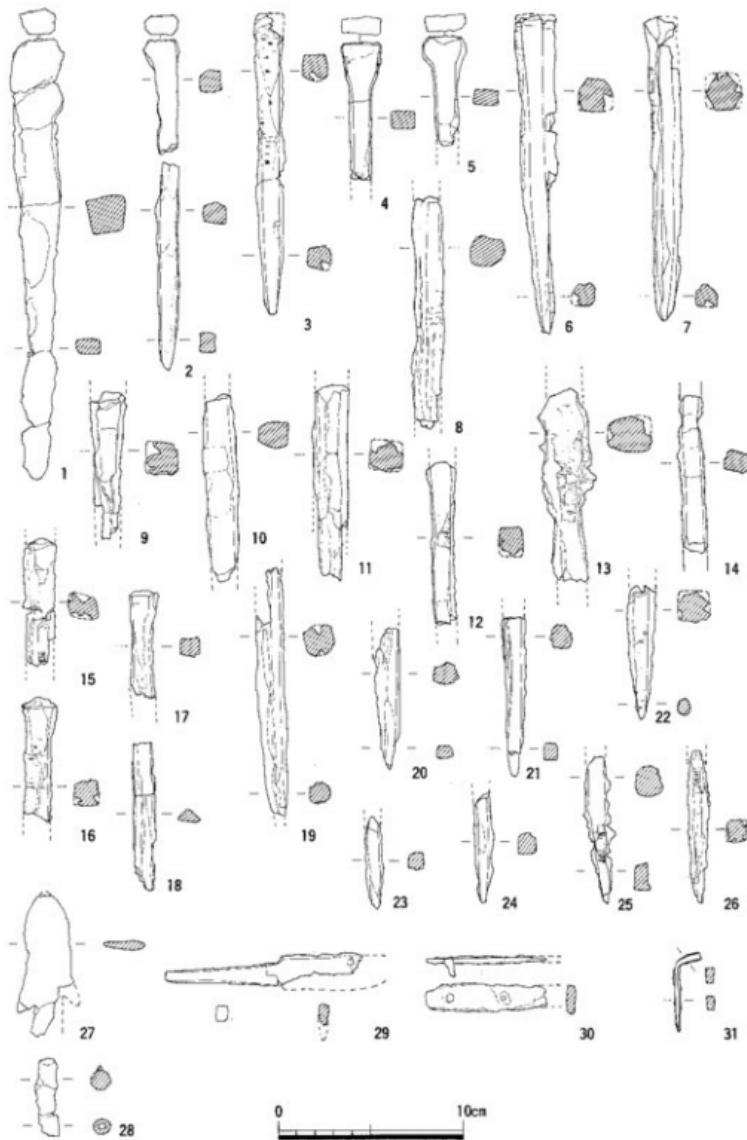


図-22 A号墳出土鉄製品

18は瓦器柄。高台は低く、口縁部に強いヨコナデを施す。外面下半には指頭圧痕が残り、上半には粗いヨコ方向のヘラミガキ。内面見込みの暗文は斜格子である。

16~18は同時期と考えられ、この時期に13~15がかき出されたものと思える。

鉄製品

鉄製品の大部分は釘であり、破片が多いため正確な数値は不明であるが、30本以上に達すると思われる。1~26は釘と思われるが、1は大形であり、他に同形のものが見られないため、別の用途を考えるべきかもしれない。釘は断面方形を呈するものと長方形を呈するものがみられ、前者は更に1辺1.5cm前後の大きさのものと、1cm前後の小形のものがみられる。しかし、完形の釘が無く、断面の位置によって大きさが変化するため、明瞭に区別できるものではない。大形品の頭部は頭部上端で開き、頭頂部が長方形となるもの(2)と、開かずに直線状に頭部へ至るもの(7)がみられる。断面が長方形をなす釘は、頭部で大きく開き、頭頂部は細長い長方形を呈する。(4・5)

釘はいずれも木棺の釘と考えられるが、以上のような観察から、4棺前後の棺釘を含んでいると思われる。釘は玄室の四隅から集中して出土しているが、いずれも原位置を動いていると考えられ、棺の規模、形態等を復元することは不可能である。木目を残す釘は11本あるが、いずれもヨコ方向の木目である。

釘以外の鉄製品には、鎌、刀子などがある。

27の鎌は、玄室北西隅から出土した。刃幅は2.4cm、先端は尖り、逆刺は一部を残すのみで、全形は不明である。茎の断面は円形をなし、端部近くでは中空となる。(28)

29は刀子。推定長12.5cm、推定刃幅2cm、刃厚0.5cm。刃の断面は三角形を呈する。柄との接合部の背には段がみられる。柄長6cm、柄厚0.6cm。一部に木質が残る。羨道床面出土。

30は不明鉄製品。長さ6.5cm以上、幅1.5cmの板状部に、2.9cm間隔で2本の突起がみられる。一方の突起は完存し、長さ0.7cm。他方は欠損し、痕跡のみ残る。留金具と思われるが、用途不明。玄室南西隅から出土。

31も用途不明の鉄製品である。直角に近い角度で屈曲する棒状鉄製品である。断面は長方形を呈する。

副葬品の年代は、1の杯身が6世紀後葉、2・3が6世紀末葉、4が7世紀末葉頃であろう。また15の土師器杯は7世紀前葉頃と推定される。他の遺物は、明確な年代を決め難いが、この時期内におさまるものである。以上から、A号墳の構築は6世紀後葉～末葉、その後、2回以上の追葬がなされていると考えられる。

16~18の土師器・瓦器は、12世紀後葉頃と考えられ、その時期に盗掘、もしくは祭祀が行なわれているようである。

B号墳

B号墳は、史跡指定地へ向かう道路下で検出されたが、この道路が現在も農道として利用されているため、掘り返して調査を実施した。更に、玄門付近が既設の土管によって擾乱されており、羨道部では湧水がみられるなど、十分な調査は実施できなかった。

上部は完全に削平されており、床面から15cm前後の高さを残すのみであった。玄室平面は長方形を呈し、推定N-61°-Eに開口する。今回の調査例の中で、北向きに開口する唯一の例である。

玄室長推定320cm、玄室幅280cm、羨道長推定130cm、羨道幅推定90cm、墓道幅推定120cm。

副葬品は東側壁の近くから須恵器、鉄製品が出土している。

須恵器は、小形の高杯杯部であり、杯部を半分残す破片である。口径10.7cm。杯部は浅く、口縁部は外反し、凸線状の段がみられる。全体回転ナデ調整。

鉄製品の1は、内反りの鎌と考えられるが、刃は明瞭ではなく、断面楕円形状を呈する。長さ11.5cm以上、刃幅2.3cm。

2は棒状の鉄製品。一端を破損する。長さ12.1cm以上、断面は0.8cm×0.6cmの長方形を呈する。断面の形態から釘とも考えたが、両端共に細くなるようである。

3・4は刀子。3は長さ7.6cm以上、片刃である。柄との境には段がみられる。4も刀子であろう。

須恵器高杯の形態から、B号墳の使用時期の一点は6世紀後半代にあると考えられる。また、すぐ北側に隣接する97号墳（3-25号墳）と、立地、開口方向から、関連があると考えられるが、97号墳は調査範囲外のため、前後関係等は確認できなかった。

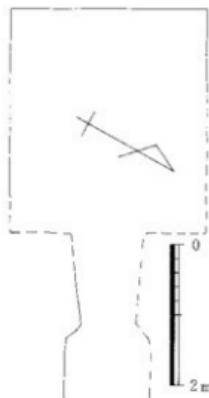


図-23 B号墳実測図

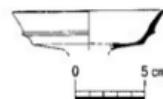


図-24 B号墳出土土器

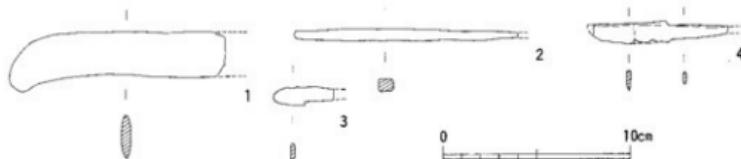


図-25 B号墳出土鉄製品

99号墳

大阪文化財センターの分布調査によって確認されていた横穴である。かなり比高差のみられる南斜面に掘削されており、天井部の崩落が激しい。横穴南側に近世末頃と思えるため池が掘削されており、横穴の損壊は著しい。従って、羨道部が確認できなかった。現存する部分が玄室であるとすると、玄室長490cm以上、玄室幅110cmとなり、非常に狭長な平面形態となる。玄室高は崩落のため不明。開口方向はS-6°-W。

ため池の南側には、土管を連結させた排水施設がみられ、木桶によって、水量が調整可能になるよう工夫されていた。この土管を埋置していた溝は、99号墳の墓道の一部を利用している可能性がある。

玄室の平面形態が異様に狭長であることから、横穴ではないかも知れないと考えたが、羨道にあたる部分が破壊されており、当然のことながら遺物が残っていないかったため、確定できる資料はない。他の遺構を考えることもできないため、おそらく横穴で間違いないと考え、横穴として扱うこととした。

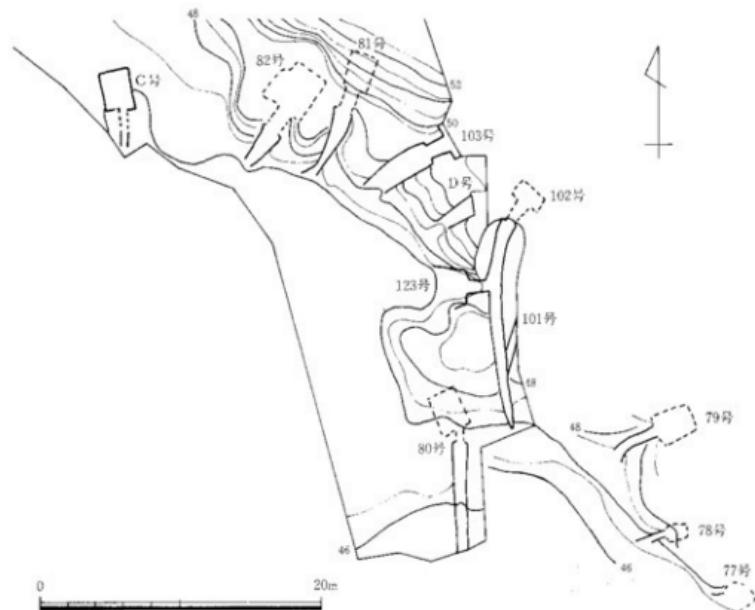


図-26 地形図③

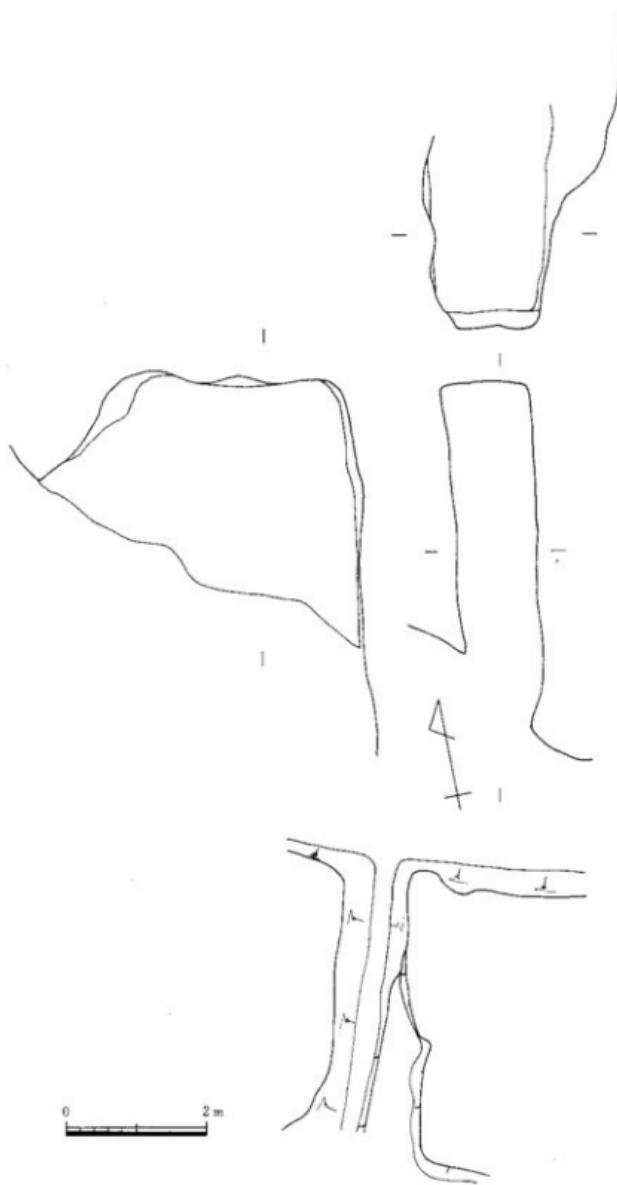


図-27 99号墳実測図(レベル高38.0m)

80号墳

80号墳は、調査前から一部開口しており、玄室内の破損もかなりみられた。特に、東側壁、玄門での崩壊は著しい。

玄室平面は、かなり整美な長方形であったと推定されるが、羨道は東側壁近くに取り付き、片袖状になる。これは、東側に高く、西側に低い尾根の南斜面に築造されたことによる地形的な要因が考えられ、意識的に狭道を一方の側壁へ寄せたものではないと考えられる。

玄室主軸はS-26°-Eであるが、羨道は玄門からS-7°-Eの角度でほぼ直にのびる。墓道もほぼ同一の角度でのびている。

玄室長297cm、玄室幅推定208cm、玄室高220cm、奥壁高125cm、羨道長154cm、羨道幅86cm。羨道天井は崩落が激しく、120cm前後の高さであったと推定される。

羨道と墓道の境には約5cmの段がみられる。墓道の長さは880cmまで確認できたが、その地点で消滅している。墓道床面の幅は15~70cm、横断面は床面が平坦な逆台形を呈する。

床面の比高差は、玄室内ではみられず、羨道から墓道にかけて、徐々に低くなる。しかし、傾斜は比較的緩やかである。

玄室床面には、長辺30cm前後の自然石が多数認められ、棺台に使用された石と思える。自然石は、東辺で直線状に並ぶが、全体に規則性は認めがたく、かなり移動しているものと思える。

羨道にも同様の自然石が多数検出されており、3~4段に積み上げた状況が伺える。閉塞石と考えて間違いないであろう。玄室の自然石には、この閉塞石の転落石もかなり含まれていると考えられる。なお、自然石は、花崗岩以外に、チャート等も多く認められ、付近で採集した石だけでなく、大和川の河原石も使用しているようである。

遺物は玄室床面から須恵器、鉄釘、墓道から須恵器、土師器が出土している。

土器

1~5は、玄室床面から出土した須恵器である。

1は杯身。口径12.9cmとやや大ぶりである。立ち上がりは内傾し、端部は丸くおさめる。底部回転ヘラケズリ。口縁の一部を欠くが、ほぼ完形。奥壁近くから正位置で出土。

2は小形の短頬壺。体部は平底に近い丸底、口縁は内傾から転じて直立となる。体部下半回転ヘラケズリ、体部上半回転ナデ調整。肩部に弱い凹線が2本認められる。玄門近くの自然石下より、倒立状態で出土。完形。

3は玄門西側から横位で出土した壺である。口縁部を一部欠損するが、他は完存。平底から胴張りの体部を有し、頸部は外反し、口縁部との境に段がみられる。口縁端部は、直立気味につまみあげる。体部に平行叩き目の痕跡を残すが、ナデとカキ目によって丁寧に調整されている。底部はナデ調整。全体に、ややいびつである。口縁内面、外面肩部に白色の自然釉をかぶっている。

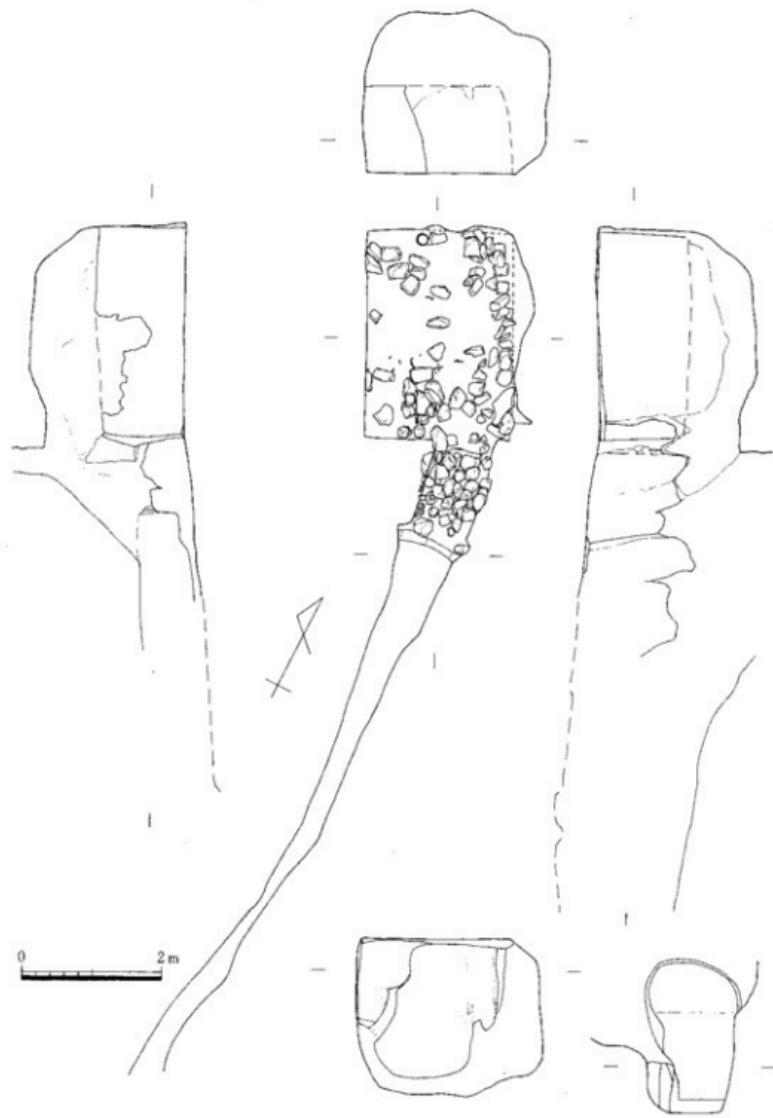


図-28 80号墳実測図 (レベル高45.0m)

4・5は提瓶。4は半球状の体部に、強く外反する口縁部が付き、端部は垂下気味に肥厚する。釣手は一方を残すのみであるが、環状の釣手である。体部凸面は平行叩きの後、粗いカキ目、一方の面も粗いカキ目調整がみられる。側面の一部には回転ヘラケズリが認められる。また、釣手近くに、わずかではあるが、目の細かい布の圧痕が認められる。

5の提瓶は、やや小ぶりの体部に、短い口縁部が付く。口縁部は外反し、端部肥厚する。釣手はいずれも欠失しているが、カギ状のものであろう。体部は全面に細かいカキ目を施し、指頭痕が数ヶ所残る。4・5は、いずれも口縁の一部と釣手を欠くが、ほぼ完存する。3の壺を挿んで、いずれも横位で出土している。5は暗橙色を呈し、還元炎焼成が不十分である。

6～12は、墓道の埋土から出土した。9・11は墓道上層から、他は下層から出土している。12のみ土師器。

6は杯身。立ち上がりは、かなり高い。約1/4を残すのみである。

7は長脚二段透し高杯。杯部には、杯蓋にみられるような稜線が認められる。脚中央に2本の凹線が巡り、二段二方の透し孔はヘラ状工具によって刻まれているだけである。上段の透し孔は貫通していない。裾広がりの脚は、端部で屈曲し、更に外方へつまみ出すようなヨコナデを施す。

8は短脚の高杯であるが、7の高杯が退化した形態と考えられる。杯部の棱は凹線状と化し、脚部は低く、やや太くなる。脚部の2本の凹線は鈍く、透し孔はみられない。脚端部も下方に屈曲するのみである。7に比して、全体に鈍い形態である。7・8は、共に口縁の一部を欠くが、ほぼ完形である。

9・10は長頸壺。9は体部最大径が体部のほぼ中央に位置し、それより下半は回転ヘラケズリ。口縁部は直立気味に外方へ立ち上がる。口縁部の大部分を欠損するが、体部はほぼ完存する。

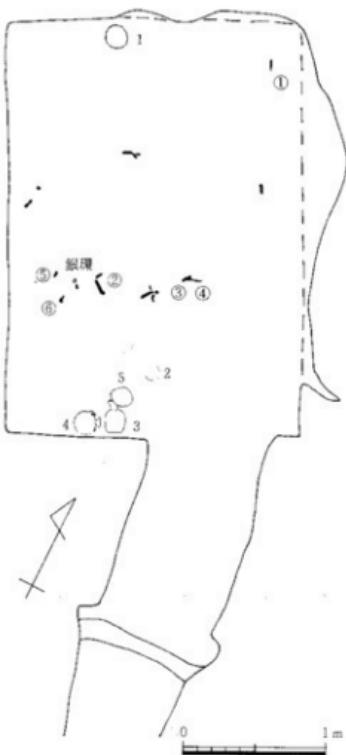


図-29 80号墳遺物出土状況

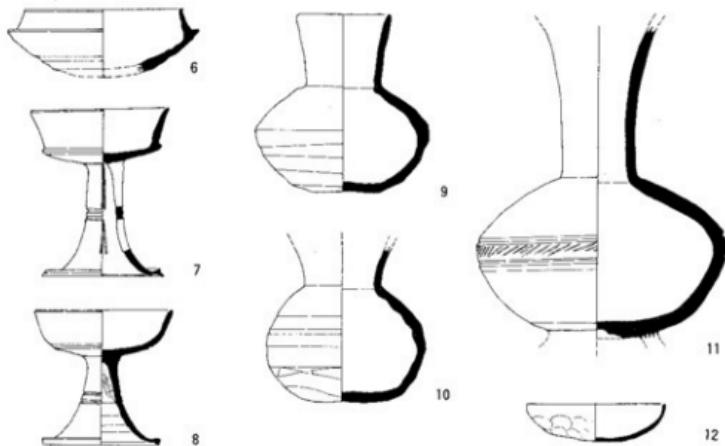
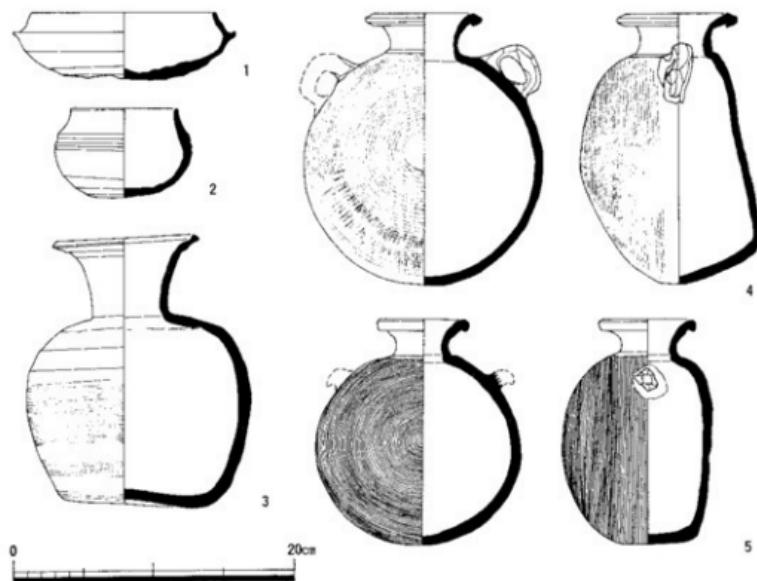


図-30 80号墳出土土器

10の壺は、やや下ぶくれの体部を有し、口縁部は9と同様の形態と考えられるが、上半を失する。体部下半、回転ヘラケズリからナデ調整。上半は回転ナデ調整。

11は台付長頸壺。体部は、その中央に最大径が位置し、2本の凹線と、その間に斜方向の刺突文が連続する。頸部は細く長い。口縁部は欠損する。台部は完全に欠失する。

12は土師器杯。内外面共に剥離が著しく、下半に指頭痕が残る。

銀環

銀環は玄室中央、西側壁近くで出土した。外径2.8cm、内径1.6cm。断面は0.7cm×0.5cmの楕円形を呈する。一面の残存状態が良いが、他面は銀の剥離がみられる。芯は銅と考えられるが、緑青はみられない。

玉類

琥珀製の糸玉が1点、銀環の約30cm東、玄室ほぼ中央で出土している。長さ1.8cm、断面は長径1.1cm、短径0.7cmの楕円形である。孔は直径0.3cmである。一端には、紐ずれ痕がみられる。赤褐色を呈し、半透明。非常に滑らかに仕上げられている。

鉄製品

釘が破片も含めると11点、他に小さい板状の鉄製品も認められるが、用途は不明である。1・2は断面方形を呈する。共に1辺5mm前後の正方形である。頭部は1が一方へ折り曲げた形態であるのに対し、2は徐々に太くなり、丸味を帯びた頭部となる。

3～6は断面が長方形を呈する釘である。頭部の形状は不明。4は縦方向、5・6は横方向の木目が残る。2枚以上の釘を含んでいると考えられるが、木棺を復元することは不可能である。

遺物の中で、最も古い時期が考えられるものは、6の須恵器杯身で、6世紀中葉頃であろう。しかし、墓道埋土からの出土であり、破片であるため、確実に80号墳に伴う遺物と断言できない。それに続く時期として、1の杯身が考えられ、4・7も、同時期まで遡らせることができるものかもしれない。更に、5・8の時期へ続くと考えられる。他の遺物も、ほぼこの時期内におさまると考えられる。

すなわち、80号墳は
6世紀中葉、もしく
は後葉から、7世紀
初頭頃まで追葬が行
なわれたと想定でき
る。

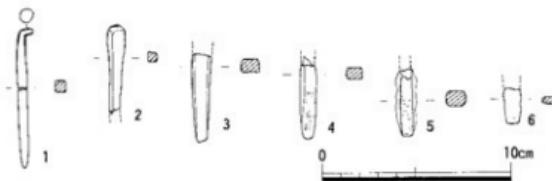


図-31 80号墳出土
銀環・糸玉

図-32 80号墳出土鉄製品

101号墳

101号墳は、その墓道を長さ約70cm検出したのみであり、調査範囲外で、101号墳に至るものと考えられる。墓道幅170cm、深さ約30cm。南端で102号墓道に接する。その接する部分で、102号墓道の方が約50cm深く、埋土の状況も参考にすると、101号墳が102号墳に先行すると考えられる。

101号墳は、大阪文化財センターの試掘調査によって発見された横穴である。試掘調査において、1トレンチでその墓道を、2トレンチで玄室を調査している。それによると、玄室はS-26°-Wの方位であり、天井は落盤するものの、壁面の残存状態は良好なようである。床面から須恵器高杯の完形品のほか、須恵器、土師器、鉄釘が出土しているようであるが、時期についての記述は認められない。

102号墳

102号墳は、玄室平面が横長の長方形を呈する非常に珍しい横穴である。開口方向は、S-32°-W。

玄室長124cm、玄室幅214cm。天井は完全に崩落しており、高さ、形状は不明。床面から118cmの高さまで本来の壁面を残している。

羨道は、玄室のほぼ中央に取り付くが、玄室の規模に比して、幅が広い。羨道長156cm、玄門での羨道幅104cm、羨門での羨道幅74cm。

墓道は、羨道からやや南寄りにのびており、総延長約16mまで確認できた。断面は逆台形状を呈し、羨門での幅は116cmを測るが、最狭部では床面幅は15cmとなる。ほぼ足が入るだけの幅を掘削しているようである。

羨道部には閉塞石と考えられる自然石が残っており、玄室にも棺台、もしくは閉塞石と考えられる自然石がみられる。

遺物は、玄室内では鉄釘が2本出土したのみであるが、鉄釘の存在を示す赤鏽の痕跡が9ヶ所で確認された。後述するように、102号墳は大阪文化財センターが調査しており、その際に検出できなかった2本が残っており、他は調査時に取り上げた痕跡であろう。土器は墓道の南半で出土しているが、玄室、および羨道では出土していない。

大阪文化財センターの試掘結果について記述しておくと、1トレンチで102号墳の墓道を確認し、2トレンチで玄室を確認している。墓道からは、須恵器、土師器、埴輪が出土している。玄室内床面と玄門右端部分から、多数の須恵器が出土し、鉄製品、土師器も出土しているとのことであるが、やはり、器形、時期等についての記述がみられないのは残念である。なお、文化財センターの試掘ではトレンチ幅のみ調査しているため、102号墳の玄門から玄室中央までを調査したと記述されているが、上述のように、横長の玄室は、ほぼ完全に調査されており、事実誤認である。

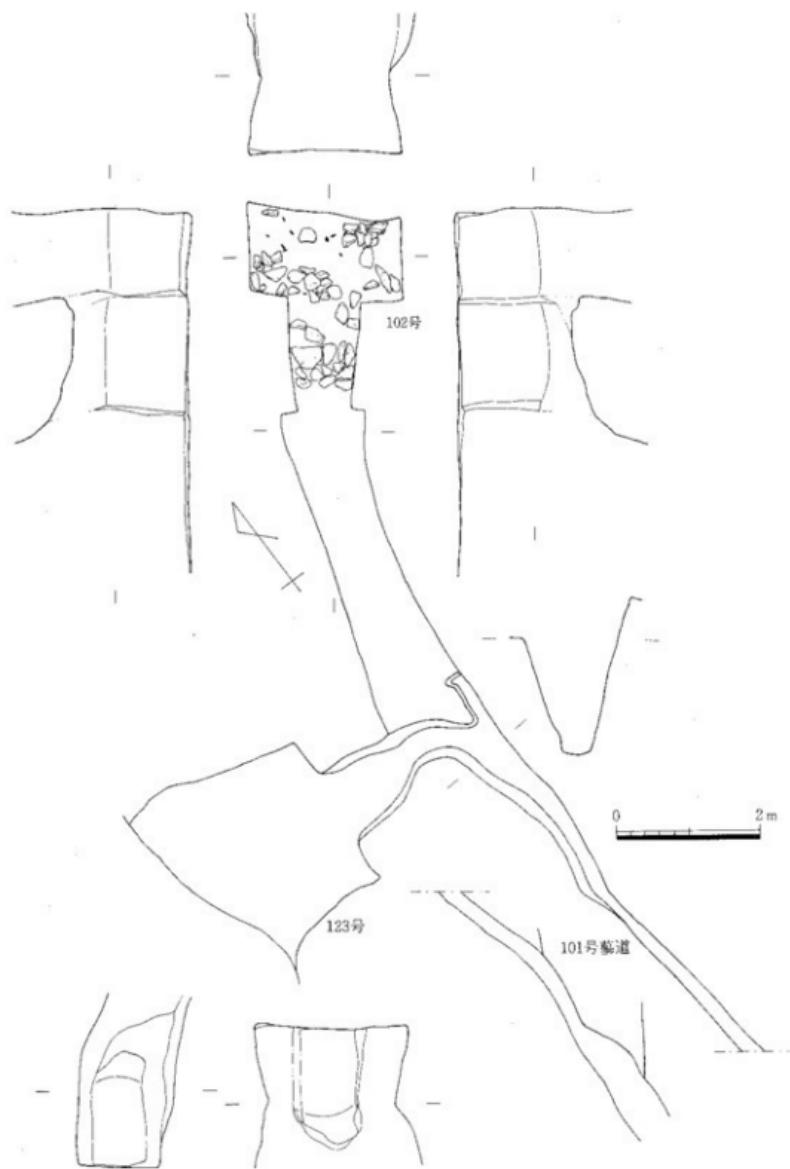


図-33 101・102・103号墳実測図（レベル高49.0m）

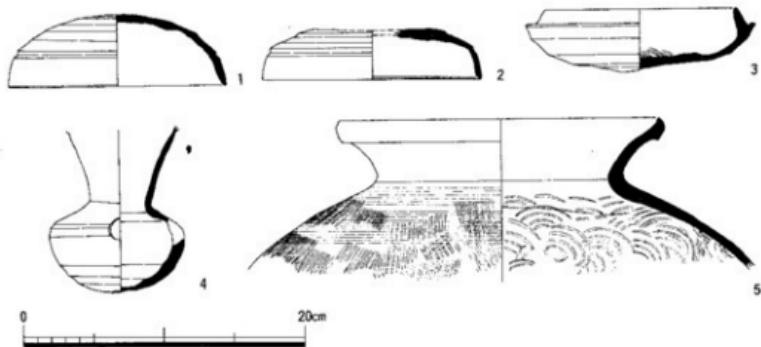


図-34 102号墳出土土器

土器

1～5は、いずれも墓道南半から出土した須恵器である。

1は杯蓋。ほぼ完形である。天井との境の稜は凹線状になっており、口縁部はやや開き気味になる。天井部は丸い。

2も杯蓋で、1と良く似た形態である。全体の1/4を残すのみである。

3は杯身。立ち上がりは厚く、短い。内底面に同心円の当具痕が残る。

4は魁。体部最大径は中央より上方に位置し、やや肩の張った形態をなす。頭部は、やや太く、大きく開くが、口縁部を欠損する。

5は甕。口縁部は外反し、直立気味に肥厚する。体部内面は同心円、外面は平行叩きの後、部分的に回転カキ目調整。多数の破片で出土しており、破碎されたものと考えられる。

鉄製品

釘が2本出土している。1は折曲頭の釘で、断面は長方形を呈する。全体に横方向の木目が残り、継ぎ目は確認できない。2も横方向の木目を残すが、断面は方形を呈する。

前述のように、9本の痕跡と合わせ、11本以上の釘が存在したものと推定され、1～2枚と想定される。

土器は、いずれも6世紀後葉頃と考えられるが、墓道からの出土であり、この墓道が後述するように123号墳と共有されていることから、102号墳の年代を決定する資料とは決め難い。102号墳が特異な玄室であるために、その年代を決定する文化財センター調査時の遺物が公表されていないことが残念である。

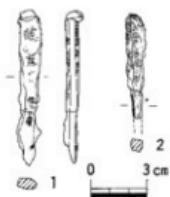


図-35 102号墳出土
鉄製品

123号墳

123号墳は、上部が完全に削平されており、玄室・羨道共に約10cmの高さを残すのみである。また、奥壁は削平されており、玄室平面形態も不明である。羨道は玄室の中央に取り付き、開口方向は、S-87°-Eである。

玄室長250cm以上、玄室幅230cm、羨道長120cm、羨道幅100cm。

墓道は102号墳と共有し、102号墓道を更に10cm程度掘り下げている。立地等から、102号墳が123号墳に先行すると考えられる。

遺物は全く出土していないが、102号墓道の遺物が123号墳に伴う遺物である可能性も残されている。

123号墳も、大阪文化財センターの試掘調査によって発見された横穴である。試掘調査の1トレンチで検出され、調査時に、既に102号墳と墓道を共有することが確認されていた。調査概報によると、天井は落盤しているが、奥壁、両側壁は痕跡を残しており、羨道閉塞石は完全に残っていたということである。写真から、羨道部がかなり良好に残っていることが伺えるが、現状では羨道はほとんど削平されており、奥壁も残っていなかった。調査後、現在に至るまでの間に、削平されているようである。

床面から、金環1対、須恵器台付壺、脚付壺、鉄釘、鉄鏃が出土しているようであるが、やはり、時期についての記述はない。

102号墳と123号墳は、墓道を共有する点で注目される。墓道を共有することは、102号墳と123号墳が密接な関係を有していることを示し、血縁関係の存在を推測させるものである。横穴群の支群のあり方、そして被葬者集團を考えるうえで、貴重な資料となった。

D号墳

D号墳は、102号墳と123号墳の間で発見され、墓道と思われる遺構を検出した。大阪文化財センターのトレンチで、D号墳墓道の延長部分に当たっているはずであるが、概報に記載はみられず、確認されていないようである。

玄室を発見するには至っていないが、他の調査例と比較すると、墓道になることは間違いないと考えられ、これを新発見の横穴とし、D号墳と仮称する。

墓道の方位は、S-61°-W。確認した長さ230cm、幅94cmである。



図-36 D号墳墓道実測図
(レベル高50.0m)

土器

土器は、埋土から須恵器短頸壺が1点出土している。

体部最大径は、体部1/3にみられ、張りは強い。体部上半は直線的になり、下半は球形状を呈する。口縁は、ほぼ直立する。肩部と口縁部に、櫛歯状工具による浅い刺突文がみられる。口縁の大半を欠損する。

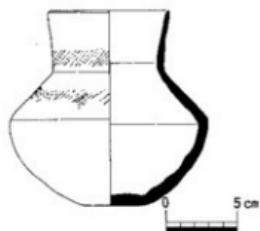


図-37 D号墳出土土器

103号墳

103号墳は玄門付近から墓

道にかけて調査を行なった。

羨道は、玄室中央に取り付
き、ほぼ左右対称形をなす。

開口方向は、S-63°-W。

玄室幅274cm、羨道長161cm、
羨道幅95cm。

墓道は長さ535cmまで確認、
羨門での墓道幅164cm。

上部は大きく削平され、天
井も落盤している。

103号墳も、大阪文化財セ
ンターによって調査されてお
り、1トレンチで墓道を、2
トレンチで玄室を確認してい
る。調査概報によると、天井
は落盤しており、玄室床面に
は鉄釘が一面に散乱しており、
複数の埋葬が想定されている。
他に、床面から須恵器片、土
師器片が出土しているようだ
ある。

今回の調査では、玄門と墓
道から須恵器、土師器が出土
している。

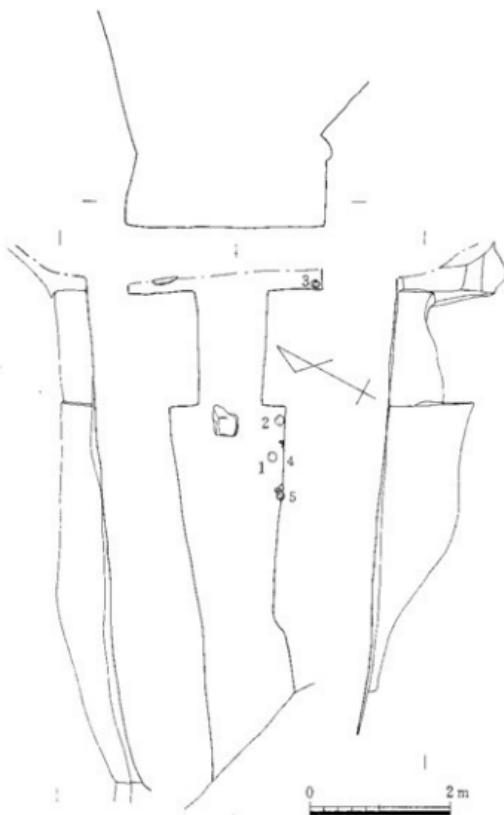


図-38 103号墳実測図

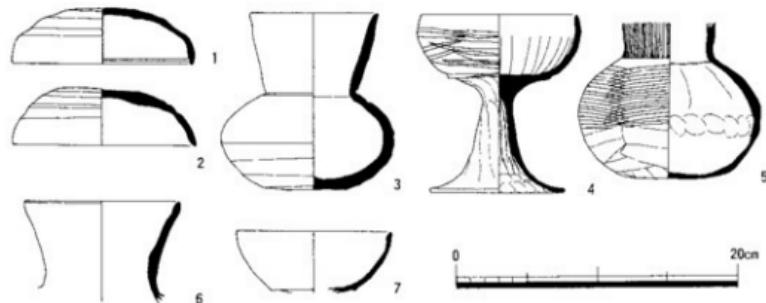


図-39 103号墳出土土器

土器

1～5は、玄室・墓道床面から出土した土器。1～3は須恵器、4・5は土師器である。

1・2は杯蓋。いずれも稜は退化し、弱い段状になる。器形、法量、調整法等は酷似する。いずれも墓道から正位置で出土。完形品。杯身はみられない。

3は盃。体部は偏平な球形を呈し、底部は平底に近い丸底。体部最大径は、その中央にみられ、体部下半はヘラケズリ。口縁部は斜外方に直線的にのびる。玄室南西隅から、正立状態で出土。完形品。

4は土師器高杯。杯部は深く、口縁部は直立からやや内寄する。杯外面に段がみられる。脚裾部は水平に近く広がる。杯部外面ヨコ方向のヘラミガキ、内面は間隔の広い放射暗文。口縁部はヨコナデ。脚外面はタテ方向のナデ、内面はシボリメ、裾部指頭調整。墓道壁面に、もたれかかるように出土。脚裾部を一部破損する。

5は土師器壺。体部は球形、底部は平底。口縁は直立するが、口縁端部を欠損する。体部下半ヨコ方向の軽いヘラケズリ。体部上半は四分割のヨコ方向ヘラミガキ、口縁部はタテ方向のヘラミガキ。内面ナデ調整。4の高杯に接して出土。半存。

6・7は埋土上層から出土。6は須恵器壺口縁部。端部はやや内寄する。

7は土師器杯。表面剥離が著しく、調整不明。

紡錘車

滑石製の紡錘車が玄門部から出土した。外面は滑らかに仕上げられており、上部はやや凹面をなし、下部は直立する。底面の調整は、やや雑である。直径3.8cm、高さ1.5cm、口径0.6cm。淡緑灰色を呈する。

遺物は6世紀末葉頃と考えられ、103号墳の年代の1点を示していると考えられる。

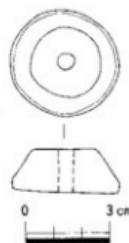


図-40 103号墳
出土紡錘車

81号墳

81号墳の玄室平面は、長方形状を呈するが、玄門でやや狭くなる。羨道は玄室のほぼ中央に取りつく。

玄室長268cm、玄室幅212cm、玄室高216cmを測るが、天井や壁面は、本来の壁面をあまり残していない。後世に、天井を高く掘り抜げているようである。壁面に工具痕が残るが、掘り抜げた部分にしか残っていないので、横穴に伴うものとは考えられない。玄門には「X」状の線刻がみられ、奥壁には20cm四方、奥行20cmの棚状の施設がみられるが、これも後世のものと考えられる。ある時期に、開口していた横穴を掘り抜げて使用しているようである。棚状の施設は燭台であろうか。

羨道長148cm、羨道幅92cm、羨道高188cm。やはり、天井は掘り抜げられているようである。

羨道と墓道の境には、約5cmの段がみられる。墓道長560cm、羨門での墓道幅154cm、最狭部幅54cm。墓道前面は削平されている。

開口方向は、S-20°-W。玄室床面には、30cm前後の大きさの自然石があり、棺台と思える。玄門から羨門にかけて、須恵器、土師器、金環が出土しており、玄室床面からは鉄釘が多数出土している。

土器

1~12は、玄門、および羨道床面から出土。1~8は須恵器、9~12は土師器。

1~4は杯蓋。1~3は内面にかえりを有しない杯蓋。天井の稜はみられない。1は大きく、天井は低平である。内面中央に同心円の当て具痕が残る。外面天井部には「X」のヘラ記号がみられる。2・3は天井部に指頭痕が残り、雑な調整である。1~3は、いずれも羨道部から内面を上にした状態で出土している。すべて完形品である。

4は内面にかえりを有する杯蓋。擬宝珠つまみは、低く小さい。かえり下端は、口縁端部より下方に位置する。完形品。羨道部玄門近くから、三破片で出土。

5は杯身。底部は平らで、立ち上がりは非常に短い。底部は、ヘラ切り後、ナデ調整。外面に白色の自然釉をかぶる。羨道中央から、倒立状態で出土している。

6は長脚二段透高杯の杯部。杯部には二段の稜がみられるが、いずれも鈍い。端部は丸くおさめる。脚は一部を残すのみであり、透し窓は二方まで確認でき、おそらく三方透しであろう。透し窓は貫通するが、ヘラ状工具で刻んだだけのものである。羨道中央、床面からやや上で杯部を上向きに出土した。4の杯蓋片は、5の杯身、6の高杯に重なるように出土している。

7は平瓶と壺の中間形態であり、いずれを意識して製作したものか不明である。口縁部は体部中央よりやや偏して取り付き、口縁上端も傾斜しているため、一応、平瓶としておく。体部最大径は、ほぼその中央に位置し、偏平な球形を呈する。底部は平底である。口縁部は、ほぼ直立し、端部はやや内弯する。全面ナデ調整。羨道中央から正立状態で出土。

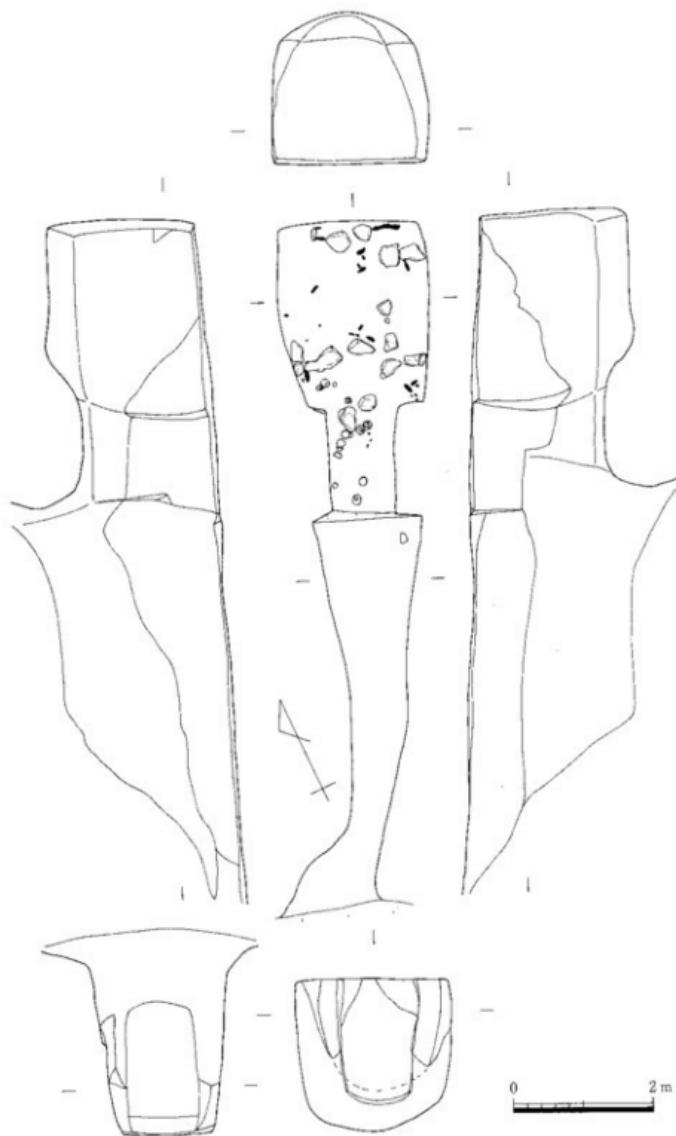


図-41 81号墳実測図(レベル高48.0m)

8は平瓶。体部は偏平な球形を呈し、体部最大径は、1/3前後に求められる。口縁は、かなり偏して取り付き、大きく開く。口縁端部は丸くおさめる。玄門西寄りから正位で出土。完形品である。

9は土師器高杯。杯部は深く、内底面は平坦になり、徐々に内弯し、口縁端部は丸くおさめる。脚は裾広がりで丸くおさめる。杯部内面に間隔の広い放射暗文、外面にやはり間隔の広いヨコ方向のヘラミガキを施す。杯部外面の段は弱い。脚部外面はタテ方向のナデ、裾部はナデ調整。脚内面にはシボリメが残り、裾部には放射状の指ナデがみられる。羨道部から横位で出土。ほぼ完形であるが、磨滅が著しい。

10～12は小形の椀である。10は口縁径6.3cm、器高3cm。器壁はやや厚く、体部はやや内弯する。内面は板ナデ後、ナデ、他は全面ナデ調整。底部を欠き、表面剥離が著しい。玄門から8の平瓶に接して倒位で出土している。

11は口径6.4cm、器高3.2cm。ほぼ10と同大である。やはり体部は内弯する。外面ナデ、内面には板ナデの痕跡が残る。一部を欠損、磨滅がみられる。羨道部から正位で出土。

12は、10・11に比してやや大きい。口径8.4cm、器高4cm。器壁は厚く、体部はやや内弯する。外面ナデ調整、内面板ナデの痕跡が残る。口縁部はヨコナデ調整。羨道部から、2の杯蓋に重なるように下層から倒位で出土している。

13～16は羨道上層から出土している須恵器である。

13・14は杯蓋。13は平らな天井部と、天井部から直角に屈曲する口縁部を有する。稜はみられない。天井部中央に「×」のヘラ記号がみられる。1の杯蓋と同一のヘラ記号であり、口縁、色調、胎土、焼成共、1に近似する。口縁部を一部欠損する。

14は小ぶりの杯蓋である。天井部は丸く、稜は全くみられない。器壁は厚い。口縁の一部を欠損する。

15は短い立ち上がりを有する杯身。底部は丸い。

16は甕の口縁部。口縁端部は肥厚し、外面に段がみられる。体部内面は同心円の当て具痕が残り、外面は平行の叩き目を残す。口縁部外面はカキメ調整。



図-42 81号墳遺物出土状況

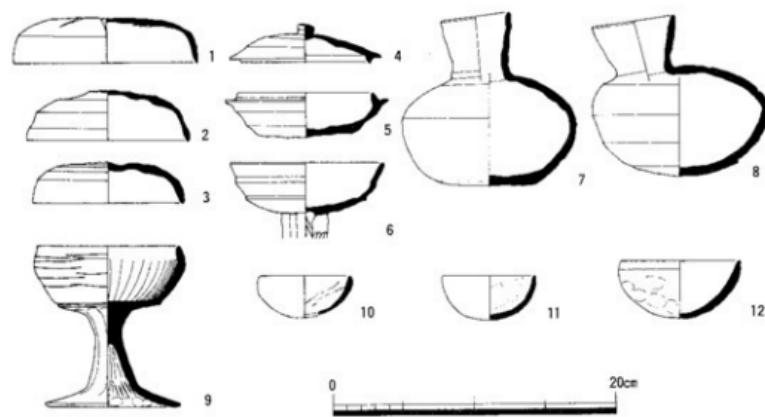


図-43 81号墳出土土器

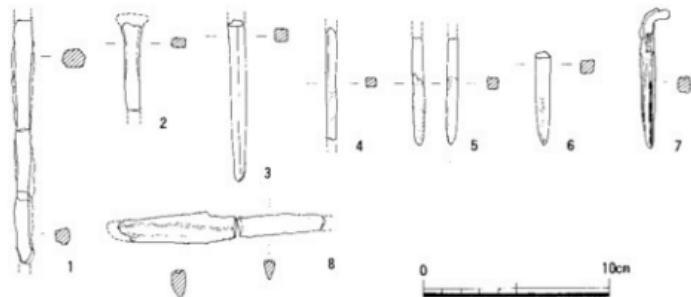


図-44 81号墳出土鉄製品

鉄製品

1～7は鉄釘。いずれも玄室床面から出土している。

1は断面方形を呈する大形品。上下端を欠損する。断面は1辺8mm前後を測る。現存長13cm。

2は頭部が徐々に開く形態の釘と思える。断面は7mm×5mmの長方形をなす。

3～7は、いずれも断面が5～7mmの方形を呈する。4は縦方向、6は横方向の木目を残す。

5は斜方向の木目を残し、その用途が疑問である。7の釘は折曲頭。上半は横方向の木目、下半は縦方向の木目を残す。

釘は総数20点前後になると思えるが、破片ばかりであり、実数は不明である。釘は玄室全面から出土しているが、配置に規則性は認められない。釘の形態から2～3棺が埋葬されていたものと思える。

8は刀子。玄室北東隅から出土している。残存長11.2cm。刃長5.2cm、厚さ0.7cm。断面は五角形を呈する。背には抉りがみられ、柄は背側が平坦、刃側が尖り、断面三角形を呈する。柄長6.4cm以上、厚さ0.6cm。

金環

金環は、羨道中央床面直上から出土した。長径2.6cm、短径2.2cm。下半は円形を呈するが、上半は直線状になる。金は比較的残っているが、部分的に剥落がみられる。外面には、金薄板を巻きつけた際に生じたと思われる皺が全体にみられる。断面は長径0.8cm、短径0.5cmの橢円形を呈する。

81号墳からは須恵器蓋杯が多数出土しており、年代の目安となる。1・13は、6世紀後葉頃と考えられ、出土位置は異なるが、同一のヘラ記号を有し、同時期のものと考えられる。それに続く時期の土器として2・15が考えられ、3・5・14がこれに続くであろう。4は内面にかえりを有するが、かえりを有する杯蓋としては初期のものと考えられ、後者とほぼ同時期であろう。蓋杯は多数出土しているにもかかわらず、色調、焼成等からセットをなすものはみられない。

以上から、81号墳の年代は6世紀後葉頃から7世紀前葉頃と考えられ、他の土器も、この年代幅におさまると考えられる。土器や釘の観察から、81号墳の埋葬は少なくとも3回程度行なわれていると考えられる。

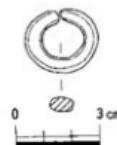


図-45 81号墳
出土金環

82号墳

82号墳は、造り付け石棺を伴う横穴である。天井は既に崩落していたが、床面の遺存状況は比較的良好であった。開口方向は、S- 35° -Wである。

玄室は長方形平面を呈するが、造り付け石棺の部分のみ、西側へ突出している。玄室長340cm、奥壁での玄室幅250cm、石棺を含めた玄室幅326cm、奥壁高108cm。玄室床面には、40cm前後の白然石が多数みられる。棺台と考えられるが、原位置には留まっていないようである。また、奥壁に接して、長さ262cm、幅84cm、高さ5cmの台状施設が認められる。その規模、位置から棺台と考えられ、おそらく横穴掘削時から造られていたものであろう。

造り付け石棺は、ほぼ長方形を呈するが、南端が明瞭な角を有するのに比して、北端は橢円形状を呈する。これは石棺側縁と玄室の側縁が一致しないにもかかわらず、見かけ上の不自然さを無くそうという意識が働いたためであろう。

石棺の外縁での長さ268cm、幅98cm、高さ84cm。内部はかなり崩れているが、復元すると、長さ180cm、幅35cm前後、深さ50cmとなる。幅が少し狭すぎるよう思うが、最も幅の広い部分は54cmあり、他の部分でも壁面の傾斜は比較的緩やかであるため、一体の埋葬は十分可能であつただろう。

石棺上面は、南半で原状を良好に残しており、幅20cm前後の平坦面がみられる。北半では、長径76cm、短径63cm、厚さ26cmの扁平な自然石が石棺を覆っており、棺蓋と推定される。この石の北側にも、やや小さい自然石が2個ある。この棺蓋の重量で、石棺はかなり崩れている。そのため、石棺上面の平坦面が崩れているが、南半のような明瞭な平坦面は当初から存在していないと思われる。⁽¹⁾

羨門の両側には、段状の施設がみられる。上面はほぼ平坦であり、不整方形である。東側は、長辺44cm、短辺26cm、高さ26cm。西側は、長辺48cm、短辺28cm、高さ26cm。何のための施設であるか不明である。門としての外観を意識したものであろうか。

羨道長102cm、上述の施設を含んだ長さ150cm、羨道幅120cm、羨道高147cm。

墓道は羨道からまっすぐのび、南端でやや東へ振っている。長さは430cmまで確認、上述の段状施設での幅180cm、最狭部での幅60cm。床面は徐々に下がっており、奥壁と墓道端部の比高差74cmである。

副葬品は少なく、玄室北東隅で須恵器高杯、南西隅で須恵器の高杯と壺、奥壁近くで須恵器の壺体部破片が出土しているのみである。鉄製品は棺釘が床面から出土している。

造り付け石棺内には、土が厚く堆積していたが、遺物は全く出土していない。

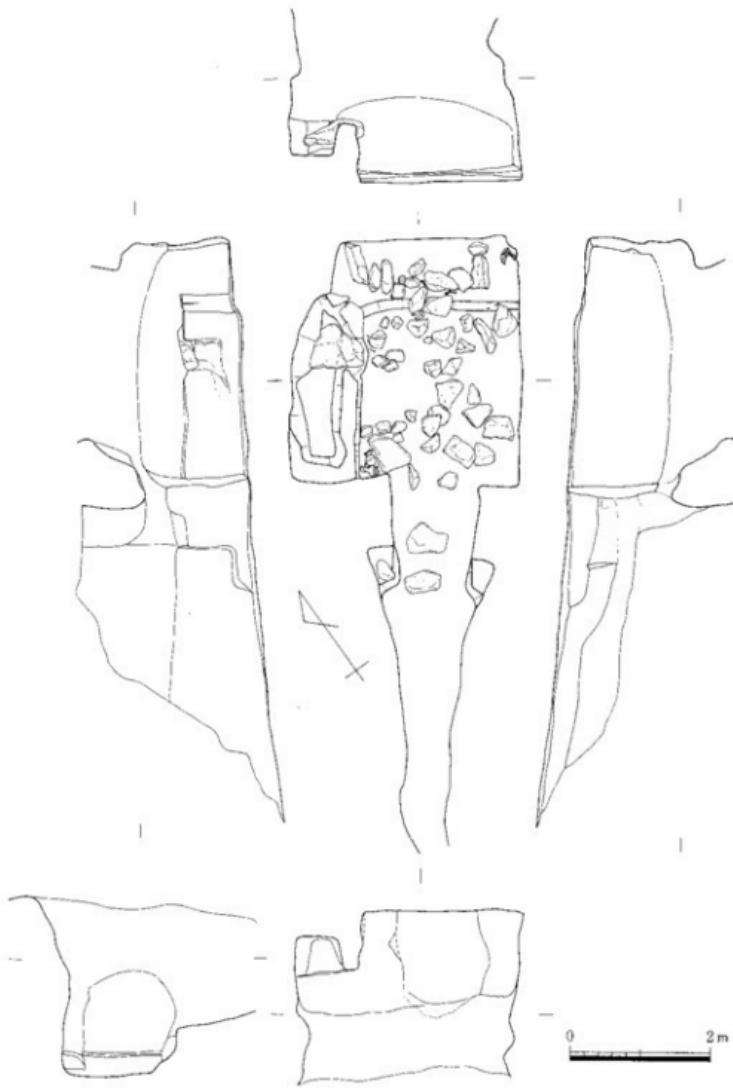


図-46 82号墳実測図(レベル高48.5m)

土器

1～5は、玄室床面から出土。6・7は、墓道埋土から出土している。1～6は須恵器、7は土師器。

1～3は長脚二段透し高杯。1の杯部は浅く、口縁は外反する。杯部上半に1本の凹線、下半には弱い段がみられ、その間を左下がりの刺突文で飾る。脚部は細く長く、裾で大きく開く。脚端部は上方へ折り返し、肥厚する。脚中央には2条の浅い凹線がめぐり、三方二段に縱長の長方形透し窓を切り込む。口縁部、脚根部の一部を欠損する。

2の器形は1に近似する。杯部の形態はほぼ同一であるが、杯部中央に凸線、杯底部との境にも凸線が巡り、その間にやはり左下がりの短い刺突文を密に飾る。脚は1に比して太く、外反は弱い。脚部には2条の凹線

と、三方二段の長方形透し窓がみられる。ほぼ完形品。1と2の高杯は、玄室北東隅から脚部を交差させる状態で、横位で出土した。

3は、1・2に比して、かなり器高が低い。杯部外面は二段になり、その間に刺突文をめぐらせるが、刺突文は横位に近く、非常に浅い。稚な施文法である。脚裾部は弱い段をなす。2条の凹線は非常に浅く、透し窓は三方二段の長方形である。4・5の壺の下から、重なるように出土。杯部半分欠損。

4は台付長頸壺。肩部の張りは強く、凹線によって段状をなす。体部下半にも1条の凹線が巡り、その間には櫛齒状工具による左下がりの刺突文を施す。頸部は細く、口縁部は大きく外反する。台部は低く、安定している。台基部には、三方に小さい方形透し窓が開けられる。玄室南西隅から横位で出土。口縁部を一部欠損。

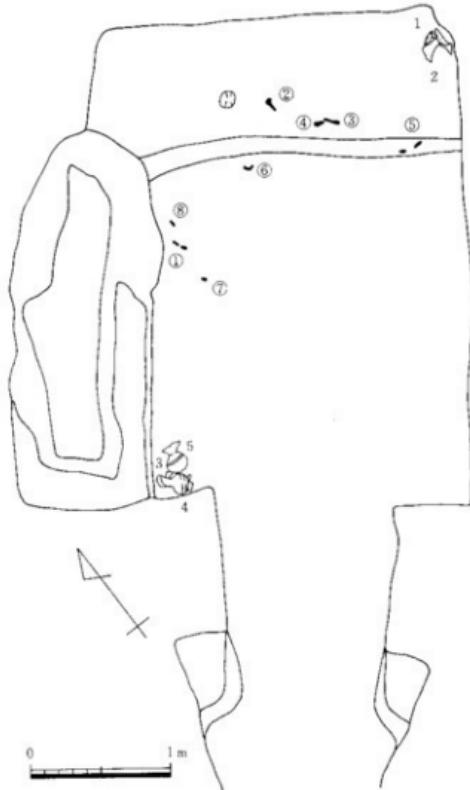


図-47 82号墳遺物出土状況

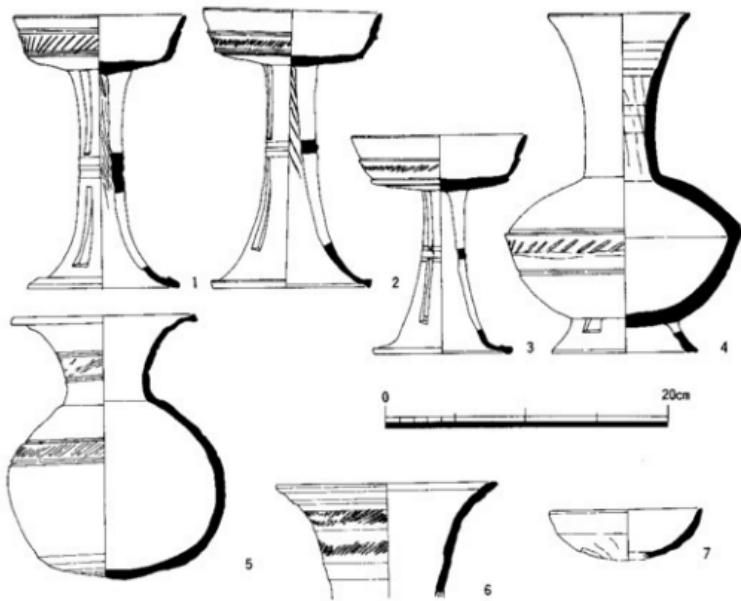


図-48 82号墳出土土器

5は壺。体部は球形を呈し、底部はやや平坦になる。口縁は大きく外反し、水平に近く広がる。端部外面は面をなす。肩部に2条の凹線が巡り、その間に、左下がりの浅い刺突文を施すが、非常に雑な施文である。頸部にも2条の凹線間に、同様の刺突文を施す。底部ナデ、体部下半ヘラケズリ。3～5は玄室南西隅で重なるように出土している。

6・7は墓道埋土から出土。

6は須恵器壺の口縁部。大きく外反し、端部は丸くおさめる。外面に、櫛歯状工具による刺突文を二段に施す。外面共に回転ナデ調整。

7は土師器杯。約1/5の破片である。調整は丁寧なナデを施すが、暗文・ヘラミガキは認められない。

鉄製品

鉄製品は鉄釘のみであり、全て玄室床面から出土している。

1～5は大形の鉄釘。断面は1cm強の方形である。いずれも破片であり、頭部の形態は不明。他に1本分の破片があり、計6本出土している。木目を残しているものは、全くみられない。

1を除き、他はいずれも奥壁近くから出土している。

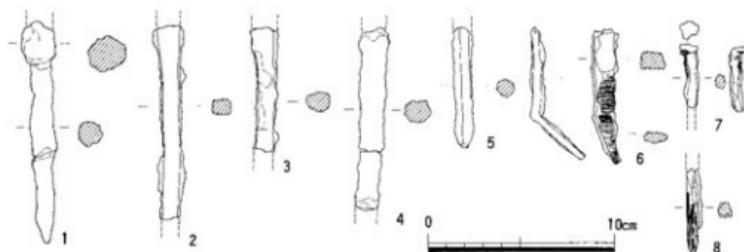


図-49 82号墳出土鉄製品

6～8は小形の鉄釘であるが、6の断面は扁平な長方形を呈し、異なるものかもしれない。6は先端から3.3cmの部分で折れ曲がっており、カスガイとも考えられる。横方向の木目を残している。7は折曲頭の釘。横方向の木目を残す。8は釘の先端部。縦方向の木目を残す。7・8は、断面5mm前後の方形である。他に同形態の釘が1本分出土している。6～8は玄室中央より西側で出土している。

棺釘の出土状況から想定すると、大形の鉄釘は玄室奥の棺台に置かれた木棺に伴うのではないかと考えられ、それはおそらく最初の埋葬であろう。小形の鉄釘は追葬時の木棺に伴うものと考えられる。造り付け石棺にも埋葬があったとすると、3回程度の埋葬を想定することができる。

造り付け石棺が当初から造られていたものと考えると、横穴掘削時から、複数の埋葬を予定していることになり、棺台と造り付け石棺という異なる施設を用いている点など、葬制を考える上で重要な資料である。

82号墳の年代は出土土器から6世紀後葉頃にその一点があると考えられる。81号墳と82号墳は同一斜面に築かれており、墓道はその前面を削平されているが、おそらく合流していたであろう。出土土器や内部構造から、82号墳の方が先行する可能性が強いと思われる。

註

(1) 水野正好氏から、造り付け石棺は横穴掘削時に伴うものではなく、追葬時に造られたものではないか。そのために玄室平面が不整形になっているのではないかとの教示を得た。しかし、筆者は以下の二点から、石棺は当初から造られていたと考える。

①玄室奥壁の形状等から、奥壁部分の拡張は考え難いにもかかわらず、奥壁幅と石棺を除いた玄門幅が著しく異なる。

②石棺東縁が本来の壁面であったと考えた場合、狭道が著しく西側に寄ってしまう。

しかし、調査結果からは結論を出すには至っておらず、今後の検討課題としておく。

C号墳

C号墳は、家屋建設に伴い、天井部が完全に削平されていたが、内部は良好な状態で遺存していた。今回の調査によって新たに発見された横穴であり、横穴群の最も西端に位置する横穴である。

玄室平面は整美な長方形をなし、狭道は玄室中央に取り付く。左右対称形をなす。開口方向は、S-9°-E。

玄室長290cm、玄室幅230cm、奥壁高133cm。側壁と天井との境には、幅15cm前後のテラス状施設が、奥壁と両側壁の三方にみられる。天井はドーム状をなすと推定される。

玄室床面には、四基の造り付け石棺が認められる。玄室主軸に直交し、奥壁に沿って一棺、その南側に主軸と平行に三棺が並ぶ。四基をそれぞれ、北棺、西棺、中央棺、東棺と呼称する。いずれも凝灰岩層を掘り込んで造られたものであり、横穴掘削時から全て造られていたものと考えられる。⁽¹⁾

北棺床面の長さは推定170cm、幅40cm、深さ33cm。東半は残存していないが、奥壁に石棺が存在したことを示す横方向の刻線が残っており、石棺が存在したことは疑いない。西端から、鉄矛、鉄劍各1本分の破片が、石棺の軸と直角に、先端を南に向けて出土している。その東で、矛、劍に接して高杯(5)が出土し、棺北東端から土師器小形椀(11)が出土している。

西棺は最も良好な状態で残存していた。床面の長さ182cm、幅34cm、深さ38cm。床面北端に、長径27cm、短径13cmの扁平な石が一石置かれており、枕ではないかと推定される。棺南端から鉄鎌(3~7)が塊状となって出土し、中央から碧玉製管玉が1点出土している。

中央棺は南端が不明である。床面の推定長170cm、幅40cm、深さ23cm。床面北西隅から、有蓋短頸壺と蓋がセットで出土している。

東棺も壁面がやや崩れている。床面の長さ176cm、幅46cm、深さ37cm。床面からは遺物が出土していない。

更に、玄室上層には30cm前後の大きさの自然石を並べた跡があり、棺台と推定されるものである。長さ270cm、幅60cmの長方形状に自然石が並べられており、その上に木棺を置いたものであろう。棺台の中軸は、玄室の主軸よりかなり振っており、ほぼ南北方向である。自然石の周囲からは鉄釘が出土しており、杯蓋(1)、台付壺(7)が出土している。須恵器高杯の脚部(4)もこれに伴うのではないだろうか。また、棺台石の間から金環が出土している。

他に、玄門の東側付近から琥珀製丸玉、土製丸玉が出土し、須恵器杯蓋(2)、短頸壺(8)が出土している。いずれも上層からの出土であり、自然石の棺台を使用した埋葬に伴うものか、別の追葬を考えるべきか断定できないが、おそらく前者であろう。

狭道部分からは須恵器の鉢付長脚二段透し高杯が出土しているが、どの埋葬に伴うものか、不明である。

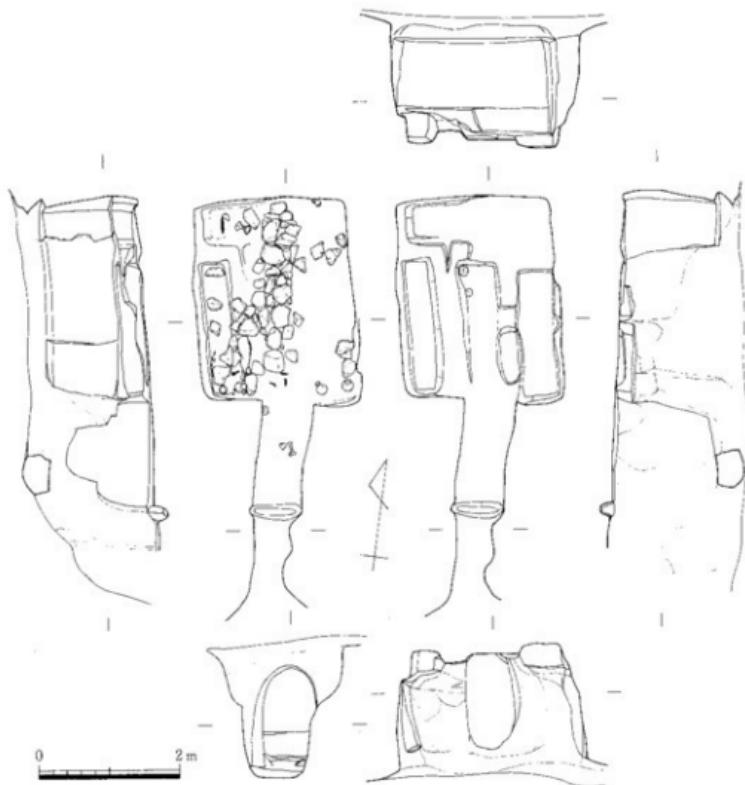


図-50 C号墳実測図（レベル高46.0m）

羨道と墓道の境界、つまり羨門がC号墳では明瞭でない。他の横穴のように、墓道幅が広くなる事実は認められない。しかし、幅22cm、深さ18cmの断面U字形を呈する溝があり、溝より北側では幅が一定しているのに対し、南側では幅が一定せず、壁面調整も雑になることから、この溝の位置が羨門と推定される。この溝が、木製扉のような施設に伴うものか、単なる区画を示すものか、理解に苦しむが、後者の可能性が強いように思われる。

この位置を羨門とすると、羨道長156cm、羨道幅58cm、羨道高150cmとなる。羨道は玄室主軸よりやや西へ振っており、ほぼ南北方向を指す。

墓道は前面に民家が存在するため、十分な調査を行なえなかったが、調査区のすぐ南で、おそらく削平を受けていると思える。確認できた長さは150cmまでであり、幅は約50cmである。

土器

1～11は、玄室床面から出土。12は、墓道埋土から出土した。11を除いて、他は全て須恵器である。

1～3は杯蓋。いずれも、口径が大きく、丸い天井部を有する。稜はみられない。

1は上層の棺台の南端から出土している。出土位置は棺台石の直上で、内面を上に向けて出土している。

2は玄門東側から正位で出土。レベルは1とほぼ同一である。

3は羨道部中央から、6の高杯に接するように出土した。全体の約1/4のみ残る。焼成不良で、淡灰白色を呈する。

4は高杯脚部である。脚は裾広がりとなり、三方に一段の長方形透し窓がみられる。長方形は縦長で細い。外面には全体にカキ目を施す。7の台付壺の下から2片、羨道部から1片、計3片になって出土した。

5は長脚二段透し高杯。杯部は浅く、口縁部は外反し、端部は鋭い。杯部上半に1条の凸線、下半に段をなすような凹線が巡り、その間に左下がりの刺突文を密に施す。脚部は大きくラッパ状に開き、端部に至る。脚中央よりやや上方に2条の凹線が巡り、細い長方形の透し窓が三方二段に開けられる。長方形はやや裾広がりの台形状を呈し、上下の透し窓は互い違いに開けられる。北棺床面西端から出土している。ほぼ完存する。

6も長脚二段透し高杯であるが、脚上段は外方へ大きく張り出し、下端を閉じている。すなわち内部が中空となり、この中に石か土器片でも入っているのか、振るとコロコロと軽い音を発する。これは偶然の結果とは思えず、製作時から意図的に作られたものと考えられ、鈴付高杯と表現しておく。口縁部は外方へまっすぐ立ち上がる。杯部外面には1条の凹線がみられ、その下に非常に細かい波状文を施す。脚裾部はあまり広がらず、脚部径は杯口縁径より、やや小さい。細い長方形の透し窓は二段に施され、互い違いを原則とする。脚上段外面は、回転カキ目調整がみられる。羨道部中央から横位で出土。口縁部の一部を欠く。色調は暗黒灰色、焼成は良好堅緻である。

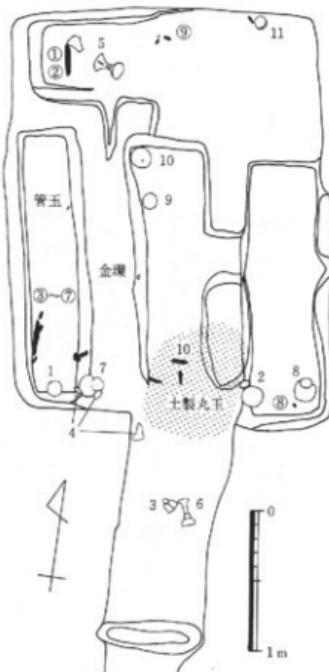


図-51 C号墳遺物出土状況

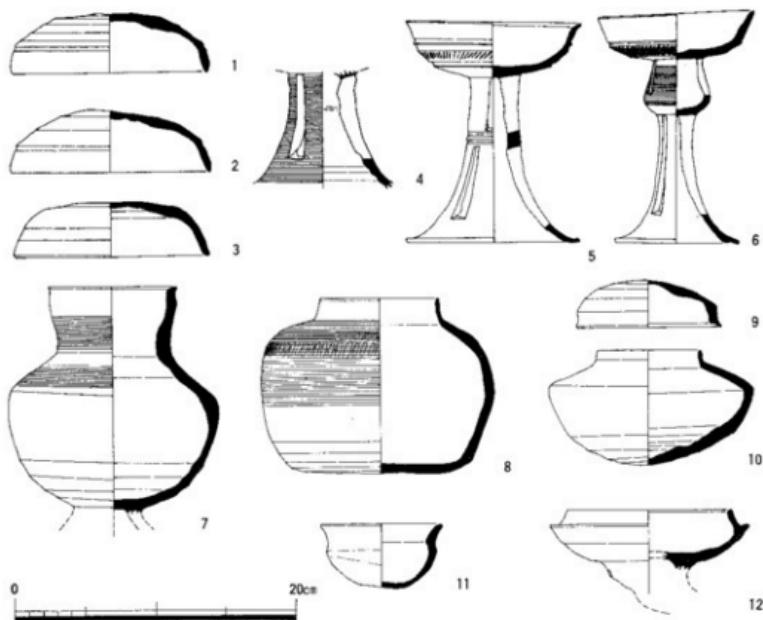


図-52 C号墳出土土器

7は台付壺。体部最大径は、かなり上位にあり、肩部は直線状をなす。体部下半は球形状となる。口縁部はほぼ直立するが、中央で弱い段をなし、口縁端部は外方へつまみ出すようなヨコナデを施しているため、上端部が面をなしている。台部は完全に欠損するが、三方に透し窓を開けたと思われる痕跡が残る。体部下半は回転ヘラケズリ、他は回転ナデ調整。一部にカキ目のような調整がみられる。灰白色を呈し、焼成はやや不良。自然石による棺台南端から出土している。

8は有蓋短頸壺。体部は扁平な形態となり、最大径は中央にあるものの、やや肩が張っている。底部は完全な平底。短い口縁部は、まっすぐに立ち上がる。体部上半にはカキ目状の調整がみられ、肩部よりやや下に1条の凹線が巡る。この凹線上方に沿って、粗い刺突文が巡る。体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリ調整。底部はナデ調整。口径12cm前後の蓋を、ややずらせて被せた状態で焼成した痕跡が残っているが、蓋は出土していない。外面には淡い白色の自然釉を被る。玄室南東隅の上層から、正位で出土している。

9・10は、有蓋短頸壺の蓋と壺のセットである。蓋は口縁部外面が凹面をなし、内面は段をなし、凹線状になる。口縁端部は外方へ開く。壺は肩が強く張り出し、体部は半球形を呈する。

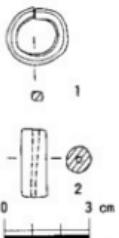
口縁は短く直立する。蓋の口径10.2cm、壺の口径7.3cm。蓋は、やや片寄って被せられたまま焼成されている。壺は中央棺北西隅から倒立状態で出土。蓋は壺の30cm南から正位で出土。床面から出土しており、中央棺に伴う副葬品である可能性が強い。

11は小形の土師器椀。口径8.3cm。口縁部は外反する。体部ナデ調整、口縁部ヨコナデ調整。北棺北東隅から出土。北棺に伴う副葬品であろうか。

12は墓道埋土から出土した子持ち器台の子の杯部である。立ち上がりは、まだ高さを残しており、脚は一方向へ曲げられている。脚外側面外側に、直径5mmの小さい円形透し窓が開けられるが、貫通していない。他に子持ち器台の破片は全く出土しておらず、盗掘、もしくは追葬時に持ち出され、その際に破損した破片が残ったものと考えられる。

金環

金環は、棺台の自然石の間から出土した。金は剥落し、全く遺存していない。直径2.1cm、断面は0.3~0.4cmの円形であるが、やや角をもつている。



管玉

西棺中央付近の床面から、碧玉製の管玉が1点出土している。暗緑色を呈し、表面は滑らかに仕上げられている。長さ2.3cm、直径0.8cm。孔は一方から穿孔されており、一端の孔径が2.5mmであるのに対し、他端の孔径は1mmである。

図-53 C号墳出土
金環・管玉

琥珀製丸玉(3)は、土製丸玉と共に、玄門から玄室中央にかけての上層から出土している。1点のみ出土しており、直径1.3cmの球形、孔径は約2mmである。一端は、紐ずれのためか、溝状になっている。赤褐色、半透明。

土製丸玉

土製丸玉は総数94点出土している。その中で、1点のみ算盤玉形を呈する。(4)玉の中央に明らかな稜線がみられ、上下端は直径5mmの平坦面、中央は直径11mmである。孔径は約1mm。

他はいずれも丸玉であるが、扁平な球形を呈するものと、断面が方形になり白玉状を呈するものがみられるが、明瞭に区別できるものではない。しかし、後者にやや大きいものが多いことは指摘できる。それぞれの丸玉は、形や大きさが不揃いであり、直径は8mmから11mmまでみられる。孔径は1~2mmであるが、穿孔方法は明らかでない。焼成前に穿孔していると思われる。表面は黒灰色を呈し、平均重量0.7~0.8gである。

琥珀製丸玉と土製丸玉を紐に通して繋ぐと、約74cmの長さになる。また、黒色の土製丸玉の中に、赤色の琥珀丸玉1点が、非常に映えているようである。

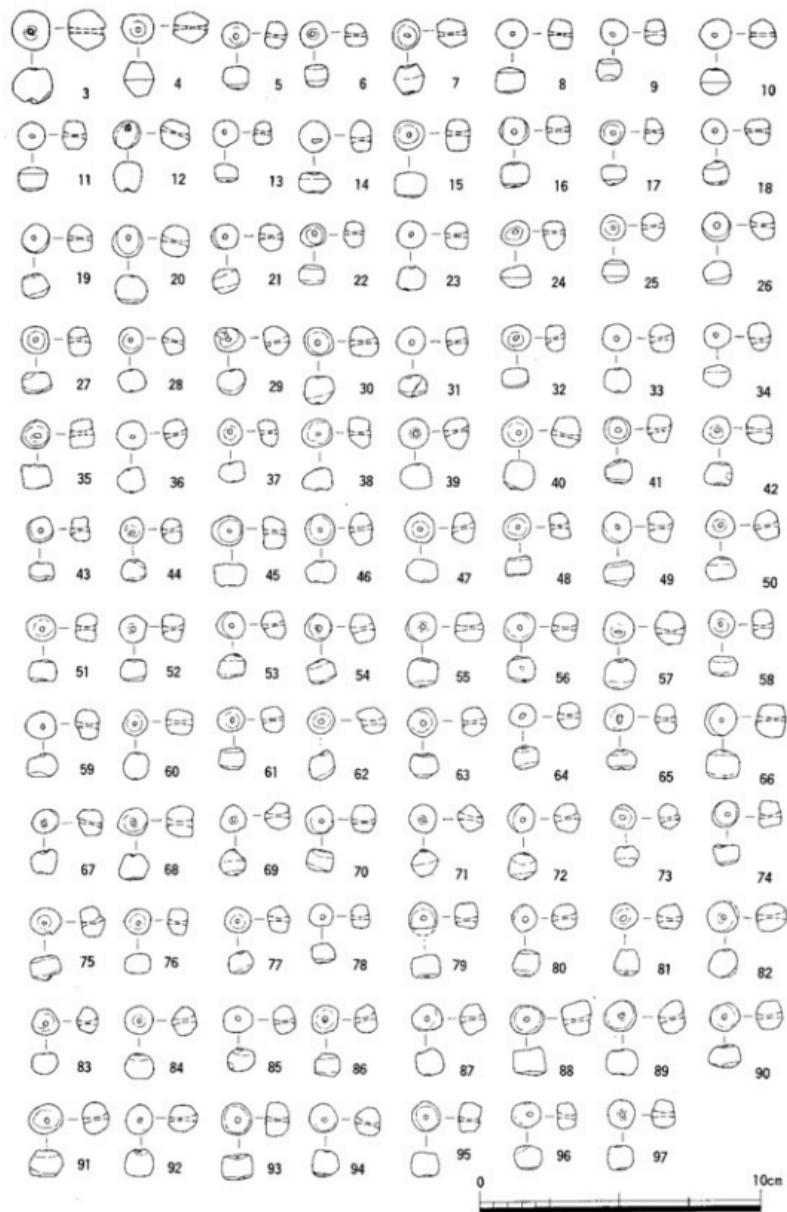


図-54 C号墳出土玉類

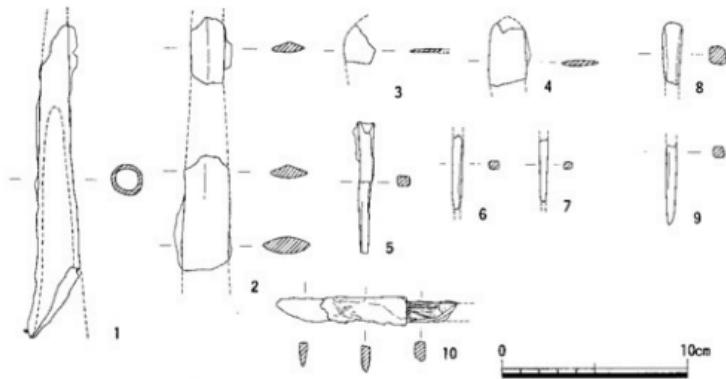


図-55 C号墳出土鉄製品

鉄製品

1は鉄矛。長さは20cm前後と思える。端部の直径は約3cm、断面は円形を呈する。内面には、縦方向の木目が、わずかに残っている。

2は鉄剣であろう。二破片を残すのみである。一面には稜線がみられ、断面は山形を呈するが、他面は緩やかな曲線となる。基部断面はレンズ状をなす。

3～7は鉄鎌であろう。刃部は厚さ2～3mmの薄い板状であるが、全形を知り得るものはない。5～7は鉄鎌の茎と考えられる。茎の長さは7cm以上、断面は長方形となる。刃部の破片は少ないが、茎と思われる細い棒状の鉄製品が固まって出土しており、10点以上になると思える。破片ばかりであるが、出土状況からも鉄鎌と考えてよいと思われる。

8・9は鉄釘。断面は方形をなす、比較的小さい釘である。頭部は丸味をおびているようである。

10は刀子。長さは9.6cmを残し、刃長7cm、刃幅1.3cm、刃厚0.5cm。背は平坦面をなし、断面は三角形状を呈する。柄は長さ2.6cm以上、幅1.1cm、厚さ0.6cm。柄に平行する木目が残っている。

1・2の矛と剣は、北棺床面西端から出土しており、北棺の埋葬に伴う可能性が強い。東端の土師器椀(11)の近くからは、細い棒状鉄製品が出土しており、鉄鎌の茎かと思える。3～7の鉄鎌は、西棺床面南端から出土している。鉄釘は他に3本出土しており、計5本。いずれも棺台自然石の周囲、上層から出土している。刀子も上層から出土している。また、台付壺(7)の北側上層から、薄い板状鉄製品の破片が出土している。鎌の可能性が考えられる破片である。

C号墳は、子持ち器台破片の出土から考えて、やはり盗掘を受けていると考えられるものの、比較的、残存状態は良好であると考えられる。ここで今一度、各棺に伴う遺物を整理しておくことにする。

北棺

須恵器高杯(5)、鉄矛(1)、鉄剣(2)

土師器椀(11)と鉄鎌も伴う可能性がある。

西棺

管玉(2)、鉄鎌(3~7)

中央棺

須恵器有蓋短頸壺(9・10)

東棺

不明

上層(自然石棺台に伴う埋葬)

須恵器杯蓋(1・2)、高杯脚(4)、台付壺(7)、有蓋短頸壺(8)

金環(1)、琥珀製丸玉(3)、土製丸玉94個

刀子、鎌?、鉄釘5本

北棺が最初の埋葬であることは、ほぼ確実である。次に西棺、もしくは東棺の埋葬があったと考えられるが、時期を示す遺物はみられず、東棺では埋葬を示す遺物もみられない。4回目に中央棺の埋葬が考えられ、更にその後、多少の整地をし、自然石を並べて棺台とした上に、木棺を安置しているようである。つまり、計5回の埋葬が考えられる。

北棺出土の須恵器高杯(5)は、長脚二段透し高杯の初期のものと考えられ、6世紀中葉頃と考えられる。中央棺出土の有蓋短頸壺(9・10)は、6世紀後葉頃ではないだろうか。上層出土の須恵器は6世紀末葉頃であろうか。

時期を明確にできるものではないが、C号墳は、6世紀中葉まで遡る可能性があり、6世紀末葉までの間に、5回の埋葬が行なわれていると考えられる。築造時から造り付け石棺4基を造っている。つまり、4人の埋葬を想定して築造されたものであり、その後、更に1棺を追葬している。当時の葬制や、横穴の性格を知る上で興味ある事実である。

註

- (1) 水野正好氏から、中央棺は造り付け石棺ではなく、通路ではないかとの教示を得た。中央棺南端に壁面がみられないこと、中央棺を棺とすると通路がなく不自然であることを指摘された。しかし、中央棺北壁が、東西棺北壁にほぼ一致し、その幅も他の棺にほぼ等しい。通路にするならば、もっと幅を広くとっていたであろう。また、西棺との間には、棺を区別したと思える切り込みがある。床面出土の有蓋短頸壺も、石棺を示すものであろう。

溝

横穴以外の遺構としては、72号墳前面で検出した溝のみである。

溝は、やや弯曲しながら東西方向へのびており、西側は、ため池構築時の石垣で断ち切られており、東側は徐々に浅くなり、消滅している。長さは約7mまで確認、幅は約1mである。最も深い部分で約15cm、東から西へ緩やかに傾斜している。埋土は黒褐色粘質土。

1～7は、全て須恵器である。

1は杯蓋。器壁が厚く、口縁部はやや内弯気味になる。

2は内面に短いかえりを有する杯蓋。かなり歪んでいる。外面に「V」字状のヘラ記号が認められる。

3は有蓋高杯の蓋。外面には稜がみられ、つまみは扁平である。

4は高杯杯部。外面は二段の段状をなす。

5は高杯脚部。三方に、縱長の長方形透し窓がみられる。

6は短頸壺。肩の位置は高く、張りは強い。口縁部は短く直立する。体部上半にカキ目が認められる。完形品。蓋を伴うものであろう。

7は短頸壺。肩に1条の凹線が巡り、張りは強い。口縁部は厚く、外反する。体部約1/4を欠損する。

溝の性格は不明であり、出土土器も6世紀中葉から7世紀後葉までの時期幅が認められる。出土土器からは、祭祀的な性格を考えることも可能である。土器の時期幅が、横穴の年代幅とほぼ一致することも注目すべきであろう。

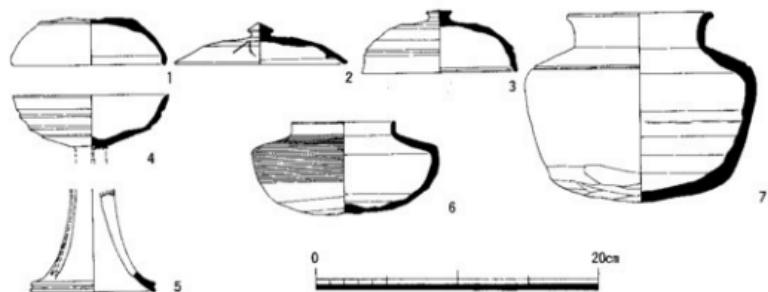


図-56 溝出土土器

包含層出土遺物

包含層からの出土遺物は、ほとんど認められない。

1は須恵器杯蓋。口径14.2cmとやや大形であるが、稜は鋭さを保っており、口縁端部は凹線状をなす。

2は円筒埴輪口縁部。口径18cmと非常に小さいが、小片からの復元のため、実際は更に大きくなる可能性がある。外面左上がりのタテハケ、内面タテ方向のナデ、口縁部ヨコナデ。口縁部近くに山形のヘラ記号がみられる。褐色を呈し、須恵質。

3は朝顔形埴輪。頸部は太く、肩の張りも全く認められない。体部外面は継続するヨコハケ、頸部から口縁部にかけてタテハケ。内面は体部、口縁部が継続ヨコハケ、頸部は指頭調整である。凸帯は低く、断面台形状を呈する。

杯蓋(1)と朝顔形埴輪は、80号墳墓道前面から出土し、円筒埴輪(2)は、103号墳の埋土内から出土している。いずれも、5世紀末葉から6世紀前葉の間におさまるものと考えられる。

横穴からの出土遺物には、この時期まで遡るものは確認できおらず、横穴に先行する古墳の存在を示唆するものであろう。

4・5は土師器小皿。共に口径9.4cm、器壁は厚く、ナデによって調整する。82号墳北側の尾根上から出土している。これら以外には、中世の遺物は出土していない。

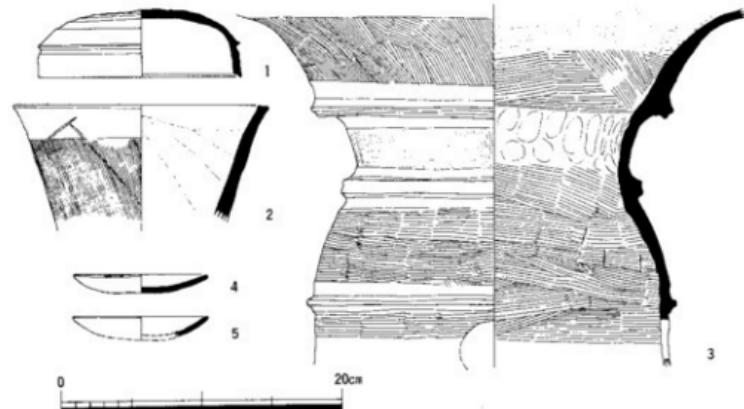


図-57 包含層出土遺物

3.まとめ

今回、調査を実施した横穴は、全部で15基であり、そのうち、新発見の横穴は4基である。101号墳とD号墳は、墓道のみの調査である。以下、各横穴を比較しながら、今回の調査成果をまとめておく。

まず、横穴の年代やグルーピングの基準になると考えられる玄室平面の形態、規模を検討してみる。そのために、数値を表にし、玄室長と幅の関係をグラフ化した。

非常に狭長な平面形態を示す99号墳と、横長の平面形態を示す102号墳は、大きく異なるが、他の横穴9基の規模は、ほぼ似た数値となる。9基の平均は玄室長304cm、玄室幅256cmとなり、長幅比は、ほぼ12:10となる。

ここで、更に細かく観察すると、規模によって、更に2グループに分けられそうである。すなわち、72・74・82・A・B号墳のグループと、80・81・123・C号墳のグループである。前者の平均長326cm、幅282cm、後者の平均長276cm、幅222cmである。

横穴	玄室長	玄室幅	玄室高	墓道長	墓道幅	墓道高	開口方向	備考
72号	313	272	160	150	90	104	S-71°-W	
73号	(136)	(150)	(108)	180	82	142	S-56°-W	掘削途中で放棄
74号	333	298	162	127	103	122	S-80°-W	壁面・天井の境に段 床面に排水溝
A号	326	310	190?	144	110	134	S-40°-W	中世遺物含む
B号	320?	280?	?	130?	90?	?	N-61°-E	
99号	490+	110	?	?	?	?	S-6°-W	
80号	297	208?	220	154	86	120?	S-26°-E	閉塞石
102号	124	214	?	156	104	74	S-32°-W	閉塞石
123号	250+	230	?	120	100	?	S-87°-E	
103号	?	274	?	161	95	?	S-63°-W	
81号	268	212	216	148	92	188	S-20°-W	
82号	340	250	?	102	120	147	S-35°-W	造り付け棺台 造り付け石棺
C号	290	230	?	156	58	150	S-9°-E	造り付け石棺4基 壁面・天井の境に段

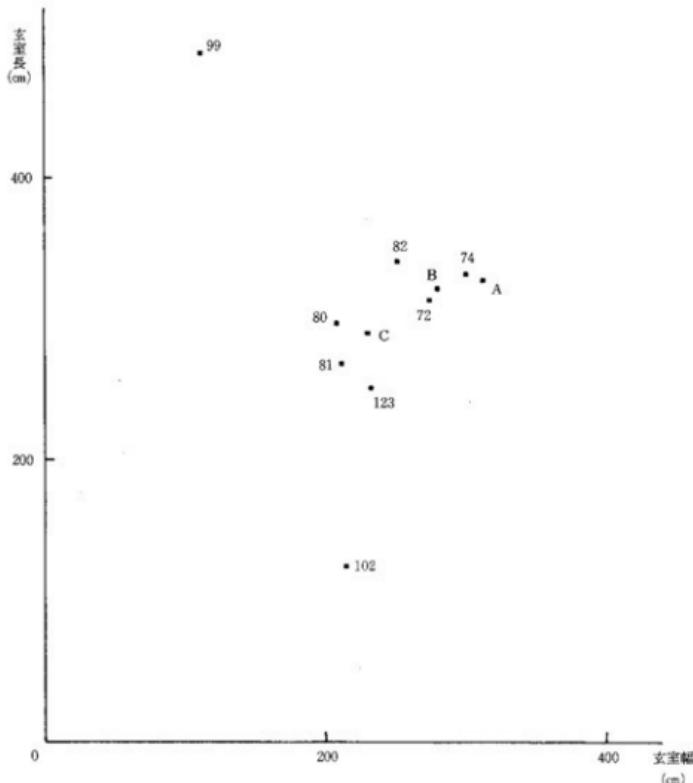
横穴計測値一覧表

(単位はcm。?は不明、もしくは推定値。101号墳、D号墳は墓道のみの調査であるため、省略した。)

また、平均玄室長幅比は12:10であるが、長幅比が11:10に近いグループと、13:10に近いグループに分けられそうである。前者には、72・74・123・A・B号墳が、後者には、80・81・82・C号墳が含まれる。この中で、123号墳は前者に含まれるもの、玄室長は250cm以上であり、更に長くなる可能性が強い。つまり、後者のグループに含まれる可能性が高いのである。また、82号墳は玄室規模の大きいグループに含まれるが、大きい造り付け石棺を有しているため、これも検討の余地が残る。

このように見ていくと、72・74・A・B号墳のグループと、80・81・C号墳のグループに二大別できそうである。82・123号墳も、後者のグループに含んでよいであろう。

つまり、調査地東端のグループと、西端のグループに大別できそうなのである。



玄室規模比較グラフ

東端のグループは、玄室長幅比が11：10前後、つまり玄室平面は正方形に近く、玄室長は、320cm前後に集中する。一方、西端のグループは、玄室長幅比が13：10前後で、玄室平面が長方形になり、玄室長は280cm前後に集中する。

次に、横穴の施設について考えてみる。

74・C号墳は、壁面と天井の境にテラス状の段が認められる。この段は、壁面と天井を明瞭に区別するためのものであり、家の形を模したものではないかとの説がある。古い時期の横穴に伴う可能性が強い。74号墳の時期は不明であるが、C号墳は6世紀中葉頃の掘削であり、調査例の中では最も古い時期の横穴である。

74号墳には、床面の四周と中央に排水溝がみられ、特異な施設である。

82号墳には、造り付けの棺台が見られ、これも珍しい施設である。

また、82号墳とC号墳には造り付けの石棺がみられる。82号墳の石棺は、規模も大きく、既知の造り付け石棺と変わるものではない。しかし、C号墳には規模の小さい造り付け石棺が4基もみられる。このような規模の小さい造り付け石棺は、高井田横穴群内では初見であり、注目されるものである。造り付け石棺が小規模である要因を考えると、4基の造り付け石棺を同時に造ろうとしたことにあるのではないだろうかと思える。特別な意図をもって、小さくしたものではないだろう。

82号墳とC号墳の棺配置は、奥壁に沿って主軸と直交する棺が1棺あり、他は主軸と平行する位置が復元される。おそらく、奥壁に沿って第一埋葬があり、次に側壁に沿って埋葬が行なわれたのであろう。このような棺配置が一般的なものと判断するのは早計であるが、この2基の横穴に限って考えると、横穴築造時から複数の埋葬が既に予定されており、第一埋葬は横穴の奥に、主軸と直交に埋葬するという原則があったように考えられる。

特に、C号墳に関しては、4基の造り付け石棺を当初から有している。つまり、4人の埋葬が築造時から予定されていたことを示しており、おそらく、その4人は特定されていたのではないだろうか。現在、墓地の埋葬予定者の氏名を、生前から墓石に彫り込んでおく風習があるが、同じような考えに基づくのであろうか。

ところが、C号墳では、おそらく4棺に埋葬された後、更に木棺1基の追葬が認められる。これも、婚姻などのために、墓石に氏名を刻まれた人と、墓地被葬者が必ずしも一致しない現在の状況と同じような原因が考えられるのではないだろうか。

これまでに確認されている高井田横穴群内の横穴では、造り付け石棺を2基有するものは知られているが、4基も伴うものは初見であり、横穴の性格を考えるうえで、好資料となった。

また、調査を実施した造り付け石棺計5基の中からは、棺釘が1点も出土しておらず、石棺内には木棺を使用せず、直接埋葬したものと判断できる。つまり、文字通り石棺としての役割を果たしており、造り付け石棺の呼称が適切なことを示している。

次に、横穴の開口方向について観察してみると、13基中、東西よりも北側に開口するものはB号墳1基のみであり、やはり、南へ開口させる意識は働いていたと思える。しかし、横穴としての性格上、地形に大きく左右され、開口方向に対する強い意識はなかったようである。従来の分布調査でも、北向きの横穴が少なからず発見されている。今回の調査では13基中12例、92.3%が東西よりも南側に開口し、13基中7例、53.8%が南東から南西の間に開口する。今回の調査は南斜面、西斜面が多かったため、横穴群全体では、この数値は更に低くなるであろう。

ここで、最も問題となる横穴の年代について考えてみると、その年代を推定する資料は、やはり土器に限られる。今回の調査例の中で、土器を出土している横穴を検討すると、6世紀中葉頃から7世紀後葉頃までの土器がみられる。各横穴で最も古い時期を示す土器は、6世紀中葉から末葉であり、土器を出土した横穴8例が、いずれも大きく時期を隔てるものではない。今回の調査例に限ると、横穴掘削時期が7世紀代に下るものは見られず、全て6世紀代である。また、7世紀代に追葬が続けられているものは多いが、7世紀初頭頃までは盛んであるが、以後、追葬は減少するようである。8世紀代の追葬は認められない。以上のような点が指摘できると思う。

副葬品としての土器は、須恵器が多く、しかも黒色を呈した良質のものが多い。また、C号墳の鈴付高杯や子持ち器台を始め、葬送用として製作されたと考えられる土器が多数認められる。土師器についても、小形の器種が多く、やはり葬送用として製作されたものであろう。

装飾品としては、金環、銀環、碧玉製管玉、琥珀製蚕玉・丸玉、土製丸玉が出土している。鉄製品は、矛、剣、鎌、刀子が出土しているが、武器、工具とも出土量は少ない。

各横穴は、50年前後の間に、3～5回の埋葬が想定される。また、C号墳のように、4基の造り付け石棺を有するものがみられる。これらの事実は、横穴を家族墓と考える説を、より一層補強するものであろう。

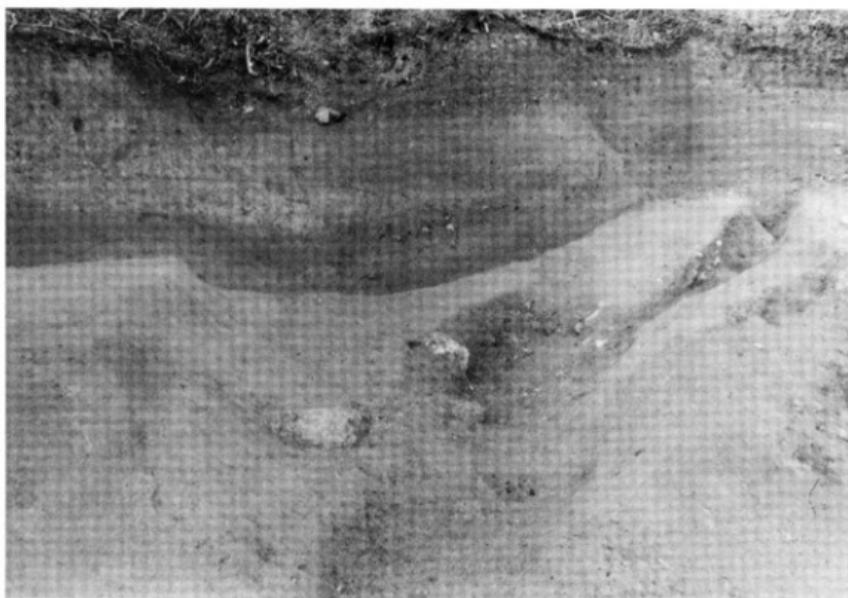
各横穴は2～3基で小支群をなす。すなわち、72～74号墳(73号墳は未完)、102・123号墳、81・82号墳(C号墳も含むか?)などである。例えば、81・82号墳を見た場合、墓道を共有していた可能性が強く、玄室内の施設や土器等から82号墳のほうが古そうである。更に、C号墳も含めると、C号墳→82号墳→81号墳の順が想定でき、20～30年の間に連続して造られているようである。その間に、玄室内の施設が省略されていく状況を看取できる。これらの横穴は、先に造られている横穴に追葬が続けられているにもかかわらず、新たに横穴を造っていることから、血縁的な関係を有する他の世帯、例えば次世代の家長などが新たに造ったものではないだろうか。

更に大きな支群の設定、各支群間の関係等については、調査例も少なく、筆者の力量の及ぶ範囲ではないが、次のような点は、調査結果から指摘できる。

図 版



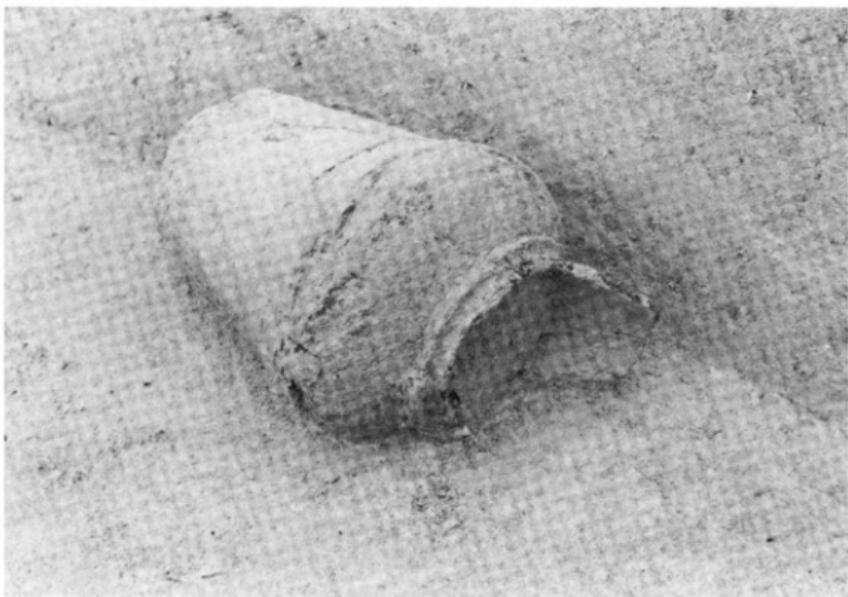
上層



掘削後



出土狀況



壺形埴輪



2



3



5



6



8



10



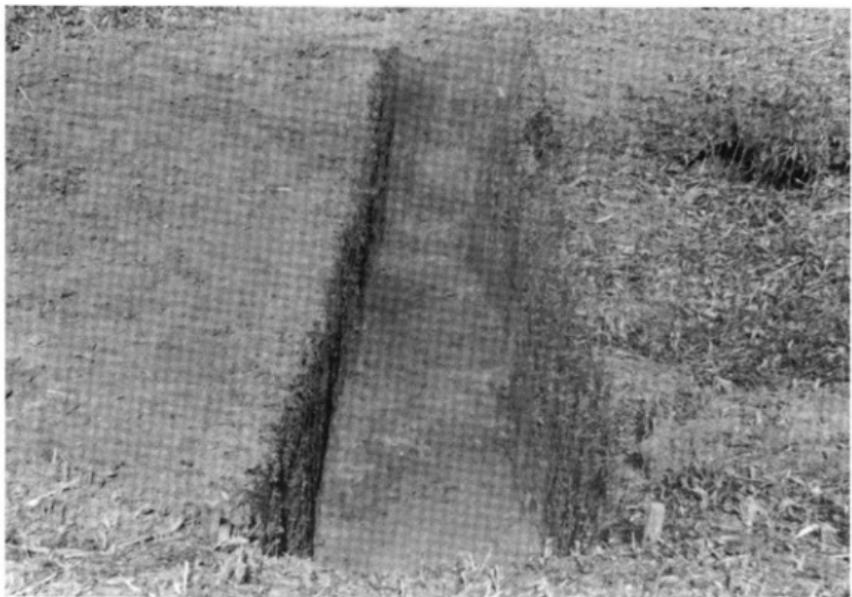
第2区



第3区第1トレンチ



第3区第2トレンチ



第3区第3トレンチ



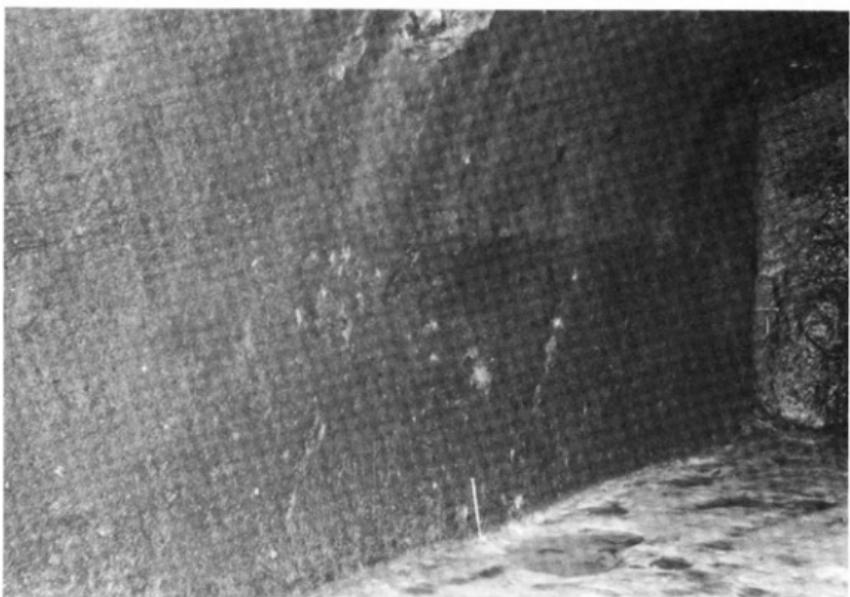
全景



漢門



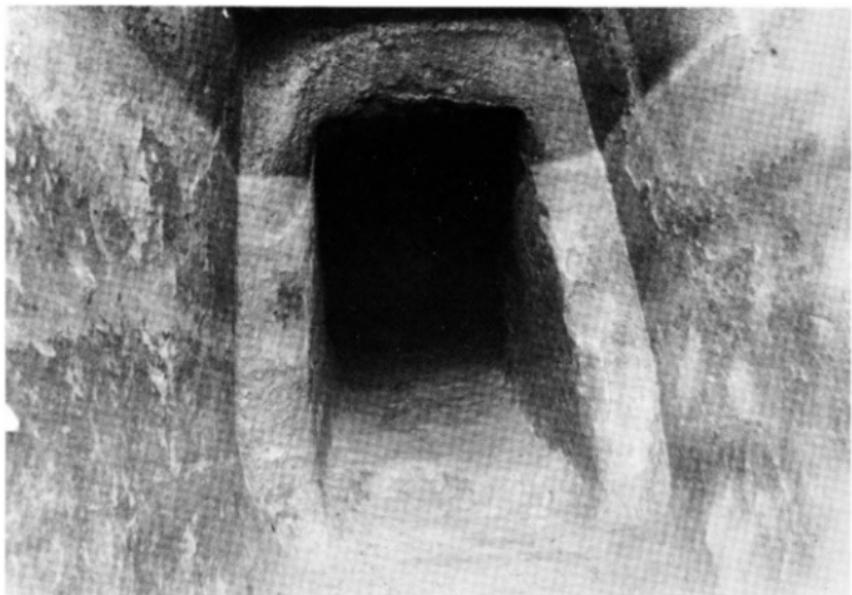
玄室



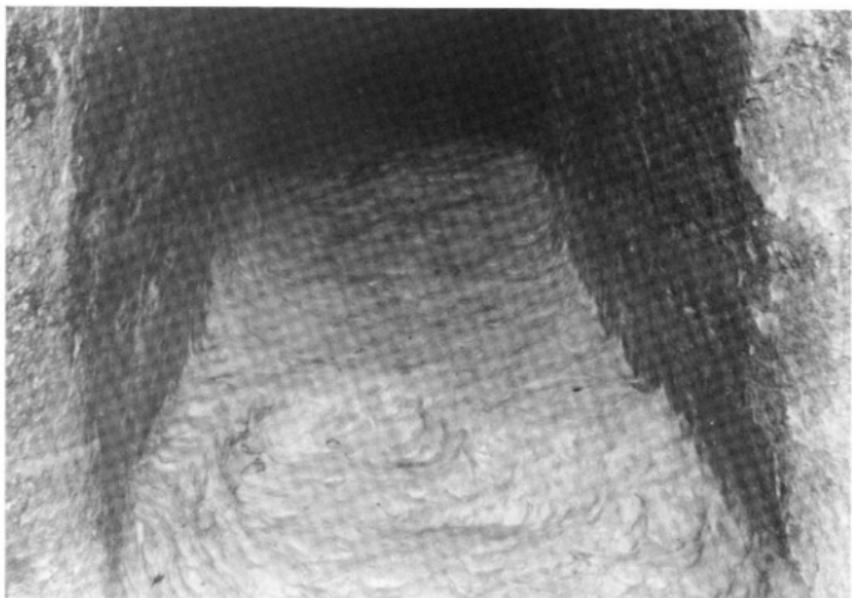
西壁



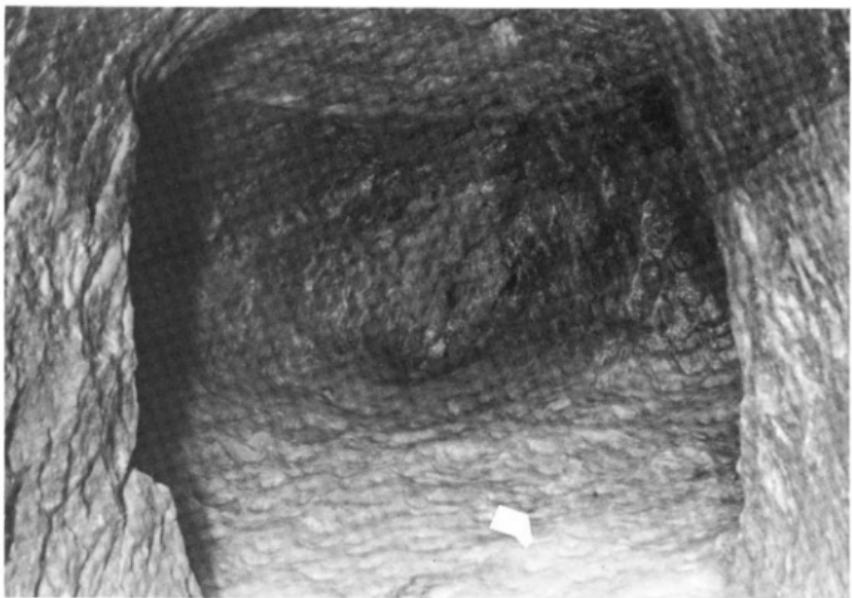
73・74号墳全景



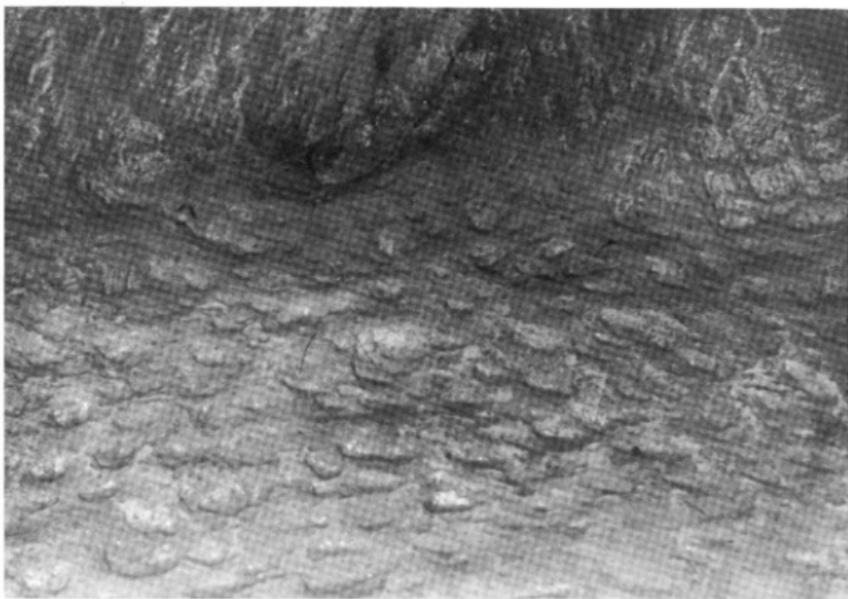
羨門



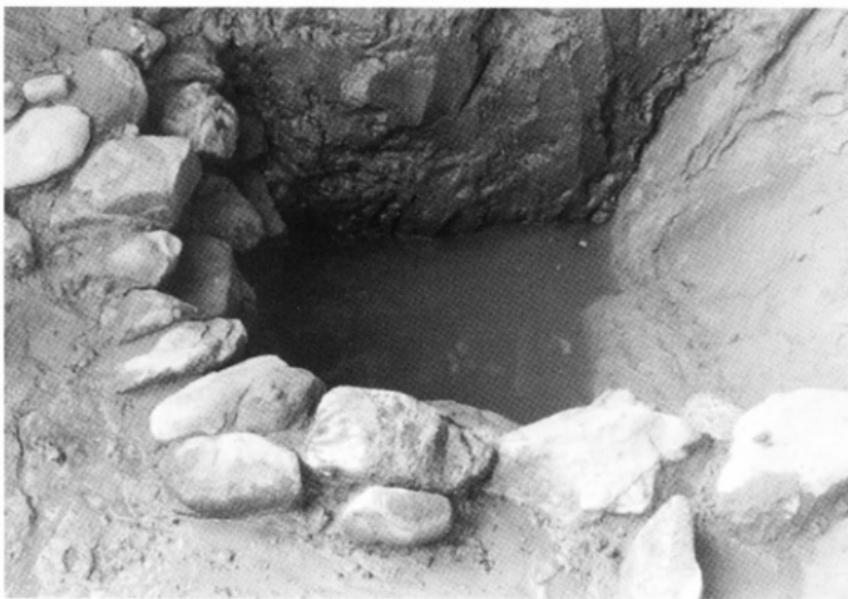
漢道



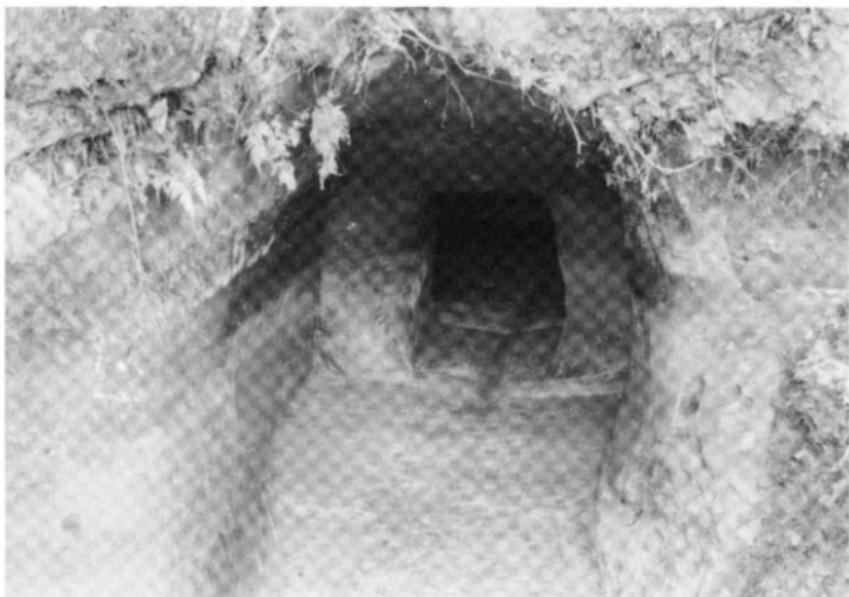
玄室



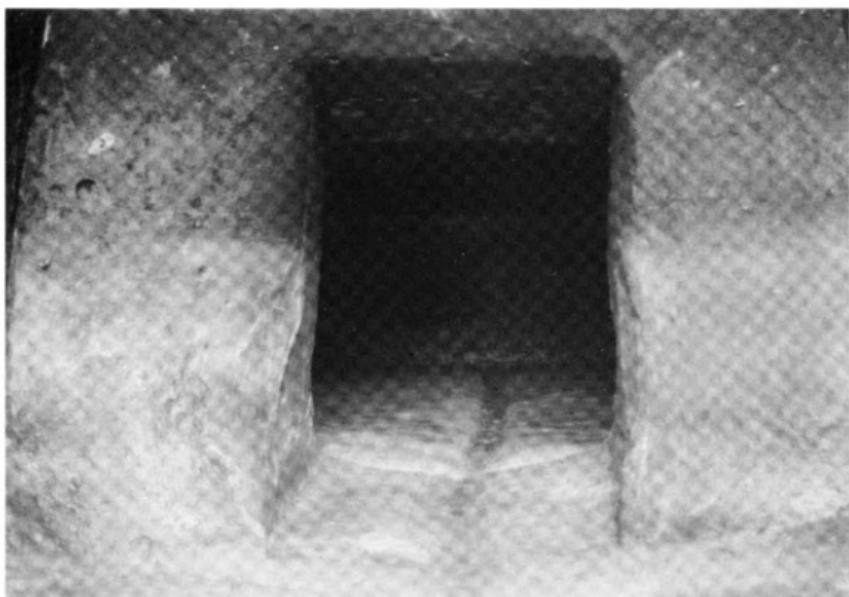
玄室床面



石組み造構



全景



漢門



玄室



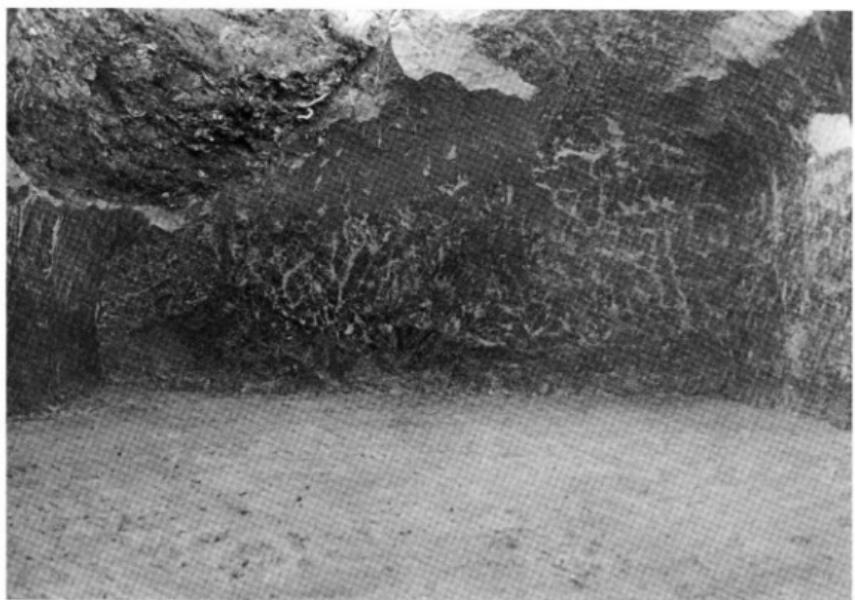
西壁



全景



羨門



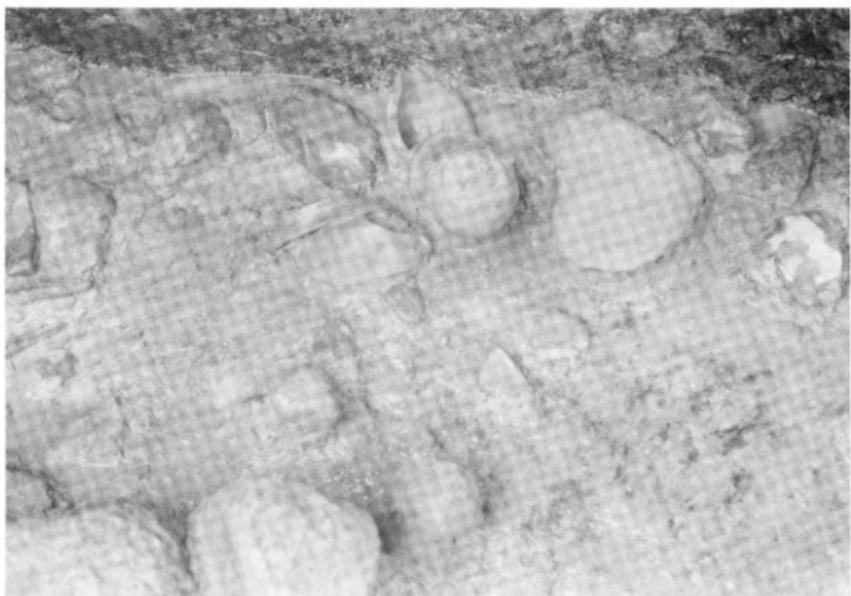
玄室



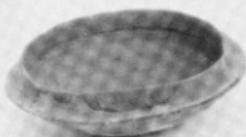
通道



遺物出土狀況



遺物出土狀況



1



2



3



4



5



6



7



8



9



10



10



11



12



14



15



16



17



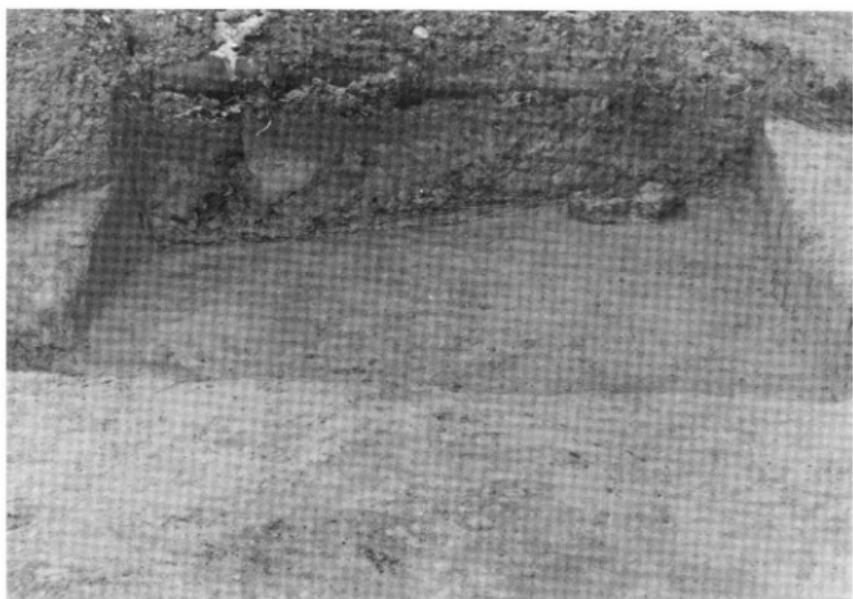
18



27



29



玄室



狭道



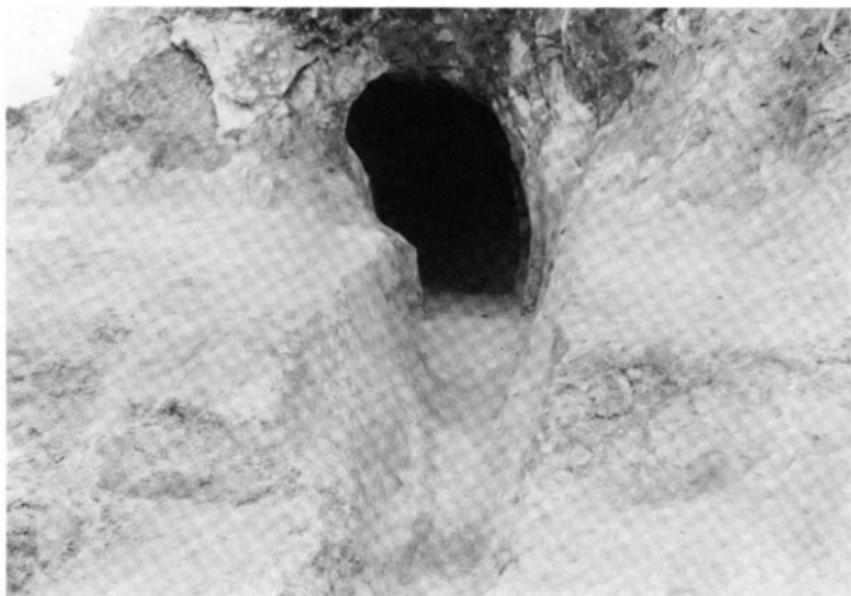
全景



玄室



全景



近景



淡門



閉塞石



玄室



奥壁



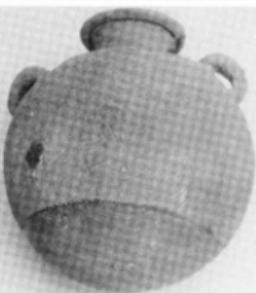
遺物出土狀況



2



3



4



5



1



11



7



8



9

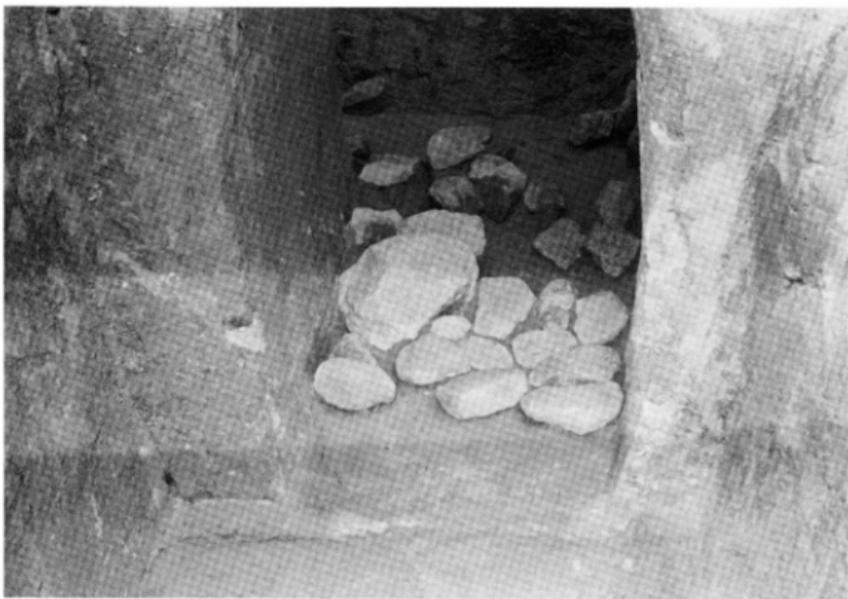


10





墓道



墓道



玄室



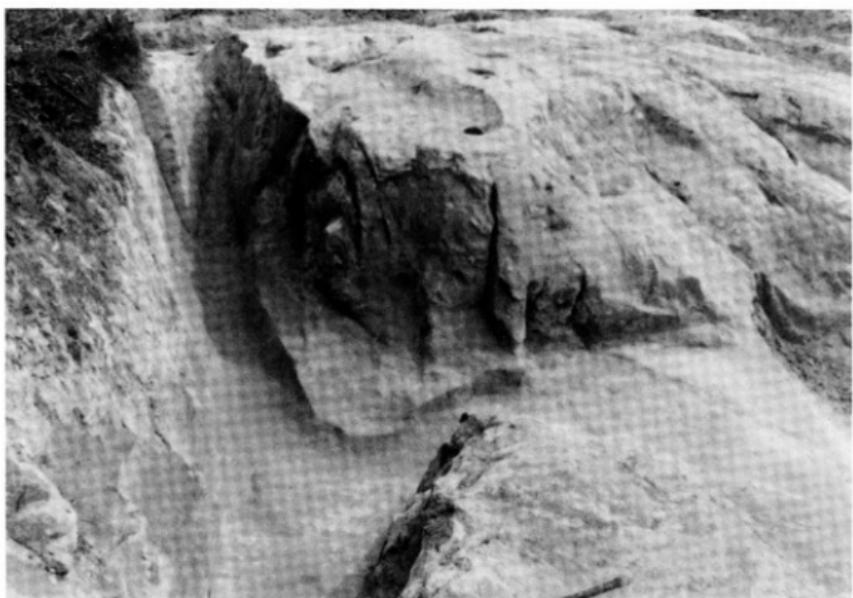
閉塞石



墓道



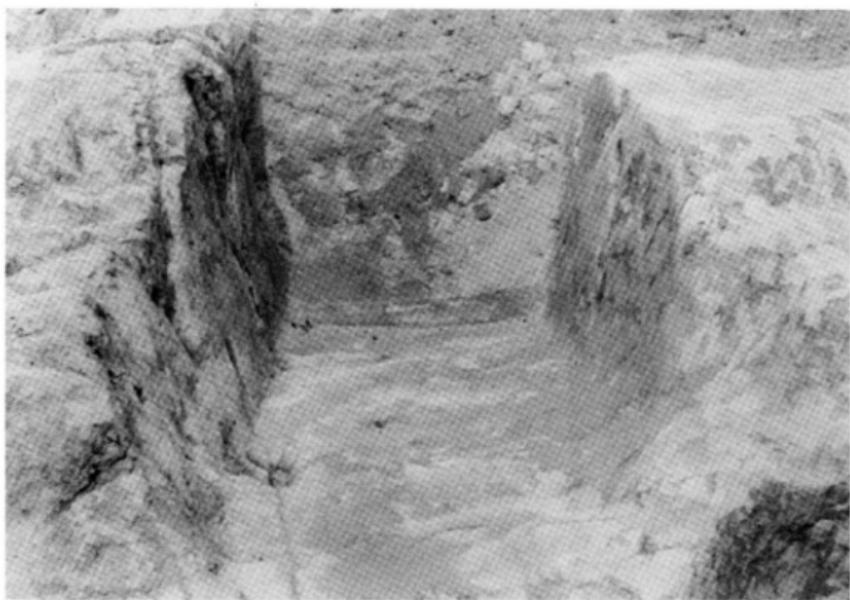
玄室



全景



玄室



D号墳



1



3



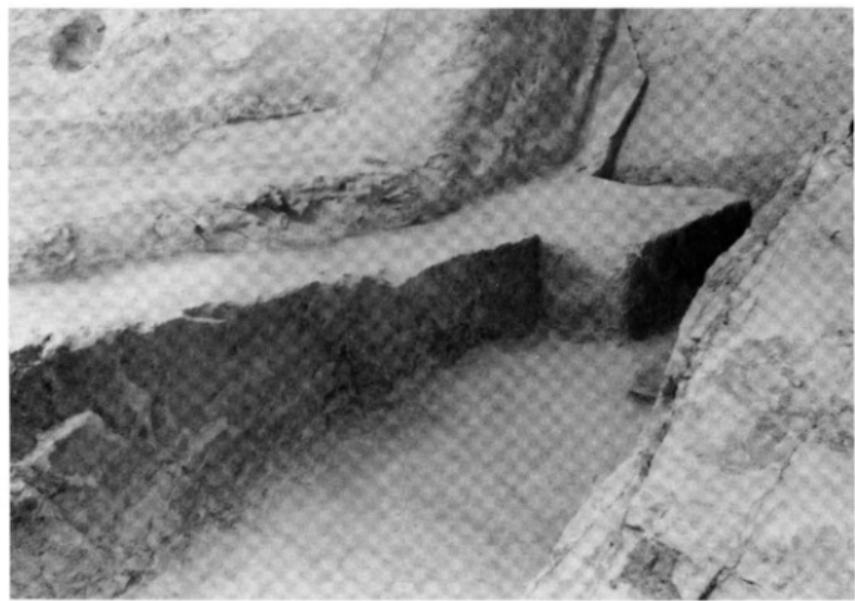
4



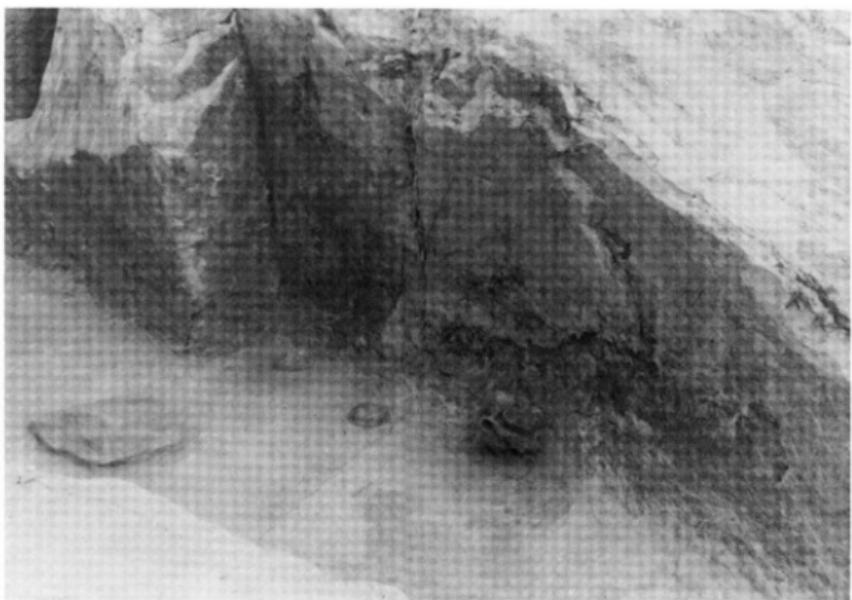
D



全景



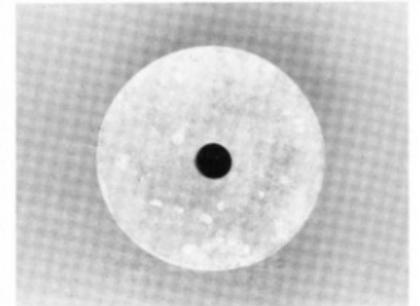
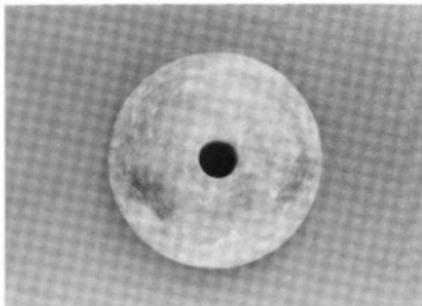
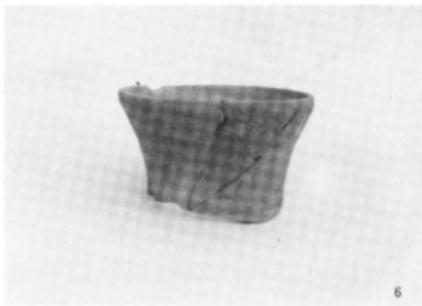
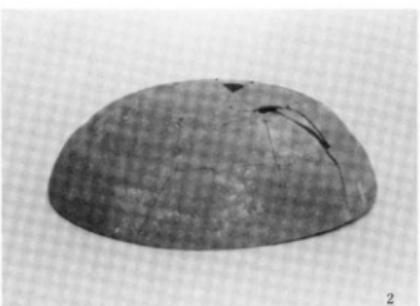
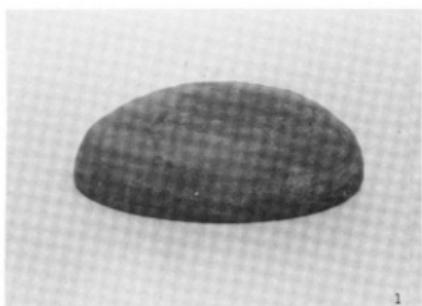
西壁



東壁

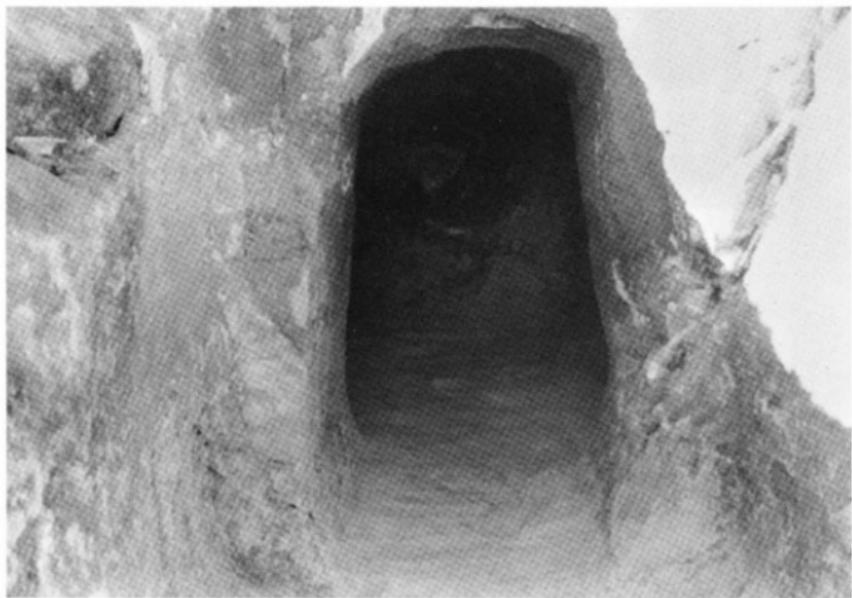


遺物出土狀況





81・82号墳



後門



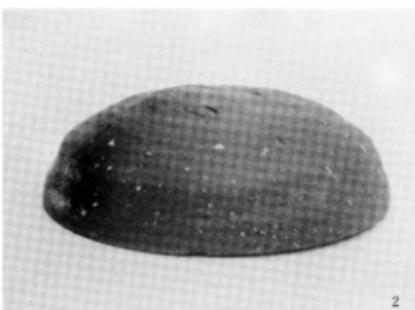
玄室



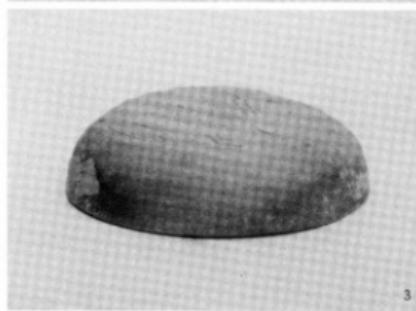
遺物出土狀況



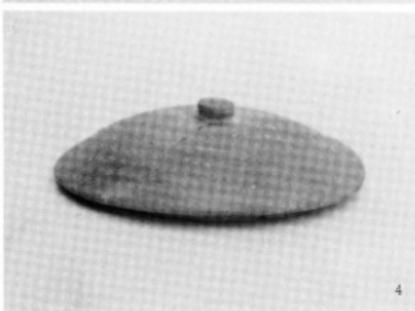
1



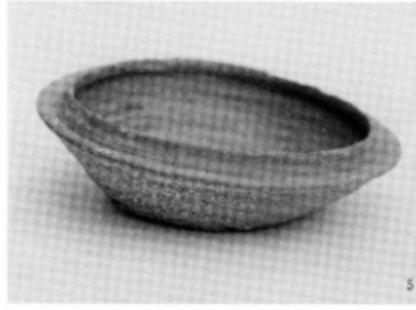
2



3



4



5



6



7



8



10



11



12



13



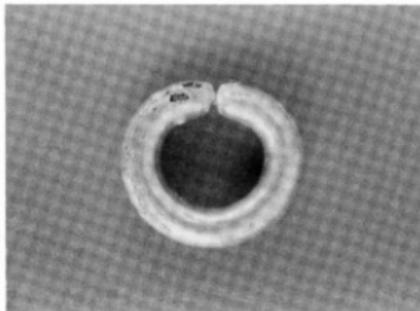
14

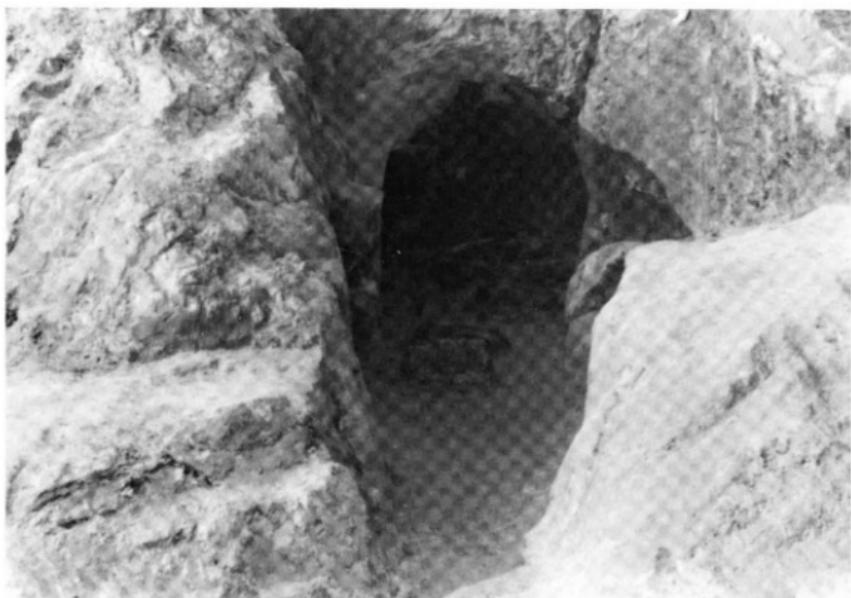


15



16





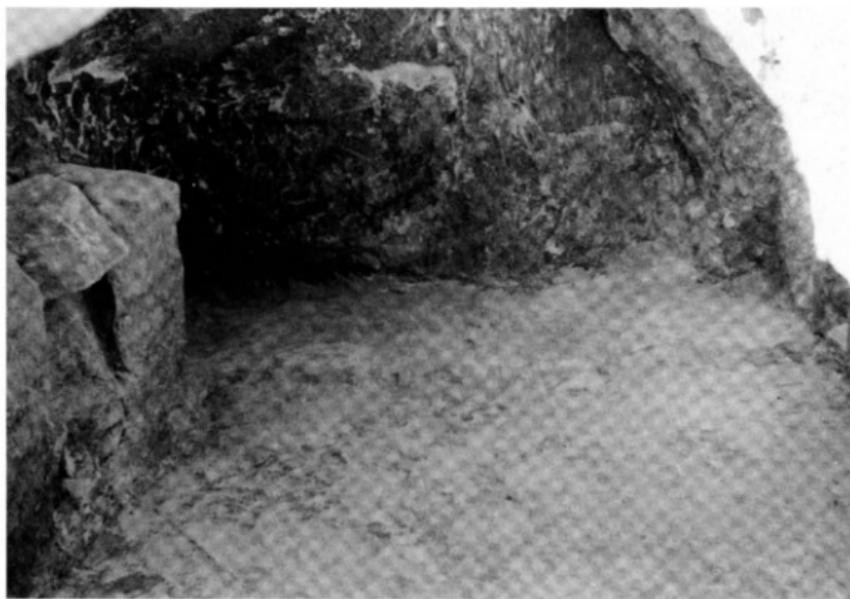
全景



羨門



玄室床面



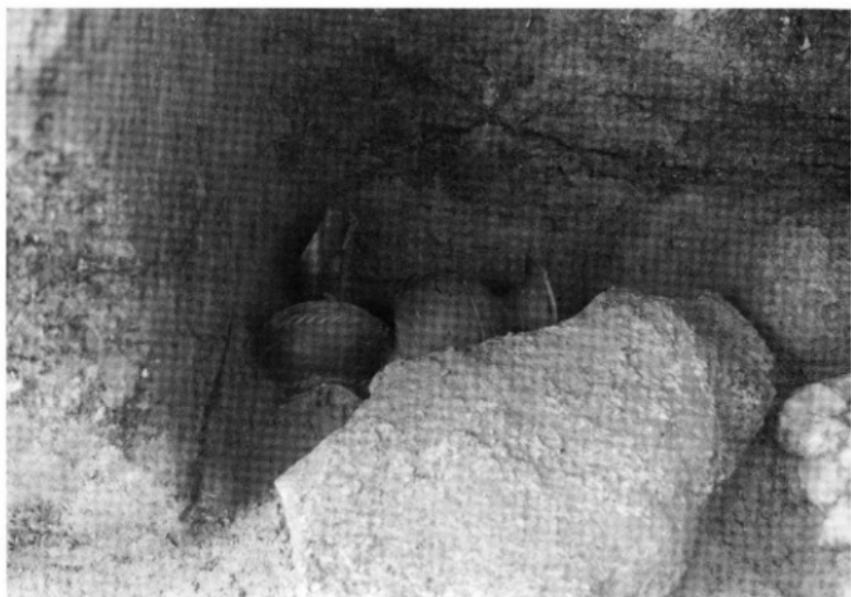
玄室



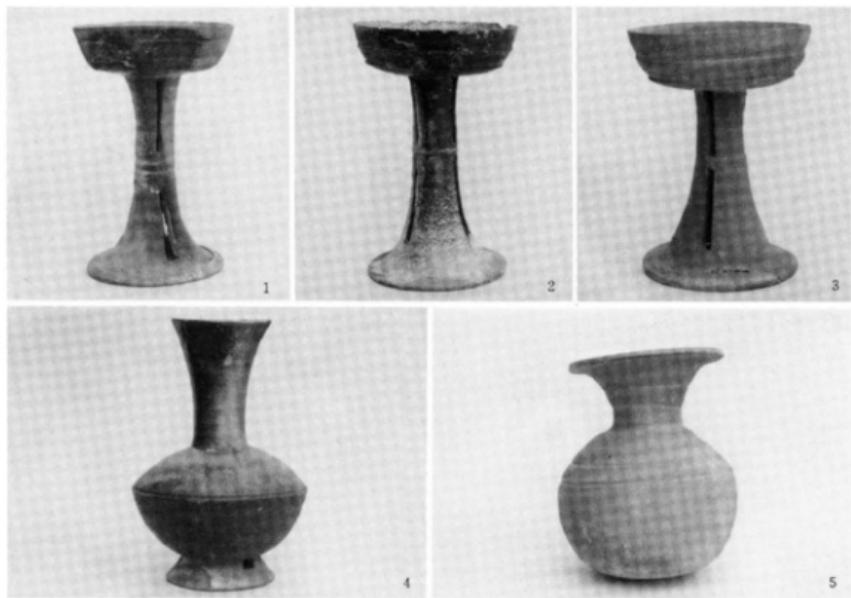
造り付け石棺



造り付け石棺



遺物出土狀況





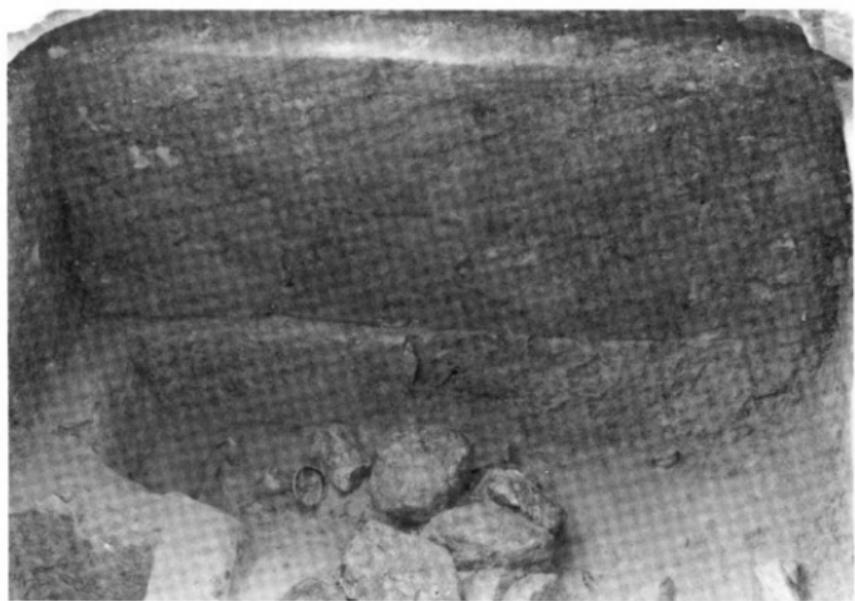
全景



狭道



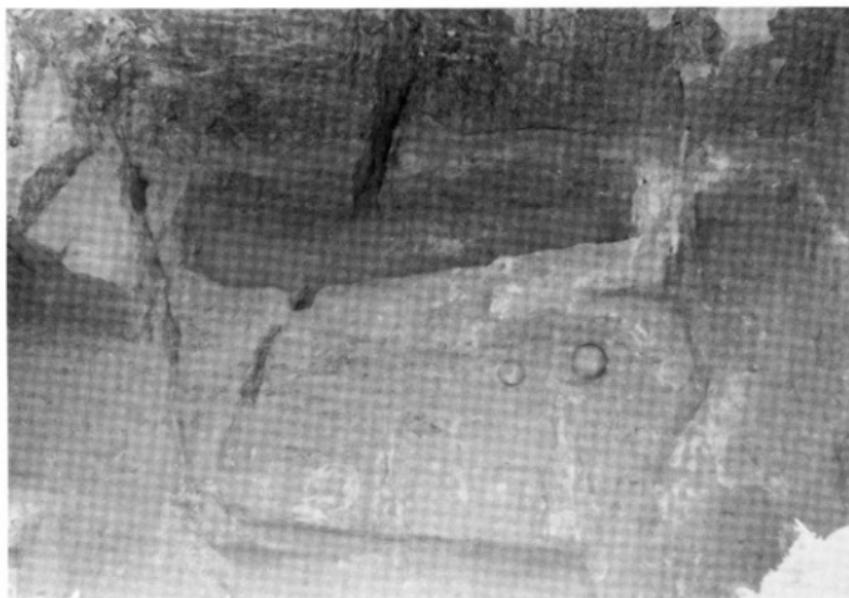
玄室上層



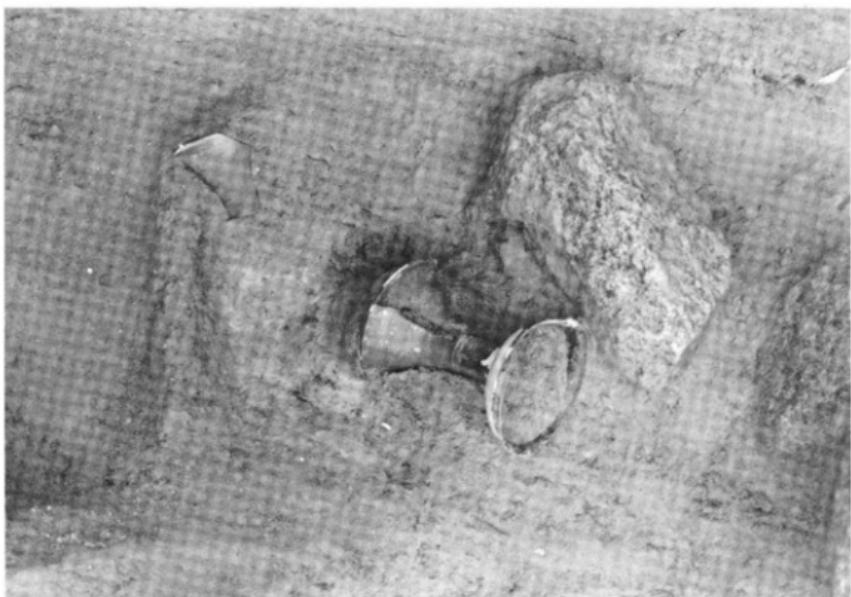
奥壁



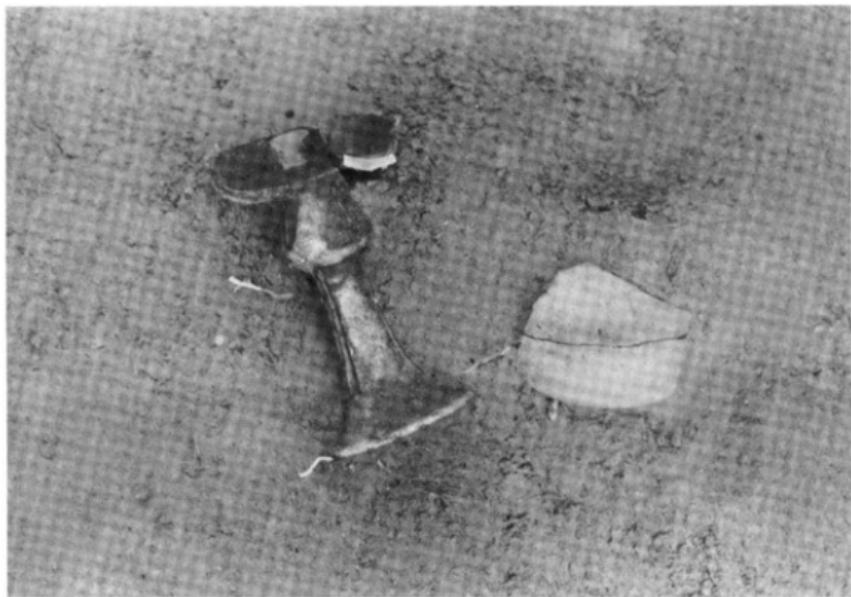
玄室床面



玄室床面

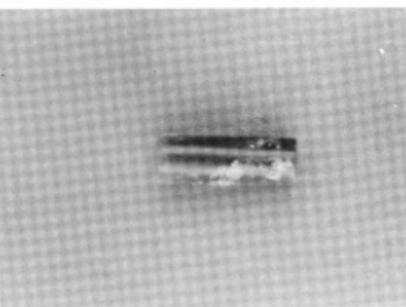
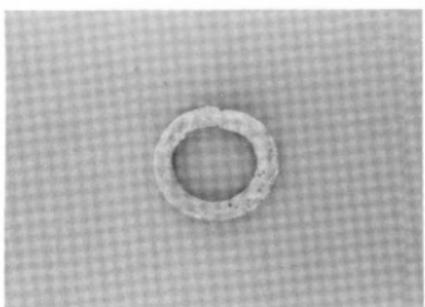


遺物出土狀況



遺物出土狀況





1



2

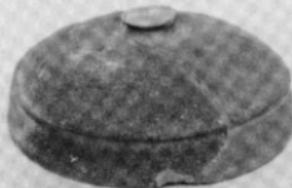




全景



2



3



6



7



現況



蓋門

高井田横穴群 I

編集・発行 柏原市教育委員会

〒582 大阪府柏原市安堂町1番43号

電話 (0729) 72-1501 内716

発行年月日 昭和61年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

